

# 魔法少女リリカルなのは～幻英の書～

零騎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある孤児院で子供たちの面倒をを見ながら平和に暮らしていた青年がいた。

だが、とある事件に巻き込まれ彼は死んでしまった。

本来ここで死ぬはずのない彼は神様により転生することになる。

彼は、手にする。

白金色の宝石と王冠の鍵、そして英霊と幻想となった者を繋ぐ魔導書を手にし、

海鳴市に・・・

無印編突入！

転生した白銀朱奈は妹の白銀直葉は原作キャラのいる聖祥大付属小学校に入学。

それぞれ3年と4年生になり平穏なセカンドライフを満喫している。

・・・少し転生者の数が多く踏み台のような転生者がいるが・・・

しかし、そんな生活も段々崩れ、原作が始まる。

それともかなり本来の原作とは違う道へ・・・

幻英は何を見るか・・・

※タイトルを変更しました。

# 目次

プロローグ 1	1
プロローグ 2	5
無印前	
1 話	12
2 話	23
3 話	32
4 話	46
5 話	55
6 話	68
7 話 (OVA 風)	81
無印編 「桜龍と金創×幻英と正義」	
1 話 「幻英と二つの不屈」	84
2 話 「龍帝と魔法少女と鎧と黒猫」	98
3 話 「紅白と白黒×剣は投げる物」	108
4 話 「泣いていいのはベッドか兄の中で」	119
5 話 「搜索、闇の炎は星になる」	128
6 話 「闇は幻想を殺し、一本道を作る」	137
7 話 「最悪と死、幻英と抜け殻」	146
8 話 「光と闇、悲しみと怒り」	162
8・5 話 「あたしって、ほんと単純」	177
9 話 「銀と黒の獣 前編」	187
10 話 「銀と黒の獣 後編」	199
11 話 「全てを開き、全てを閉じる」	212

12話 「月村邸、話をし☆よ☆う」

13話 「日課とこれから」

13・5話 「朱奈の忙しい休日」

220

233

242



みに染まっついていて青年は少し理解した。

青年「(そうだ・・・あの目はわかる・・・あの子は『最初にあつたあいつらと同じ目』している・・・)」

とそれを理解した青年がとる行動はいつも一つだった。

青年は少女に近づいた。

そして、優しく頭をの撫でながら抱きしめた。

少女? 「ヒヤツ!? あっ・・・えっ・・・?」

青年「君が今なぜ泣いているかはわからない。どうして僕に謝っているのも。何に對して怖がっているのも。だけど、君がそんな目をしてはいけない。いや、させない。」

少女? 「えっ? あっ・・・えっ?」

青年「君みたくないな子がそんな顔をしてはいけない。そんな・・・そんな『目』をしてはいけない。だから、笑って。今はいっぱい泣いていいから、最後には笑ってほしい」

少女? 「だって・・・わたしのせいで・・・みんなを死なせてしまつて・・・すぐくおこつて・・・なぐつたりして・・・わたしがわるいから・・・」

青年「たとえそうだとしても、君みたくないな子がそんな顔をするのは間違っている。それに君みたくないなかわいい子を殴るとかそいつ頭おかしいんじゃないか?」

少女? 「え!? か、かわいい!」

よく見ると右の頬が赤く腫れ唇を切ったのか少し血が出た跡がある。

青年「(こんな子に暴力振るとか何考えてるんだ・・・たとえ死なされたとしても・・・ん? 『死なせて』しまった?)」

青年「ねえ、さっきの死なせてしまったっていうのは」

と少女の顔を見ると

少女? 「あうあうう・・・かわいい・・・あうう」

顔を赤らめ俯いていた。

青年「お、おい聞いているか? おくい!」

少女? 「はうう!? え、えつとなんでしようか!」

青年「い、いやさつき言っていた死なせてしまったというのは？」  
と聞いた途端また暗い顔をしながら語り掛ける。

内容はまとめると

- ・少女は見習い神様で地球の一部の人たちを管理している
- ・僕を含めた5人は本来の寿命よりも早く死んだ
- ・死んだ原因は少女が寿命を管理する書類に飲み物を溢してしまっ  
た

・それにより寿命にバグが生じ今に至る

青年「へえ〜というか寿命つて書類でできている所はツツコムベキ  
か・・・」

人間の命軽すぎませんか？

少女？「それでさきにきた4人のうちの1人がすぐくおこりだし  
て・・・3人はないたりこんらんしてたのですがすぐに落ちついたの  
ですがその1人がなぐったりけったりしてきたのです。すぐにかわ  
りの人が今話をしているのですが・・・あう・・・」

とても落ち込んでいる・・・  
まあ、気持ちがわからなくてもない。怒ったり、慌てたりするのもわ  
からないわけではない。だが。

青年「それでも、君に暴力を振るっても何も解決しないだろ・・・」

少女？「わたしのせいなのです・・・わたしの・・・うっ」

青年「(はああくここまでするほどでもないでしよ〜)とにかく今は  
好きだけ泣きなよ、じやなきやもたないよ」

少女？「うううツうわああああああん！」

とりあえず彼女の頭を撫で、抱きしめながらなきやむのを待つこと  
にした・・・

寝てしまった・・・

少女？「すうーすうー」

青年「あちやくどうしよう(汗)」

泣き疲れたのかぐっすり寝てしまっている。

青年「でも、この後僕はどうなるんだ・・・」

？「それについては私が説明します」

!!女性の声がしたほうを向くとそこには・・・

？「私のは名前はアテナ。私の娘が世話になりました。どうもありがとうございます。」

そこには少女と同じく金髪に白い肌の女性がいた。

少女と違いとても美しくまさに女神のような人がそこに立っていた。

青年「あ、いえ自分は何も・・・」

アテナ「そんなご謙遜な事を言わないでください私の娘のレイヤの事を気を使って下さっていたら私もうれしいです。」

こうまで言われるとすごく照れてしまう。

青年「本当にお礼を言われるほどではないですよ。いつもこういうことをしていましたから。」

アテナ「そういえばあなたは孤児院で子供たちの面倒を見ていましたね。それにあなた自身も・・・」

アテナはそこで口をつぐんでしまう。

青年「まあ、気にしないでください。それよりもこの後の自分はどうすればいいんですか？」

アテナ「ああ、そうでしたね。それでこれからなのですが、あなたは本来よりも早く死んでしまったため天国にも地獄にも行けません。」

そこから一息はいて彼女は言った

アテナ「なのであなたには転生していただきます。」



## プロローグ2

転生、それは生まれ変わり新たな人生を歩むこと。

青年は孤児院の神社で暮らしているため自分用の部屋がある。そこにはもちろん彼の趣味や物がおかれている。

青年はゲームやアニメが好きでパソコンとテレビを自分の部屋にしっかりと置かれていた。もちろん孤児院とは関係なく自分のお金で買った物であるためあまり多くは買っていないがそれでもパソコンとテレビはどうしてもほしかったため何年もかけてお金を貯めていた。

青年「転生ってよく2次小説とかでよくあるやつですか？」

アテナ「ええ、あなたには『魔法少女リリカルなのは』の世界に行ってもらいたいと思います」

おお、あの【管理局の白い悪魔】がいるあの世界にか・・・ていうか

青年「アニメの世界に行けるんですか!？」

アテナ「はい、あの世界もあなた方からすれば創作物の世界にしか思いませんが本来は存在しています。ただこの世界は様々な世界と融合しているため少しだけあなたの知っているリリカルなのはとは少し違うと思います。」

なるほど、つまり他作品もかかわってくるかもしれないのか・・・

まんま2次小説のテンプレだな。

レイヤ「ううくん・・・はうう・・・?」

あ、レイヤが起きた

レイヤ「はうう!?!つい寝てしまったのですう!?!」

青年「おはよう、もう大丈夫か？」

レイヤ「はうあううくお、おはようございますなのですく」と耳まで赤くしながら青年から離れた。

そういえば前回から抱きしめたままだった・・・

アテナ「レイヤよかったですね。彼の腕の中でぐっすりと眠れて。」

レイヤ「お、お母さま!?!あうあうあうく」

レイヤはアテナがいることにびつくりしながらも彼女の発言にさらに顔を真っ赤にしながら俯いた。

青年「ええくと、とりあえず僕はその世界に行けばいいんですよ？」

アテナ「あ、ええそうですね。ですがそのためには色々準備をしないといけません」

と言ってアテナは腕を横に振ると青いパネル状なものが浮かびます。

アテナ「あなたにはその世界に行くための容姿、名前、そして特典を選ばなければなりません」

青年「ん？普通容姿とかも特典に入りませんか？」

アテナ「別の神様でしたらそうなりますが私は違います。それと私の特典にはデメリットが付きますので特別に容姿は別になったのです。ちなみにあなたは魔力限界をなしにしてあるので努力すれば魔力EXも可能です」

なるほど何事も努力あるのみか。ていうかデメリット？つまり得るときに何か制限が付くという事か・・・

アテナ「デメリットは得た特典によって付く物と付かない物もあります。例えば、王の財宝はもちろんデメリットが付きます。中身が空とか、Eランクの宝具しか持てないとか基本はランダムですが、あなたは自分で選択できるようにしますね。それと本来選べる特典の数は3つなのですがあなたには7つ選ぶことができます！」

・・・マジか。

7つも選べるのか。ていうか。

青年「なぜそんなに？」

アテナ「3つはレイヤからのサービス。1つは私からのサービスです(ニコツ)」

と人差し指を口につけながらこちらに微笑むのでドキツとしてしまった。

レイヤ「うううううう」

レイヤの目が怖い、完全に怒った顔をしている。なぜだ・・・

青年「と、とりあえず容姿はそちらで任せます。特典の方は少し時間をください。」

アテナ「ええ、決まったら行ってくださいね」とりあえず考えるか。

15分後

青年「決まりました」

アテナ「はい、それではどうぞ」

アテナは青いパネル打ち込む準備する

青年「まずデバイスを3つください。それぞれミッド式のインテリジェントデバイス。近代ベルカ式のアームドデバイス。そして旧ベルカ式のストレージデバイスをお願いします。」

アテナ「それぞれ別でいいんですか？」

青年「はい、これにデメリットはいりますか？」

アテナ「これだけならば別にデメリットはいりません。それぞれ要望の形はありますか？」

青年「インテリジェントデバイスは宝石型で、アームドデバイスはペンダントで形は任せます。ストレージは夜天の書に近いプログラムのデバイスで、守護騎士と管理人格プログラムはほしいです。」

アテナ「わかりました」

青年「2つ目は魔法、デバイスの知識。3つ目は解析と作成の力をください。」

アテナ「なるほどそのために3つのデバイスでしたか・・・そしてら両方ともデメリットが必要ですね。」

青年「それなんですアテナさんに任せてもいいですか？」

アテナ「よろしいのですか？」

青年「むしろお願いします。」

正直考えられなかったから特典に詳しい女神様に頼んだほうがいいと思った。

どんなことも専門家に任さすべきだな。

青年「それから4つ目以降から神様に任せます。」

アテナ「え？よろしいのですか？あと4つ好きに選べるのにこちらに任せて？」

青年「元々3つまでですし、正直7つもあると決められないので。」

正直多いと思った・・・

青年「あ、それと特典とは関係ないのですが原作知識をなくしてもらってもいいですか？先がわかるのはなんか面白くないですし。」

アテナ「ですが、原作知識があれば介入する時に有利になりますよ？」

青年「原作介入するかわからないですし、そもそも原作通りに進むかもわからないのでそれならいっそ消したほうがおもしろそうだと思いますので。」

アテナ「わかりました。それでは先ほどの3つの特典に合わせて残りの4つを選んでおきますね。それと原作知識を消去つと・・・」  
と言ってパネルを操作し終えたアテナはこちらの方に向き直し。

アテナ「それではこちらに来てください」

そこには大きな扉がありそれが目の前でゆっくりと開く

アテナ「ではこちらの扉をくぐっていただくとあちらの世界に行けます。」

青年「ありがとうございます。色々としてくださって」

アテナ「いえ、むしろこちらがお礼を申したいくらいです。」

レイヤ「お兄さん！本当にありがとうございます！」

とりあえずレイヤも笑顔になってよかった・・・

アテナ「それとあちらの世界でもこちらと連絡取れるようにデバイスに設定しときます。何かあった場合こちらにいつでも連絡してください」

おお、いつでも連絡できるのはうれしい・・・

青年「なんか至れり尽くせりですね・・・」

アテナ「うふふ、新しい人生をどうか楽しんでください。」

よし！行くか！！

こうして青年の・・・白銀 朱奈くシロガネ シユナへの新たな人

生が始まるのだった・・・

アテナ side

アテナ「さて残りの特典も任されましたので早速考えましょうか・・・」

まさか、特典をこちらに任されるとは思いませんでした・・・

レイヤ「お母さま！3つは私が選んでもいいですか？」

アテナ「そうね、元々3つ分はレイヤからの贈り物ですしレイヤが選んでいいですよ。」

レイヤ「はい！頑張るのですう！」

そう言ったレイヤは気合を入れた感じで両手をブンブンと振りながら作業に取り掛かった。

1時間後・・・

アテナ「これは・・・ちよつと・・・」

レイヤ「あういゝやりすぎたのですう」

これは・・・事前に準備をしないといけないですね・・・

こちらは私でどうにかするとして、こっちは一度あちらとコンタクトを取らなければ・・・

するとそこに一人の男が入って来た。

??? 「アテナ様先ほどの4人を無事転生いたしました」

アテナ「そうですか、そちらを任せてごめんねクロノス。」

クロノス「いえ、レイヤ様は大丈夫でしたか？」

アテナ「ええ、この通り」

レイヤ「はいなのです！」

大きく手を挙げながら笑顔で答えるレイヤ

アテナ「そういえば彼らはどの世界に行かれたのですか？クロノスに任すように言ったのだけど・・・」

クロノス「彼らの希望も有りこちらの世界に」

とクロノスは青いパネル出現させこちらに見せる

アテナ「・・・まずいですね」

まさか彼と同じ世界になってしまったとはしかも中々のチート  
を・・・あら？

アテナ「これデメリットの内容が書かれていないのですか？」

クロノス「え？ないですよ？」

アテナ「え？」

クロノス「え？」

レイヤ「ほええ？」

これは・・・彼の特典を直す必要がないようですね・・・というよ  
りももう少しじじってしまえますか！

冷や汗書きながらレイヤと共に特典の編集に励んだ。

その時のことをクロノスが「初めてあんな満足した二人の顔を見た  
のは初めてです」と言っていた。

??? side

とある屋敷にて・・・

??「??様少しよろしいでしょうか？」

???「あら??どうしたの?・・・あらその手紙は?」

??「はい、それが宛名のところに女神と名乗る者からの手紙で  
す・・・」

???「女神？」

??から受け取った??はその手紙を見て最初は驚きつつもその顔は  
だんだん笑みに変わる。

???「あら、中々面白い内容ね。」

??「あの、??様それにはいったい何が・・・」

???「あなたはまだ知らなくていいわ後で教えてあげるから。さてそ  
れじゃあ私はこれから少し出かけるから留守を頼むわよ。」

??「はい、わかりました。」

?? ???  
「行ってくるわ。藍」  
「行ってらっしゃいませ。紫様」

## 無印前

### 1話

朱奈 s i d e

「そうか・・・俺は転生したのか・・・」

3歳になった彼はこれまで女神の時の記憶が蘇った。3歳の誕生日になった途端に頭の中に今まで忘れていた前世の記憶と死んだ後にアテナとレイヤの記憶が頭の中に入って来た。

最初は強い頭痛がし吐き気があったが、徐々に平気になり今ではむしろ体が軽くなり自分の内側から強い『なにか』がみなぎって来た。

時刻は深夜1時、今この家には僕しかいない。母は小さい頃にすでに他界。父は今日は臨時の仕事があるため今日の朝まで帰ってこないし家政婦もさすがにこの時間にはいない。

まあそのほうが動きやすいがそれよりも一つ、気になることがある。

「え？何この知識、多すぎじゃね？」

今一度自分の中に入った知識を確認する。

うん・・・多すぎる・・・

よく頭がパンクしなかったな。とりあえず色々確認しないといけない。とりあえず手掛かりになるものを探す。

するとベッドの横にある机に大きな箱がおかれている。

そしてその箱の中を開け中身を確認する。

「これが俺のデバイスカ・・・」

そこには3つのデバイスがあった。一つは白金色に輝く丸い宝石。もう一つは王冠の形をした銀のペンダント。そして最後に金色に黒い線に銀の剣十字がある分厚い本があった。

「本当に3つもデバイスを作ってくれたのか・・・」

作るの大変だったんじゃないかな・・・てかほとんどの事アテナに丸投げしたしな。



「つてそんなこと言ってもしょうがないか。とりあえずあの本に魔力を注げばいいんだな」

転生する前にアテナにストレージデバイスに少し魔力を注いでくださいと言われたので行おうと少し本が光りだし、その後聞き覚えのある声が聞こえた。

『あくあく、もしもし朱奈さん聞こえますか?』

「その声はアテナさん!」

『あ!聞こえますか、よかったです。』

ホログラムのようなものが出てきてそこからアテナの姿が見えた

『とりあえず無事転生できたことで何よりです!』

「はい、おかげさまで何とか転生できました」

『それは良かったです。・・・ツといたいところですが少し問題が発生しました』

「問題?」

『はい、実は転生の特典なんですけど先ほど代理で4人を転生させた人から報告を受けたのですが、4人とも特典にデメリットがない状態で転生したみたいです』

「えくと・・・つまりは全員チート使いと」

『それなんですけど全員この世界でいうレアスキルや魔法、デバイスの力でどうにかなるので問題ないです。しかし・・・』

「しかし?」

『私の娘に暴力を振るった輩は相当卑しい特典を頼んだのですが・・・【ニコポ・ナデポ】と【無限の剣製】、そして【魔力EX】を要求したらしいのです』

「うわゝ(呆れ)」

完全に踏み台じゃないですかヤダゝ

てか、そんな能力頼むやつ本当に要るんだな・・・

「まあ他の転生者とか正直どうでもいいからな?」

別に4人だけだし関わらなければ問題ないだろ。

『それがそうとも言えないんです。実はこの世界にまだ私たちの他にも転生した神がいるらしいのです・・・』

・・・は？

「え？じやあここって転生者だらけの空間ってことですか？」

なんか転生者の留置所みたいだ。

『いえ、そんなに想像する以上にはいいですよ、それに転生するのも今ではなくある一定の期間で来るらしいです。今は私の方であなたを含めた5人と他の神から6人、合計で11人いることが確認されました』

「いや多すぎでしょ!？」

11人って・・・しかもこれからも増えるってやばくないか？

『なので少なからず巻き込まれる可能性は高いです。さらに過去の経験から転生者同士の殺し合いがあるかもしれないですし・・・』

うそだろ・・・巻き込まれたくないなあ・・・できれば平穩に暮らしたい・・・

『なのでこちらもそれなりに強く、そしてあなたらしい特典を付けました♪』

・・・何だろうすごく嫌な予感がするんだが・・・  
『では今から表示させますね・・・こちらです!』

白銀 朱奈 (シロガネ シユナ)

種族 人間

性別 男

年齢 3歳

魔力 ランクAAA

霊力 ランクA+

妖力 なし

神力 なし

魔術回路 メイン50

## 使用魔法

ミッドチルダ式 古代ベルカ式 近代ベルカ式

## 特典

### ・デバイス

・インテリジェントデバイス（ミッド式）、アームドデバイス（近代ベルカ）、ストレージデバイス（古代ベルカ）  
ストレンジデバイス：管理人格（ユニゾンデバイス）

### ・次元世界すべての知識

：原作関係の知識は無し

### ・解析と作成の力

：レアスキル『ANALYZE（アナライズ）』

・fateシリーズのサーバントの具現化または能力、スキル、宝具を【借りる】力

：ストレンジデバイスに記されたサーバントの力を借りることができる。借りる際サーバントとの絆に合わせて機能が解放される。サーバント側からの召喚拒否も可能。召喚時は令呪による命令が3回できる（3回使用後は魔導書に戻る）

## 記載サーバント

セイバー ネロ・クラウディウス

アーチャー エミヤ

ランサー クー・フリーン

ライダー メドゥーサ

アサシン ハサン（山の翁以外）

キャスター メディア

バーサーカー ランスロット

ルーラー ジャンヌ・ダルク

全サーバント絆level1

使用可能機能 『限定展開（インクルード）』

：サーバントの武具を召喚可能 使用回数1日1回

・東方Projectのキャラの能力、道具、スペルカードを「借りる」力

：ストレンジデバイスに記された幻想郷の住人の力を借りることができる。借りる際幻想郷の住人との絆に合わせて機能が解放される。一部の道具のみ制限無視で転送可能。幻想郷の住人側からの召喚拒否も可能。

記載住人（種族別）

博麗霊夢

霧雨魔理沙

八雲紫（仮契約）

八雲藍（仮契約）

橙（仮契約）

レミリア・スカーレット

魂魄妖夢

全住人絆level1

使用可能機能 『程度結合（アクセス）』

：住人の＜程度の能力＞が使用可能 使用回数1日1回

・キングダムハーツの能力

アームドデバイスに付けられた能力。キーブレードがデバイスとなりキーホルダーを変えることでキーブレードの形が変化する。魔法、アビリティの使用可能。

「キーブレード」

キングダムチェーン

「キーチェーン」

スターライト

スターシーカー

デステイニープレイス

アースシェイカー

レインフォール

フレッシュブリーズ

現在使用可能機能

【ドライブ】

ブレイブフォーム

- ・高性能のインテリジェントデバイス
- ・女神より作られた超高性能デバイス。

・・・なにこれえ？

『どうですか？何か足りないところがございましたか？』

「いやむしろありすぎでしょ!？」

明らかにバグチートってレベルだろ!？」

「ていうか【借りる】っていうのがいまいちよくわからないのだが・・・」  
『それなのですが。あなたの性格に合わせて使えるよりも借りるの方が良いと思いましたがこのようにいたしました。あ、ちなみにここに記されている方々には全員了承済みです!』

まあ、個人的に他人の能力を勝手に使うより許可を得て借りるほうがなんか罪悪感がないし・・・それでいいか・・・でも。

「KHのは完全に勝手に使っていませんか？特に「キーチェーン」の項目は」

『あ、それも了承済みですし。元々朱奈さんはキーブレードの才能があったので、あとは私が無理やり使えるように弄っただけですのうん、さらつと怖いこと言わないで」

弄ったってなんだよ

「なんか自分が人外って言われても仕方ないと思ってきたな」

『・・・』

うん？

「アテナさん？」

『な、なんでしょう?』

「まさかだとは思いますが僕人外じゃないよね?」

『もちろん今は人外じゃないですよだって種族の項目に人間って書かれているじゃないですか!』

「あの・・・魔力と霊力以外に人間が確実に持っている物がなんで表記されているんですか?」

『そ、それは（汗）』

……まさか!?

「人間以外の種族になれるなんてないですよね……」

『……』

目標沈黙、【黒】です。

「なれんのお!!?」

『お、落ち着いてくださいなれるというかそういう機能を授けたというか……』

「い、いやでもなんで……」

『……ストレージデバイスに登録されている方々をみていただければわかりますが、人外が存在するのでそれに合わせた体がないといけません……』

ああ……うん……

『いくら強くなっても体の構造が元々違うと拒否反応が起きますので、朱奈さんには3つの形態になれるよう調整しています。ちなみに今なれるのは【妖怪化】でイメージは吸血鬼にしました。』

「そうか……まあわかりました……」

『では一旦切りますね。インテリジェントデバイス起動後にストレージデバイスを起動してください。アームドデバイスは一通りでできていますので後はバリアジャケットのみです』

「はい、ありがとうございます」

とりあえず順番にデバイスを起動するか……

「まずはインテリジェントデバイスから……」

そういい、朱奈は宝石に手を当て魔力を注ぎ込む

《stand by:stand by:》

宝石は輝き、そこから女性の声が聞こえた

《起動を完了…周囲に使用適任者を確認あなたが私のマスターですか?》

僕はその声に聞き惚れてしまいそうになるがすぐに答えた

「うん、僕からも聞いてもいい?君は僕のデバイスになってくれる?」  
《ふふふ……あなたが女神に頼んで私を作ったのにそれを聞くのです

か?》

た、確かにその通りだ・・・

と僕が苦笑いしていると。

《yes、私はあなたのデバイスです。そしてあなたは私のマスターですよ》

「そうか、よかった・・・」

《それでは今から私の名前、それとバリアジャケットと杖をマスターに作っていただきます》

「了解、マスター登録! 白銀 朱奈! 愛称は今後決めるとして・・・正式名称はシャイニングハート! セットアップ!!」

《All right. Stand by Ready. Barrier Jacket, set up.》

光が僕を包み込みそしてその後に移った自分の姿を鏡で確認する。

黒に白の線が入ったインナーシャツに白の長ズボン。その上に白に銀のラインが付いた膝下まであるフード付きのロングコート。全体的に白がメインでところどころに黒と銀それと袖と襟が青く胸に赤い線のあるシルバープレートがある。

右手には白い宝石が付いた杖があった。

「おお、これはすごいな・・・」

思わず鏡に映る自分を見ながらつぶやく。

《お気に召したようで何よりです。それよりこのあとやらなければいけないことがあるのでは?》

「ああ、そうだ。あの魔導書を起動しないと・・・補助頼める?」

《ええ、もちろん》

そういつてそのまま魔導書の軌道に取り掛かる。

.....

《魔導書起動。管理者人格プログラム起動》

「よし起動した」

《なんかやたらと起動するのにアクセスパスワードがひつようでしたね》

「シャイニングハートみたいに魔力注げば起動できるようにすれば楽

なんだけどなんせ中身があれだし・・・」

まあ、正直これロストログアっていう持つてるだけで犯罪みたいだし、嚴重に管理できてるだけいいとするか。

と考えてる間に・・・

「管理人格プログラム、正常に起動しました」

「!？」

その声を聞いた途端すぐさま声の聞こえたほうを向くと

「レイヤー！なぜ管理人格プログラムに!?!?てか色々なんか変わってない!?!?」

どう見ても声や顔はレイヤーにそっくりだが肌の色が少し日本人のような肌をしていて髪が金から白になっていた。

『ほうはうううレイヤーはここなのですうう!』

と急に目の前にホログラムが出現しそこには金髪の転生前にあったレイヤーの姿が現れた。

「え!?!?ていうことはここにいるレイヤみたいのは・・・」

『はい！私をベースに作られた管理人格用のユニゾンデバイスなのです!』

「はい。わたしはこの本の管理をさせていただく人格プログラムのユイです。これからよろしくお願いします。」

「う、うんよろしく」

「・・・あの何かご不満がございましたらお申し付けただけならば、実行いたしますが・・・」

「あーいやそういうわけじゃなくて。正直驚いただけだから大丈夫だよ。」

「そうですか・・・それではこの本に名前を付けてください。それと何かご希望がございましたら言っていただけでもかまいません」

「うくんじゃあこの本の名前は幻英の書。幻想の幻に英雄の英で。それと・・・」

「・・・はい、どうしましたか?」

「僕のごことは名前で呼んでほしい。後できれば他人行儀みたいな敬語も。」



「え？」

「だめかな？」

「い、いえ決していやというわけではないのですが・・・その・・・よろしいのでしょうか」

身長差もあって少し上目遣いになって言った。うん、可愛い（確信「もちろん、むしろ僕の方から頼んでるんだからね。それじゃあ、これからよろしくねユイ」

「は、はい／＼／＼」

そういつてユイ顔を顔俯きながら顔を真っ赤にした。

ん？やっぱり初対面から名前呼びは恥ずかしいのかな？てかレイヤさんさつきから「うううう」ばかり言っ僕を睨んでくるんだが、僕何かしたかな？

《（どう見てもフラグを立てたようにしか見えないのですが・・・そういえばマスターは孤児院出身でしたっけ？そのせいでこんなにも鈍感なのですかね・・・）》

「そ、それじゃあ今からしゅ、朱奈さんの守護騎士を召喚しますので少し離れてください」

「うん、わかった（さん付けだけでもまあいいか。今後なれると思うし）」

「それでは。管理人格権限発動。デバイスの起動を開始」

《起動開始・・・起動中・・・起動完了。》

「正式名称を幻英の書に。管理人格プログラムユイによって、守護騎士システムを起動」

《了承・・・起動中・・・完了》

「それでは・・・守護騎士シャーテンリッター起動」

それと同時にベルカ式の三角形の魔法陣が朱奈を中心に展開される。

魔法陣の色は白銀色。そこから四つのベルカの魔法陣が展開し守護騎士が姿を現す。

1人は青い目に金髪ショートボブで頭にヘアバンドのような赤いリボンが巻かれて、青のワンピースのようなノースリーブで、ロング

スカート。その方にはケープのようなものを羽織っている。

1人はこちらは青い目に銀髪のボブカットでもみあげ辺りから三つ編みを結んび髪の前にはリボンをつけており、青と白のメイド服は長袖膝上で腰に銀色の懐中時計があり頭にカチューシャをつけている。

1人は金眼にピンク色のツインテールでリボンで結んでいる。露出が多めの、青を基調とした和装を身に纏い、狐の耳と尻尾を持っている。

1人は碧眼に金髪を後ろで結び上げ、青と銀の甲冑の足まであるスカートのドレスを着ている。

4人の女性を見た朱奈はその人たちを見てすぐに彼女たちの名前が浮かび上がった。

「私たち、幻英の主の下に集いし騎士」

「主ある限り、私たちの魂尽きる事なし」

「この身に命ある限り、私たちはご主人様の下にあり」

「私たちの主、幻英の王、白銀朱奈の名の下に」

「人形の騎士」 アリス・マーガトロイド

「時の騎士」 十六夜咲夜

「呪詛の騎士」 玉藻の前

「円卓の騎士」 アルトリア・ペンドラゴン

この日朱奈の新たな出会いの始まりであった。

## 2話

凜side

朝5時、とある家の門の前に男性が現れた。

白銀 凜（シロガネ リン）

彼は普段、とある会社で社長をしており今日は大手企業とのパーティーに秘書と共に参加していた。

因みに最近、彼は自分の秘書との関係が良好で会社の部下たちから温かい目で見られることが多い。

二人の関係が発展しているのには理由がある。それはお互いに妻、夫を亡くしておりそして互いに子供が1人いる事で意気投合した。

二人とも自分の子供にもものすごく溺愛し、朱奈は元々妻の方に似て凜も昔は女と間違われるほどの美形でその二人の血を継いでいるためか最初生まれたとき本当に男かと疑われるほどだった。

彼女の娘も相当溺愛しており、時々自分の子供のいい所や可愛い所を言い合って盛り上がる時がある。

そして今回のパーティーの終わりに二人で静かな夜を過ごしました距離を縮めて再婚するかまでの話まで発展した。今日は互いの子供に話す用に決め凜は朱奈がどんな表情をするのか楽しみにしながら帰宅した。

この後家族が増えていることを知らずに……

朱奈side

……1週間後

覚醒し幻英の書が起動して1週間がたった。

現在午前5時半、今僕は外に出て日課のランニングをしている。前世の時からこの時間に起きて走っていたためそんなにきついとは感

しない。

今自分は海鳴市の街の丘の上にある神社に向かって走っている。

二人で。

「マスターあと少しです。頑張ってください」

「うん、アルトリアは大丈夫？」

「はい、問題ありません。私は騎士なのでそれなりに鍛えてありますから」

知ってる。そしてあなたがブリテンの騎士王であることも・・・

現在アルトリアと共にトレーニングを行っている。シャイニングハートに頼んで体に負荷をかけさせながら走っている。

今体に20kgの重りを付けている状態である。

あの後アテナの助力を得て父さんに所々ごまかして騎士たちはアルトリアは社長の息子である僕の護衛の為、アリスはアルトリアの姉でドールショップを営んでいるが住む家を探していた為ここに家政婦として頼んだ為、咲夜は朱奈の専属メイドの為、そしてタマモはペットとして一緒に暮らす許可を得た。

タマモは「そこはタマモは良妻でいいじゃないですかー！」と言っていたが無視だ。

そういえばその後父さんから「妹ができるかもしれないぞ」と言われたがという事は再婚するのか？てか相手も1人で子供を育てているってことはシングルマザーって事か、しかも父さんの秘書って相当地社でイチヤイチャしてたな父さん・・・

《マスター到着しましたがいつも通り結界を張りますか？》

「ああ、頼むね」

「では、いつも通りの稽古を」

「うん、じゃあやろうかアルトリア」

そう言っただけでシャイニングハートに結界を張ってもらって首に付けた王冠のペンダントを掴みながら告げる。

「それじゃ始めよう。＜キープブレード＞！セットアップ!!」

そう言っただけでアームドデバイス。＜キープブレード＞のバリアジャケットを展開する。

バリアジャケットは黒のファスナー付きのインナーに裏地はが赤く袖の下辺り市松模様のある長袖の上着を着て、ズボンは上部が黒で下部が白色といったデザインの長ズボン靴は黒色で赤いベルトがついている。右手には市松模様のリストバンドと中指と人差し指に白と黒の指輪を付けており、左肩に肩当が付いている。

手にはウォード錠型をモチーフにした鍵の形をしており、金色の持ち手に銀色の刀身となっていて、そして先端の凹凸は王冠を用いた物となっている。

「それでは始めましょうか、マスター」

そういつてアルトリアは右手に剣の形をしたネックレスを持ち展開する。

守護騎士であるアルトリア、アリス、咲夜にもそれぞれデバイスを持ちそれぞれ自分に用いたデバイスをアテナより受け取っている。

アルトリアはバリアジャケットである騎士甲冑を身に纏い左手に光り輝く剣を構える。

「今日は風王結界（インビジブル・エア）はしないの？」

「そうですね、今日は私もこの＜カリバーン＞でどこまでいけるか試そうと思うので。その代わりに今日は全力で打ち込ませて頂きます」「り、了解」

そうして二人の稽古が開始された。

「・・・今日は一撃しか与えられなかった」

「ですが以前に比べてとても重かったですよ」

「そうは言ってもまだ一撃しか・・・」

「寧ろ守護騎士になったとはいえ英霊である私にその歳でここまでできる方がおかしいのですが」

「やっぱり3歳の体ではできないことは限られているか・・・」

「そうですね、今できることは体を鍛える事と魔法を及びレアスキルの練習、それと私たちとの模擬戦ぐらいですね。幸いマスターは元々【流派】もあるみたいですし」

「あれは流派といっても自分で勝手に前世の時に作った者だし、そも

そもあれ僕しか使えない物ばかりだし」

「そもそも流派は一般的に習うものをマスターは基本的なところ以外は全部我流ですし、「あれ」を真似ろというのは無理があります……」

「まあとりあえず今日はもうそろそろ帰ろう。そろそろ朝食ができてると思うし」

「そうですね！それでは帰りも走って帰りましょう。全速力で！」

「う、うん」

本当にアルトリアは飯になるとテンションがおかしくなるよなく  
そう考えつつ二人は足早に神社を出て行った。

「朱奈様、紅茶のお替り入りますか？」

「うん、頂くよ」

「それにしても咲夜さんの紅茶は本当においしいね」

「ありがたきお言葉です。凜様」

現在朝食を終え、食後の紅茶を飲んでいる。

白銀の家は他の家に比べて大きく、庭があつて他の人から見れば豪邸のようだ。部屋もそれなりにあり、父さんの部屋、自分の部屋、アリスとアルトリアの部屋、咲夜の部屋と別れそれ以外にも空きの部屋がある。

さらに母さんが本が好きだった為家の中には書庫のような場所もあり、また朱奈が生まれる前まで色んな所にいった時の物が置かれている物置などもあり、地下も存在する。そういった意味でも朱奈はまだこの家の一部しかまだ知らないほどこの家はとても広い。

「そういえば今日はリンとシユナは出かけるのですね」

「ああ、今日は近くの喫茶店で卯月と待ち合わせしているんだ。今日は互いに子供を紹介し会おうと思ってるね」

「確か名前は直葉でしたよね。朱奈もよかつたわね、妹ができて」

アリスはニコニコしながらこちらを見て言った。直葉という子もとても元気な子だと聞いた。

「そうだね、どんな子かは知らないけどとても良い子だったのは聞いたよ」

「それはとても楽しみです。それでしたら今日は昼食はどうなさいますか？」

「ああ、今日は外で卯月たちと取るから、今日は咲夜とアリスは休日にして羽を伸ばすと良い」

「そうだね、咲夜とアリスにはいつも家の家事を任せているし今日はゆっくりしなよ」

「わかりました。そしたら今日は休ませていただきます。アリスとアルトリアも今日は私たちも外で食べに行きますか？」

「良いわね、行きましょう」

「私も構いません」

「それじゃあタマモも連れてって食べられる所にしましょう。その方がタマモも喜ぶでしょう」

そう言つて咲夜はタマモを呼びに行った。タマモは昨日まで地下で〈陣地作成〉を行っている。理由は他の転生者のための対策としてこの家の防衛を完璧にするために行っている。だが、タマモ自身は陣地作成のランクが低いので今メディアと共に作成を行い今では神殿クラスの家になっている。

今は疲れて休んでいる所だろう。これでこれから家族になる卯月さんと直葉ちゃんに迷惑はかからないだろう。

さらに比較的家にはよくアリスがいるし、アルトリアという護衛もいる。もしもの時は咲夜もいるし問題ない。とりあえず後でタマモにはお礼を言わないと。

「それじゃあそろそろ行くかうか」

「うん！」

ある程度支度を済ませて出発した。

直葉 side

私の名前は武内 直葉・・・いや今後は白銀 直葉（シロガネ スグハ）になります。

なぜかって？それはお母さんが再婚をするからです。

あ、因みに私は「転生者」です。

前世の記憶？のようなものがあるからたぶん間違いないです。私は前世では病院生活を送り16歳になってまもなく死にました。

そしたら急に真つ白な部屋の中で自分は天使と名乗る人にあつて転生する事になりました。神様に転生先が『魔法少女リリカルなのは』の世界に転生すると聞いたときはすごく驚いた。私は病院でできることが限られていたから、よくアニメを見ていてその時の中で私は魔法少女系のアニメをよく見ていた。

リリカルなのはは無印までしか見れなかったのだけでもその世界に行けると思うととても嬉しい。そして神様は私に3つの特典を付けてくれた。

1つ目は「健康で丈夫な体」二つ目に「魔法の才能とインテリジェントデバイス」そして3つ目に「優しい家族」を私はお願いした。その中でも3つ目には私に兄が欲しいと神様に頼んだ所すごくニヤニヤされてしまった。い、今思うとすごく恥ずかしい／＼／

そういうことで私は転生したのだが、いざ転生したのはいいのだけど母と二人だけと聞いてあまりにも驚いた。私は生まれた時から前世の記憶を持っていたのだが生まれてすぐにお父さんが死んじゃつてお母さんが一人で私を育ててくれた。

私はデバイスを通じてどうなっているかを神様に聞いた所、3つ目は時期に起きるから少し待ってと言われた。

そして2歳の時にお母さんが私に再婚の話をした。お相手は同じ会社の社長でお母さんはその人の秘書でお相手の方は一つ上の男の子がいるそうだと私に言った。

すぐに特典の効果だと理解し、私も了承した。どうやらとても裕福な家で、メイドと家政婦にボディガード、ペットが一匹とても賑やかな家庭であった。なぜメイドと家政婦がいるのかと聞くとメイドの方は男の子の方の専属メイドらしい。だから家政婦さんと一緒に家の事を大まかにしているのだと。さらに家政婦さんはこの家に住んでいて自分自身もドルショップを開いているらしい。



何か絵に描いたような家庭だよね、普通こんな家存在するのかな？  
という事もあり今日はこの喫茶店で再婚相手であるお相手と会う  
のだが、いざ会うとなるととても緊張する・・・本当に優しい人なの  
か？、大丈夫なのか？と何度も考えてしまう。

そして今お相手の人と母さんが話している。名前は白銀凜。男の  
わりにはとても女顔でそれでも大人な男のような凜々しさもある人  
だった。話を聞いているとお母さんはとてもうれしそうな顔をしな  
がら会話をしていた。そして会話の矛先がこちらに向き。

「それでね凜ちゃん。この子が直葉ちゃんなの！ほら、直葉ちゃんご  
挨拶をして」

「う、うん！た、武内直葉と言います。と、よろしきゅ お、おねがい  
しましゅ！」

か、噛んでしまった・・・／すぐく恥ずかしい／  
「ふふッこちらこそよろしくね直葉ちゃん。こっちは内の息子の朱奈  
だよ。ほら、朱奈も挨拶」

と凜が挨拶するようにと私の1つ上の少年に言う。すると少年は  
直葉に向かって笑顔で挨拶をした。

「うん、白銀朱奈です！よろしくね直葉ちゃん！」ニコッ

「うッッあッよ、よろしくう、おねがいしいまあすうう・・・／  
うああああく恥ずかしいく／／こும்純粹な笑顔を向けられた  
のは初めてなのでとても恥ずかしく思う。」

朱奈と言う少年は見た目が中性的な顔で、髪もうなじが隠れるくら  
い長い黒髪に透き通るような黒目でとても綺麗であった。

これが俗にいう男の娘という奴だと直葉は思いながら、先ほど見せ  
た彼の笑顔に顔を赤らめている。単純にこれから兄になる彼の笑顔  
を見てとても可愛くそしてかっこいいと思った。

彼が兄でよかったと心底思い、心の中で神様に感謝している中ふと  
声が聞こえた。

《マスター少し彼の魔力を確認したところランクEでした》

「あ、うッうんありがとうフェザー。てことは転生者じゃないってこ  
とかな」

と言って翼の形をしたネックレス<シルフィードフェザー>に念話で話す。

《(いえ、それはわかりません。それに近くに微弱ながらデバイスの反応があります)》

〔えッ!?てことは近くに転生者がいるの!?!〕

《(それがわかりません、ですがこの微弱ですと遠くで見ている可能性があります)》

〔一応警戒をして、相手が動かない限りこちらから動かないでおこう〕  
《(All right, my master.)》

そう言っこのまま直葉とフェザーは会話に戻り四人で楽しく食事始める。

・・・その時朱奈の胸についていたペンダントが輝いていたことに誰も気づかなかった。

朱奈 s i d o

今朱奈は直葉ちゃんと会話しながら考えていた。肩のところまでに切られたダークブラウンの髪に翡翠色の目をした少女。

おそらく彼女は転生者だろう。彼女のネックレスがデバイスであることはキーブレードとユイが解析した。さすがに『ANALYZE』を使ったらばれてしまうから。

〔おそらく彼女は女神がアテナさんが言っていた別の神によつて転生されたものでしょう〕

〔みたいだねキーブレードからも彼女から魔力の反応があったから間違いないだろう〕

《(魔力ランクB、おそらくリミッターをかけているため推定でAA以上の魔力を持っています)》

〔彼女を解析したところ特典に「魔力の才能とインテリジェントデバイス」がありました〕

〔わかった、おそらく彼女は危害はないと思うから解析が終わり次第

ユイは帰っていいよ}

{はい、わかりました。それと・・・他の特典は後で説明しますね}

ふふツとユイの笑い声が念話から聞こえた。そんなに面白い特典なのか？

(まあ、いいか。彼女はアテナさんが言ってた原作介入するだろうけどまあ、何もなければ僕は介入しないし、僕は僕の暮らしをすればいいか)

と考えながら、楽しく食事をしていた。

その後、家でユイから直葉の特典を聞いた時思わず「可愛い特典だな」と言っつて頬を緩めながら夜の星を見ていた事は本人以外誰も知らない。

### 3話

朱奈 s i d o

あれから数年がたち僕は自分の部屋のベッドで夢の中にいた。  
ぐっすりと熟睡していると急に僕の体の上を何かが乗っている感  
触がする。

こんなことをする奴は一人しかいない。

「ご主人様く♪おはようございます♪」

「うく・・・タマモ起きるから、起きるから降りてくれ」

「い・や・で・す♪なぜならタマモ、ちよくと昨日ようやくこの家の  
結界だの工房など

の仕事がようやく終わってご主人様成分がた・い・へ・ん！不足し  
ているのでく今すぐ成分を摂取しているんです♪」

と言つて俺の体に密着していて、タマモの胸が押し当てられる。

前世では年上の人からそういうことをされていなかったので朱奈  
は赤くなりながら振り払おうともがく。

「イヤンツ♪マスターあまり動かないで下さいまし。服越しではあり  
ますがそう擦るなんて、マスターのエッチ♪」

「やめろ！今日は入学式なんだ！てか、そっちが擦ってくるんじゃない  
いかー！」

「だつてく前回私出番なかったんですよ。今日くらいマスターとい  
チャイチャヤしてもいいじゃないですか♪」

「前回ってなんだ！それに今まで一度もイチャついた事なんかない  
じゃないかー！」

という口論を続けていてこの状態を起こしに来た咲夜によってタ  
マモが串刺しになった事は無視だ、それとアリスから朝からうるさい  
と怒られた。解せぬ（――；）

今日は僕が私立聖祥大学附属小学校に入学する。聖祥の制服を着  
てみたのだが僕のは父さんが校長に前もってズボンを長ズボンにし

てもらっている。

一応家の都合と言ったが本当の理由は単純に短パンが似合わないから。正直短パンの制服姿を母さんと父さんに見せたら苦い顔をしていた。結果長ズボンとなった。しょうがない似合わなすぎだもん。

「あ、お兄ちゃんおはよう」

「おはようスグ。母さんもおはよう」

リビングに行くときスグこと直葉と母さんこと卯月が先に朝食をとっている。咲夜とアリスは今朝から家事を行い凜は新聞を読みながらコーヒーを飲んでいる。

僕が椅子に座ると咲夜が紅茶を出してくれた。いつもながらおいしい。

スグと母さんが家に来て数年が過ぎた。最初は二人ともこの環境に緊張していたがだいぶ慣れたようだ。

スグも僕の事を敬語では呼ばず今では「お兄ちゃん」と呼んでいて僕も「スグ」と呼んでいる。

スグは最初こそ咲夜たちを警戒していたがすぐに溶け今では仲良く話している所をよく見かける。

「おはよう朱奈ちゃん！今日から小学生だね。今日は皆で一緒に見に行くからね！」

「父さんは今日大丈夫なの？」

「ああ、今日は休みをもらっているから緊急の用事がない限り大丈夫だ」

父さんも仕事の方がかなり右肩上がりになり、この前は富豪の家が多く集まるパーティーに御曹司として僕が、その付き添いとしてアルトリアが参加した。その時に僕は一つ下の子の二人と仲良くなった。

「そっか、まあ午前だけだし終わったらどうする？」

「あ、私翠屋に行きたい！」

「あくあの有名な喫茶店か、いいかもね」

翠屋か、ランニング中に何度か見かけたのだが中々繁盛してたのは見えた。最初見ていた時は女性らしき人が頑張って接客をしていたのを見かけたときは大丈夫かと思ったが、何週間後に見かけた時は見

かけない男性の人がいて客の流れが安定していたので何とかなかったんだなと思いつながらランニングをしていた。

時々その男性と女性がかなりいい雰囲気をしていたのを見かけたがそういう関係なのだろう温かい目で見ていたのだが、男性の方はよく視線をこちらに向けているのは僕の気のせいだろうか……

なんか関わってはいけないと僕の脳が信号を送っている。

「そういうえば直葉ちゃん翠屋の子と最近お友達になったんだよね？」

「うん！『双子』のなのはちゃんとななみちゃんだよ！」

そういえばスグが最近公園で友達を作ったと言ってたな、スグは余り自分から友達を作らないから心配していたが無事で来てよかった。

まあ、おそらくその子は「原作キャラ」か「転生者」なのだろう。スグはなるべく原作に関わりたくいとスグの部屋の近くでたまたま聞こえてしまったから間違いない。

別に盗み聞きではありません。何せ部屋のドアが少し開いていたから通りかがったら聞こえちゃったんだよ。

意外とスグはドジっ子だからね。仕方ないね。

僕は転生する前に原作知識を消すようにと言ったのだが一部曖昧に覚えている。まあ、そうしてもらって困らないことはないし記憶も曖昧だからあまり意味もしない。

「確かその時になんか変な奴に絡まれたと言ってたなかつた？」

「あくその時に銀髪の男の子が急に話しかけてきたからとりあえず二人と一緒に逃げたんだ。幸いすぐになのはちゃん達のお兄さんが来たから何とかなったよ」

「そうか大丈夫だったか……僕が近くにいたら良かったんだけど……」  
てかそいつ容姿からして完全に転生者だろ。もしスグに手を出したらとりあえず衝撃のファーストブリットを食らわせよう。最悪記憶操作して……

「大丈夫だよ！もしもの時はななみちゃんと私で何とかなるから。寧ろお兄ちゃんがいると……」

「ん？どうしたスグ？」

最初の方は聞こえたが後半の方は小声であまり聞き取れなかった

「な、何でもないよ！もうお兄ちゃんもいつも子ども扱いするんだから！」

「いや僕もそうだけど子供じゃん・・・」

「いいの！とにかく大丈夫だから！だからお兄ちゃんは気にしないでいいから！」

「お、おう」

そんなに頼りないのか僕は……。ちよつと落ち込んでいると自分のバッグを持った咲夜が来た。

「朱奈様朝食をとりましたらそろそろ準備を。皆様もあまり時間がないので」

「私と咲夜は準備できたから私は卯月さんの準備を手伝いますね。アルトリア、あなたは直葉の準備をしてあげて」

「はい、スグハ準備に入りますよ」

「ありがとうございます！」

「はい！お願いします。アルトリアさん！」

こうして白銀家の全員は朱奈の入学式の準備に入った。

入学式は終わりました。

えっ何かなかったのかって？

あるわけないじゃんおっさんの長い話をただ聞かされるだけだぞ。しいて言うなら母さんと父さんのテンションが怖かった。

あと咲夜、そのカメラなんだ相当高級なカメラだよなそれ。いつ買ったし・・・

入学式が終わり自分のクラスに入る。

クラスは1組入った瞬間他の人たちが僕に注目する。そりやそうだが男子の制服でもズボンがほかの人たちと違い長ズボンで、髪も男にしては長い黒髪、中性的で整った顔立ちはやはり目立つらしい。

女子はきやつきやつしながら会話をし、男子は誰が先に話しかけるかを争っている。

とりあえず指定された席に着きホームルームが始まるまで席で待つ。

とりあえず小説でも読むか・・・

最近何も無い日は海鳴市の市立図書館に行き、本を熟読する毎日。そしたら後ろから急に声をかけられた。

「君小説好きなの？」

「ん？」

声が聞こえた方を向くと、そこにロングストレートの茶髪の少女がいた。

「ああ、最近近くの市立図書館に通っていて、かなりの本を読んだよ」「へえ〜ッあ！自己紹介していなかったね。私高町ななみ。今日から同じクラスなの。よろしくね」

「よろしく。僕は白銀朱奈。これから1年よろしくね高町さん」

彼女は高町ななみさんか・・・あれその名前聞いたような・・・

「ななみでいいよ。こっちも名前で呼ぶからよろしくね、朱奈ちゃん」

「え、あ・・・うん・・・よろしくななみさん・・・」

「?どうしたの？」

ああ〜やっぱりか・・・

「え〜とななみさん。さっき僕の事ちゃんって」

「へ?・・・えッもしかして!？」

「うん・・・僕は男だよ」

彼女は完全に僕を女の子だと勘違いした。(・・・ω・・・)

「そもそも僕男子の制服だから普通男子でしょ・・・」

「え、男装だと思った」

「その発想はなかった・・・」

正直ショックだった朱奈ははっはっはっ乾いた笑い声を出しながら窓の外を見た。

あ〜空はこんなにも青いのか〜。そ〜なのか〜

「え、えっとかごめんね」

「うん、大丈夫。よくあるよくある」

本当によくあるから困る。俺のメンタルを抉ってくるからなく。おっと心は硝子だぞ。



「じゃあ朱奈くん。これからよろしくね」

「うん、よろしく」

と互いに手を差し出し握手をする。とりあえずボツチにならずに済んだよ。友達ができて本当に良かった。

まあ、彼女とは【普通の友達】にはなれないとは思うけど。

「お、ななみじゃん！同じクラス？」

「あっこの声は・・・」

ななみの言葉を聞いてそちらを向くと赤茶色の髪に茶色の目をした少年が近寄った。

「なんだななみがいるのか。知り合いがいて助かったぜって、そっちは誰なんだ？」

とこちらに顔を向けてななみに話しかける。

「ちようどいいから紹介するね。こっちは私が話しかけた白銀朱奈くん。でこっちが」

「楓馬宗二郎（フウマ ソウジロウ）だ。好きに呼んでくれ！」

「お、おう。ななみから聞いた通り白銀朱奈です。僕は宗二郎って呼ぶから僕の方も好きに呼んで構わないよ。ちなみに男だよ」

結構グイグイ来るな。フレンドリーでいい奴そうだし。

つかこいつからも魔力の反応があるんだが。この二人はとりあえず転生者もしくは原作キャラなのだろう。

「OK朱奈！これから一年よろしくな、って男だったのか!?確かに男子の制服着ているし。」

ほんとこれ言わなきゃ男子か女子か区別つかないみたいだな。いつそ髪切るか？

「まあこっちとしては男友達ができてうれしいぜ。よろしくな朱奈！」

「こちらこそよろしく宗二郎。そういえば二人とも知り合いみたいだけど、前から友達とか？」

「まあな。俺とななみの家は近くてな、幼馴染なんだよ」

「ソウジとはウマが合うからよく一緒に遊ぶんだよ。なのはも一緒にね」

「なのは？」

あれ、やっぱりどこかで・・・あっそうだ。今日スグが言ってた名前！

「高町なのは。私の妹よ、最近はなのはとソウジ、それと最近なのはと  
同じ年の子とよく遊ぶのよ」

「ねえ、そのもう一人って直葉って名前じゃない？」

「えっそうだけど、何で知っていんだよ？」

「直葉は僕の妹なんだよ最近公園でよくなのはちゃんとななみちゃん  
と遊んでいるって言ってたんだよ」

「え!?直葉ちゃんのお兄さん!？」

そういうと二人はこちらを凝視し何やら探っているように見  
てる。

おそらく魔力を持っているか確認しているのだろう。

残念ながら僕は今リミッター最大までかけているため魔力ランク  
はFになっているだろう。まあ霊力の方はランクBまでしか下げて  
いないけどさすがに魔力しか気にしないだろう。

「・・・そうだったの(ソウジ。彼・・・)」

「そうだったのかよ。世間は狭いってよく言うがまさかな。(ああ、魔  
力ランクがFだから転生者ではないみたいだな)」

「本当だな。あ、先生が来た。席に座ろう」

「そうね(私は原作が始まるまでデバイスが手に入らないからわから  
ないけど、とりあえず大丈夫ってこと?)」

「俺も自分の席に着くか(けどまだわからない。直葉ちゃんは転生者  
なのは魔力を見てわかったけどこいつはもしかしたら隠しているか  
もしれないし)」

「(けどそしたら直葉ちゃんと一緒にこっちに接触すると思うんだけ  
ど)」

「(確かにそれはあり得るかもな。ゲイルどうだ?)」

《(魔力低くいので魔導士ではないです。しかしそれ以外の【何か】別  
の反応がありました)》

「(別の何か?)」

《はい、しかしそれも周りの人よりもというだけでありななみさんのお兄さんと同じくらい何かを感じるくらいです》

「恭也兄と同じ？ 武術の経験があるという事？」

《そこまではわかりませんが、同じ反応をしたのは間違いありません》

「・・・とりあえず危害を加えなければこちらから手を出さないでいいんじゃないか？」

「そうですね、下手に動いても仕方ないし、それになのはの事も知らないみたいだしこのままにしましょう」

「了解。じゃあこのまま友達ってことで」

先生のホームルームが無事終わり帰る支度をし始めると

「朱奈くんこれからどうする？」

「ああ、これから家族と一緒に翠屋で食事しようって話になったんだよ」

「へえそうなのか？ 俺たちも翠屋で入学祝いとして食べに行くんだぜ」

「てか、翠屋は私の家族が開いているお店だからね」

「あくそういえばスグがそんなこと言っていたな。あつ、スグって言うのは直葉の事だよ」

「へええく直葉ちゃんと朱奈くんって仲いいの？」

「どうだろう・・・多分普通の兄妹の仲だぞ。そもそも兄妹って言うても義兄妹だけど」

「えっマジで？」

と宗二郎は驚いた顔でこちらを見る

「マジマジ。今の母さんと父さんは再婚したんだよ。スグが母さん、僕が父さんって感じで」

「そうだったの。・・・部屋一緒とか？ もしくは一緒に寝たことがあるとか？」

「お、おいななみ何い」 「ソウジだまって」 「・・・はい」

「ん？ いや別々だけど？」

「・・・そう、良かった。(さすがに無いわよね。良かった恭也兄がおかしいだけだった・・・)」

「?、??」

そんなこんなで会話し、お互いの家族を見つけてそれぞれ紹介をした。

最初は宗二郎とななみは咲夜たちを見て驚いていたが前から直葉が家の事は説明していたらしい。

少し驚いていたが直に仲良くなっていた。

それぞれの親御さん達はとも仲良く話スグは茶髪のツインテールのおそらく高町なのはであるだろう女の子と仲良く話している。

互いに自己紹介と挨拶をし、そのまま翠屋に行き高町、楓馬、白銀の家は現在仲良く食事をしている。

・・・だが、宗二郎と僕、それとななみとなのはの兄である恭也さんの席は少し他と空気が違う。

それも主に恭也さんが僕の方を見て警戒しているのがすごくわかる。何せ威圧感がハンパないもん。

ヤベツ冷や汗がめっちゃ出ている。ちよく怖いんだけど。

そしてそれに気づいたアルトリアと咲夜が恭也の方を睨み始める。

咲夜、どこからそのナイフをしまいなさい。

アルトリア、護衛用の警棒をしまいなさい。

そしてタマモ、呪術を使おうとしない。

一番まともなのはアリスだけか!?そもそもアリスは紅茶を飲みながら楓馬の母と仲良く話しているし。

母さんは高町の母である桃子さんと、父さんは楓馬の父と高町の父である高町士郎と、スグはなのはとななみと高町の姉である美由希と楽しく話しているし。

もうカオスすぎるだろこの状況。

「・・・朱奈と言ったか?」

「は、はい・・・」

突然に恭也が朱奈に話しかけてきた。

「お前にななみとなのはは渡さんぞ」

「……はい？」

「でた、恭也さんのいつもの奴……」

「なんか宗二郎は理解しているが僕にはよくわからん。

「え、えくと渡すも何もそもそも貰わないんですが……」

「……それはななみとなのはに魅力がないという事か？」

「はあ!?なんでそうなるんですか?!?!」

「何だこの人!?しかも今の発言でさらに威圧が強くなるし。」

「そして咲夜たちもそれに応じて威圧が強くなるし。」

「た、助けてくれ……」

「ななみとなのはに手を出すならそれなりのちかr「いい加減にしてよ恭也兄!」グハアツ!」

突然現れたななみがどこから取り出したわからない木刀で恭也の頭を叩く。

「咲夜たち、ななみにサムズアップするな。」

「そんなこんなで会話をし、楽しい時間を過ごしていた時に店のドアが勢いよく開き。」

「はああ。また来たよ」

「にやはははは。……はあゝ」

「あいつまたかよ……」

「ななみ、なのは、宗二郎の順番で言ったことに耳を傾けながらドアの方を向くと」

「よう嫁よ!遊びに来たぜ!!」

「そう言っつて現れたのは銀髪で金と赤のオツドアイの目をした少年が現れた。」

「ん?おうななみもいるじゃないか!……ツチモブもいんのかよ」

「悪かったな俺がいて。てかよくもまあ懲りないな……恭也さんにボコられたのに」

「ほう……またなのはとななみに手を出すのか……」

「げっ!?べ、別に今日はなのはとななみには何もないですよ!」

「こいつ逃げたな……てかこいつも魔力がって高いな、それも制御がしつかりできていない。」

無駄に魔力を漏らしすぎじゃないか……てかあいつ確かスグが言っていた……

「え、えくと今日は……そう！直葉に会いに来たんだ！」  
「……は？」

「え？わ、私？」

「そうだ！今日は直葉と遊びに来たんだ！さあ嫁よ俺と一緒につて……」

そこで銀髪の少年は気づく、咲夜たちの方を見て

「な!?東方の十六夜咲夜とアリス、さらにセイバーがなんで!?(そうか！俺やモブと同じよう直葉も転生者だからおそらくあれは直葉の転生特典か!)」

「おいおい、迂闊な発言はするなよ。それ知っている理由聞かれたらどうすんだよ。」

「最悪ストーリーカー発言だぞ……」

「まつ、まあそんなことは今はどうでもいい。どうだ嫁よ、俺と一緒に行こうぜ！そっちの三人も連れて。」ニヤニヤ

「……」

「ちよつちよつと私行かないし、そもそも私あなたの嫁じゃないんだけど……」

「そう言った直葉だか銀髪は近づき直葉に触れようとした。」

「なに照れだよ。それとも一人じゃ寂しいか。それならその三人も俺の「それ以上スグに近寄るな」ッ!)」

「……さすがに限界だ。魔力以外の霊力と魔術回路を全開にする。」

「マスター魔導書は使えますか？」

「ユイか……大丈夫だ、こんな奴に英霊も住民の力を借りる必要ない……」

「もう一度言う。これ以上スグにも、咲夜達にも近づくな」

「なっ!?!……ほうちよつといい顔しているし妹にしつて「アホ。僕は男だし、お前みたいな奴をスグが好むわけがない」はあ?男!)」

「こいつ……本当にどうしようもない奴だな……」

「モブが……直葉は俺の嫁だ！そしてなのはやななみもだ!)」

「御託はもういい。それよりも聞いたぞ、今日朝にスグから聞いたよ  
しつこい銀髪がいるって……」

「な!? 朝ってどういうことだ! テメエ直葉の事つけ狙っているのか  
!?!」

「はあ? 僕は白銀朱奈。白銀直葉は僕の妹だが?」

「ツチ、ならテメーも転生者か!」

「転生者ってなんだよ……アニメの見すぎじゃないか?」

「……違っているか。魔力も感じねえし……」

「さつきから何言っているんだ。お前頭大丈夫か?」

「うるせえ! モブごときが調子こいているんじゃないやねえ!!」

そうはき捨てながら銀髪は殴りかかってきた。

魔力で強化した拳は当たれば危ない、ななみたちは突然の行動に対  
応できない。

恭也がどこから取り出した小太刀を取り出すも間に合わないだろ  
う。

だがこれで……

……正当防衛成立だ

こいつの拳は遅い、これなら霊力なんか使わず蹴り一、二回で十分  
だ。

そう思い銀髪の伸びた腕を顔寸前で避け攻撃に転じる。

### 【神零流】

朱奈が前世の頃に様々な武術を覚え複合し、改良し、アレンジして  
身に着けた総合武術。

型と番号があり、得物を持つ時は神零流で無手の場合は神零式と分  
けられている。

例えば刀を使う場合。神零流抜刀術でそこに型と番号が存在する。  
そして今回僕が使うのは。

「神零式戦闘術……」

高速で自分の体を回転し……

「二の型十六番……」

足を銀髪の頭めがけて……

「隠禪・黒天風！」

皆に聞こえない範囲でいいながら  
鋭い回し蹴りを繰り返す！

「グハツ!？」

そのままドアの方に吹っ飛びいつの間にかいた咲夜がドアを開け  
そのまま外に吹っ飛んだ。

毎日鍛錬している事を知っている家族は普通だが知らない二家は  
当然ながら呆然。

ほぼ全員「（。ㇿ。）」のような顔をしている。

唯一高町家の士郎さんは「ほう、いい動きだな……」と感心しな  
がら見ている位。

「お見事ですシュナ。普段の鍛錬のたわものですね」

「いやあいつが弱いだけだよ。普通は躲せるし、躲されたら即座に二  
撃目を入れる気でいたから即座に拍子抜けかな」

などとセイバーと会話する。

「あちやくやっちゃったよお兄ちゃん……」

「何あれ!? 彼何か習っているの? 完全に武術習っている人の動きだよ  
!?!」

ななみは驚愕の顔をしながら直葉に言う。

「あれはアルトリアさんに武術を習っているんだよ。アルトリアさん  
はポディーガードをしているから」

「なるほど……道理で……」

と恭也は何か気づいたようなようにつぶやきながら朱奈とアル  
トリアの方を見ている。

「私ができるのは剣を振るう事、今のはシュナの独学で覚えた動きで  
す」

「あはは、僕は人の事を真似ることが得意だから。さっきのはある空  
手の大会で使用された技をアレンジしてやったんだよ」

少し嘘だがまあほとんど真実だから大丈夫か。

「それにしてもなかなかいい動きをするね朱奈君。どうだい試しに恭



也か美由希と手合わせをするかい？」

「え？」

「アルトリアさんもどうですか？家には道場があるので木刀がありますよ」

いやだよどう見てもこの家の人見るからに強そうじゃん。唯一桃子さんとなのはが戦闘しなさそうだけどそれ以外の人戦闘力高そうじゃん。

「すみませんが今日は遠慮していただけないでしょうか。この後彼は私と用事があるので」

とアルトリアが言う。助かった！

第三話！完！！

「そうかい、ならいつでも来てくれ。いつでも手合わせしよう」

「(まずい!) いえ自分はe「はい、そうさせていただきます」アルトリア……」

僕を殺す気かとアルトリアを睨みつけながら朱奈は思った。

救いはないんですか……

## 4話

朱奈 side

入学して、あれから一年が過ぎようとした……  
え？入学後のエピソード？あるわけないじゃん普通の学校生活だよ。

ちよつと体育の

時にななみと宗二郎と熱くなって超次元なことをしていたり。

昼休みに3人で屋上で食べていたり。

勉強したり・・・etc

などと普通の学校生活を送っていたぐらい。

学校以外では毎朝のトレーニング、市立図書館で本を借りたり、高町家の道場で手合わせをしたり、とにかく長い一年だった。

それはともかく他の転生者の情報がいくつか入った。

まず僕と同じ女神から転生した四人は全員高町なのはと同年らしい。

銀髪はかなり傲慢で手あたり次第女の子に声をかける最低野郎。

もう一人の男は頭がおかしいと女子に言われ一部の同い年には「リーダー」と称されている奴。

女子の一人はお嬢様系みたいな子。

そしてもう一人の女の子はなぜか情報が入らない。というか三人と違って目立った行動をしていないからわからない。

え？なんでそんな情報が入ってくるのかって？

ハサン先生とアサ子さん情報をお願いしたらやってくれました。

「魔術師殿直々の頼み事なら断るわけにはいかぬウ！」と叫びながら行った時はそんなにうれしいのかよと思った。

今思えば英霊も住民もあまり頼りにしていないし。魔導書はユイの管理の元で好きにさせているし。

まあ、問題を起こす連中じゃないのは知っているから大丈夫だろう。

問題起こしたら即刻魔導書からの消去をユイに頼んでいるし。

ユイにはその代わりにかなり甘くなってしまうている。ユイの要望にはほとんど答えているし。

そういったこともありながら英霊や住人に模擬戦の相手をしてもらっている。現在の僕のステータスはこんな感じである。

白銀朱奈

魔力 ランクS (リミッターA)

霊力 ランクAAA (リミッターA)

魔術回路 50 (リミッター35)

追加能力

デバイス

・シャイニングハート

・インテリジェントデバイス。

「ストライクモード」

【バスターフォーム】 【ガンフォーム】 【サイズフォーム】

中遠距離主体のデバイス。シャイニングハートのみ可能な魔法に魔力変換資質を加える事ができる魔力変換魔法『エレメンタルシフト(精霊変換)』がある。

砲撃がメインの【バスターフォーム】 射撃がメインの【ガンフォーム】 斬撃がメインの【サイズフォーム】

「??モード」

「??フォーム」 「??フォーム」 「??フォーム」

今は「見せられないよ！」状態。近日公開!!

マスターの技量で機能が増加。

・キープブレード

「ドライブ」

ウイズダムフォーム

「キープブレードライド」 使用可能

サーフボード型

・幻英の書

サーヴァント

現界可能人数 二人

〔英霊名〕 〔絆level〕

ネロ・クラウディウス level10

沖田総司 level5

エミヤ level10

クー・フリーン level10

スカサハ level5

デイルムツト level5

メドゥーサ level10

呪腕のハサン level10

百の貌のハサン level10

静謐のハサン level10

メデイア level10

マリー・アントワネット level5

ランスロット level10

ヴラド三世 level5

ジャンヌ・ダルク level10

『夢幻召喚（インストール）』使用可能絆level10以上

サーヴァントと一体化する。宝具一回使用可能。levelが上がるにつれて使用時間増加、使用魔力軽減などが付加。

幻想郷の住人

現界可能人数 二人

〔名前〕 〔絆level〕

博麗霊夢 level10

霧雨魔理沙 level10

魂魄妖夢 level5

八雲紫（仮） level3

八雲藍（仮） level3

橙（仮） level5

レミリア・スカーレット level10

フランドール・スカーレット level3

パチュリー・ノーレッジ level 3  
射命丸文 level 3  
鈴仙・優曇華院・イナバ level 3  
八意永琳 level 3  
東風谷早苗 level 5  
八坂神奈子 level 3  
洩矢諏訪子 level 3

『幻想接続（コネクト）』使用可能絆level110以上

住民と一体化する。スペルカード使用可能。levelが上がるにつれて使用時間増加、使用量軽減

とまあ今までの鍛錬でこんな感じになった。

うん、まあ・・・これは突っ込みどころが多すぎるよ作者・・・  
変な電波を受信したがとりあえず見ての通りかなりの多さである。  
英霊と住民に関しては鍛錬相手とおしゃべり相手しかしてないだ  
が・・・

シャイニングハートも練習のよき以外はユイと守護騎士と一緒に  
いるし。

僕はアクセサリーとしてペンダント状のキープレードを身に着け  
ているくらいだ。

閑話休題（そんなことはどうでもいい）

もうあれこれ一年が経つ。僕たちも二年生となりスグとなのはが  
一年生になる。

さつきも言った通り転生者四人も二人と同一年なのでおそらく同  
じ学校に来ると思われる。

さらに気になるのは他の神の転生者たちだ。一応ななみ、宗二郎含  
めた七人の内五人はわかった。

その内二人はななみと宗二郎だが残りの三人はスグ達と同一年の  
ようだ。

・・・絶対面倒なことが起こる。

ハサン先生たちに聞いたところ二人は平穏な暮らしを送っている  
らしいが、もう一人はかなり正義感が強いらしい。

どうやら勇者気取りの奴らしく銀髪の彼がなのはやスグに近づくと必ず現れては毎回ケンカをするらしい。

まあ、迷惑かけていないから良いするか。もし目に余る事したら流石に忠告はしないとな。

確かにここは元々アニメの世界だが

現実はその甘くない……

ん？今僕はどこにいるかって？

それは……

「まだ渋い顔しとんのか。そんなに妹ちゃんが心配なんか？」

「当たり前じゃん。入学式の時に手を出そうとした輩がいたんだぞ」

「それはそうなんやけどなく。朱奈君ほんまに過保護やな、シスコンなん？」

「そうか？普通に心配してるだけなんだが……」

「心配も度を超すと問題やで。あ、その本とってや」

「うーん基本何やってても気にしないようにしているんだがな。はいよこれね」

今は市立図書館で車椅子に乗りながら本を読む八神はやてという少女と一緒に会話をしている。

出会ったのは二年前、はやてが車椅子で高い棚にある本を無理に取ろうとして他の本が大量に落ちてくるのを助けた。

その時からなんやかんやでよく図書館で会うたびにお話をし、体の不自由なはやてを手伝っている。

「ありがとう。まあ朱奈君はお人好しやからなあ、今も私と一緒にいてくれるんやし」

「ん？別にはやてと一緒にいるのはそうしたいからだけど？」

「そ、そうか？ま、まあ私みたいな美少女と一緒にいられるんやから役得やからなく」

「それ自分でいうのか……まあ美少女だし、その歳で家事もできるし、料理はすごくおいしいし、ただ可愛いだけじゃなくて女子力が高いから、はやてと付き合える奴ははつきり言って羨ましいなく」

なんてここまで嘯まずに真顔で本を読みながら言った朱奈。

割と素で言っただけはいるがはやてはとても恥ずかしいのか顔を真っ赤にして俯いている。

「いや実際に女子力のレベルがカンストしているんじゃないかっ……てはやて、どうした?」

「／＼い、いやその……褒めすぎやないか?そんな私はそんな何でもできるってわけじゃ」

「いやいや何言ってるのさ、家の咲夜とアリスもすごい褒めてたぞ。いい嫁さんになるって」(・▽・)ニヤニヤ

「よ、嫁!? ななな、なに言ってるんや朱奈君!／＼」

「あれあれく美少女はやてさんどうしたん?お顔が真っ赤ですよ?」(・▽・)ニヤニヤ

「わ、わざと言っているやろ!?!いじわるや朱奈君は!」

「H H H H A!何を言っているんだはやてよ、僕はほん「あの、すみませんが館内ではもう少しお静かにお願いします」あつ、ハイ……」  
「やっぱ、今の全部周りに聞かれていたのか。は、恥ずかしいな……  
そういつて互いに赤くなってしまう気まずい雰囲気になった。」

はやては本で顔の下半分を隠しながら涙目でこちらを睨みつける。

「ご、ごめんはやて。流石にやりすぎた……」

「本当に意地悪や朱奈君は!……なんで私はこんな奴のこと……ぶつぶつ」

「ん?今なんか言った?」

「な、何でもなくて。とにかくお世辞もほどほどにするんやで。そういうの本気にするん人もいるんよ?」

「え、今のほとんど本当の事だけど?」

「え!?!／＼」

実際咲夜もアリスも僕から聞いた話で相当評価していたし。二人ははやてに会ってみたくてと言ってたし。

と唐突にはやてが本で朱奈の頭を叩いた。

「イタッ!ちよっ何すんのさ!?!」

「もうバカ!私、この後買物しないといかなあかんから、私は先に行って!」

「てちよつとー！・・・なんでさ」

とりあえず朱奈ははやてを追いかけスーパーまで車椅子を押しあげる。

これが朱奈の日課の一つで、彼の最近の日常である。

しかし朱奈は気づいていない。

彼女の前では周りに見している顔がだいぶ違うという事に。

そしてそれがどういった感情なのかに気づくのはまだ先になる・・・

月日が流れとある朝・・・

朱奈は昨日、アルトリアのデバイスの調整をしたせいで寝不足である。

レアスキルのアナライズを使って守護騎士と自分のデバイスの調整をよくする。

さらに解析もお手の物になり。

魔力やそれ【以外の物】も解析でき、さらに転生者だと特典を見ることができると。

そんなこんなで今現在、朱奈は睡眠中である。

「お兄ちゃん起きてよ〜！遅刻しちゃうよ〜！」

「ん〜おはようスグ・・・」（ノド、）。・・・

「もう早くしたくしないと学校送れちゃうよ〜！」

そういつて直葉は先にリビングに向かう。

寝不足に耐えながら着替えながら学校の事を考える。

直葉はなのと同じクラスの一組になりかなり喜んでいた。

しかしあの銀髪の彼、名前は劉崎 和真（リュウザキ カズマ）と  
いうらしい。

かなり不安ではあるがまあ直葉なら大丈夫だと朱奈は考えている。

学校の昼休み、今から直葉のクラスに向かう。

今日初めて直葉のクラスを見ることになるがとても不安だ。

何せ直葉のクラスから大量の魔力反応を感知した。

てか、転生者のほとんどが同じクラスじゃないか！



唯一二人別のクラスで一緒みたいだが一人は今直葉のクラスに向かったみたいだし。

どうすんだこれ・・・ていうか皆魔力隠す気ないのか？ダダ漏れ何だが・・・

そう考えているとななみと宗二郎が来る。

「朱奈くん。今日も屋上で食べない今日からなのは達も入れて」

そういつてななみは誘ってきた。

二年生になったが朱奈はななみと宗二郎と今回も同じクラスになった。

今回も一年生の頃と同じように屋上で昼食に呼ばれた。

「そうだね。でもその前にスグに弁当渡さなきゃいけないから」

「そう私もなのは達を誘いたいから一緒に行かない？」

「別にいいけど達って？」

「ああ、なのはの友達と一緒にね。最近なのはったら同い年の男子とかなり仲良くなっていろいろらしいし、その子もね」

「・・・まさか和m「違うから。万に一つ彼を呼ぶことはないわ」お、オッス」

完全に嫌われたな和真少年。

「神龍 一誠（シンリュウ イッセイ）っていう子よとても良い子だね。本人は格闘技をしているから時々手合わせしているのよ」

「へえ〜そんな奴がいるのかあ・・・今日道場行ってもいい？」

「あんたやる気満々じゃない・・・多分大丈夫よ。でも少し手加減してやりなさいよ。朱奈くん恭也兄たちと一緒にかなり人外なんだから」「失敬なまだ人外じゃないわ。ようやく恭也さんに一撃入れられたりするくらいだわ」

「いやそれも人外だろお前・・・てか美由希さんとは？」

「だいぶ前に勝ち越しています何かね宗二郎くん？」

「おめでどう朱奈くん。これであなたも人外よ」

解せぬ。

「まあそんなことはどうでもいい。早くスグ達のクラスに行こうそうしよう」

「本当にあんたは・・・ほらソウジも行くよ！」

「お、おう」

一応朱奈はななみたちに自分が転生者だという事は伝えていない。

まあ、まず聞かれていないし何せ周りが人外だらけだから、僕みたいな戦闘力ある奴がいても不思議ではないと思っっているんだろう。

とりあえず今は直葉たちのクラスだ、さあどうなっているのか・・・

## 5話

直葉side

どうも皆さん。直葉です！

今日で私は聖祥大学付属小学校に入学することになりました。

原作の「魔法少女リリカルなのは」まで少なくともあと二年は掛かるはず・・・

私はそのために魔法の練習をしつかりとしてきた。

咲夜さんたちがいるから余り特訓できないのかと思ったのだけれども、私の行動を制限せずむしろ自由にさせてもらったから助かったよ

おかげでいっぱい魔法の練習ができたし！

私の魔法は主に誘導性の高いシューターと強力なバインド、さらに魔力変換資質が【凍結】と魔力変換の中でも稀の能力だった。

なんで神様に頼んでいないのに存在するのかわからなかったのだけれどもフェザーに聞いた所。

「おそらく神様に頼んだ魔法の才能の時に能力をランダムにしてそのせいで魔力変換資質を持ったのだと思います」と言っていた。

まさか魔力変換資質の中でも希少な【凍結】の才能があるとは役得だね♪

でも砲撃などの才能はないらしい。どちらかというところちが欲しかったな・・・

ううん！贅沢は言ってられない。折角魔法が使えるんだから活かさないよ。

お兄ちゃんにも迷惑かけるわけには行けないからね！

でもお兄ちゃんは最近高町家の道場にお世話になっているんだよね。

しかも最近聞いた話だと恭也さんに一撃いれたって言ってたし。

本当に転生者じゃないのかな？

前にごまかしながら聞いた時には「転生者？何それ、新手の変人か

何か？」

とか言ってたし。もしかして神様が何らかの干渉をしたのかな？  
とにかくお兄ちゃんにばれないよう行動しないと・・・

閑話休題（まあそんなことは置いといて）

この聖祥小学校で私はなのはちちゃんと同じ一組になったよやった  
ね！

でもあの銀髪のと和真って奴もいるし、最近では和真と毎回ヒーロー  
みたいにやってくる金髪で青い瞳の男の子もいる。

正直あの金髪の男の子もちよつと胡散臭いんだよね。

だって都合の良いタイミングで現れるし。

ヒーローよりも勇者？そんな感じの男の子だった。

それと窓際でおどおどしているダークブラウンの髪で左目が蒼色  
で右目が翠緑色のオッドアイの女の子。

あの子転生者だよ。どこかで見たことあるし・・・

確か名前は優姫 ユウナ（ユウキ ユウナ）という少女だ。

それにしてもさつきからビクビクしているんだよね・・・

なんか怖がっている感じだし。

と考えていたらもうお昼時間になってたよ。

「すぐはちゃん一緒にご飯食べよう！」

「いいよなのはちゃん。あつ！アリスちゃんすずかちゃんも一緒に食  
べよう！」

「いいわよ！ねえ、すずか」

「うん。私も一緒に混ぜて」

私が誘った女の子二人はアリス・バニングスと月村すずか。

二人は「原作キャラ」でなのはと私の友達なの。

ふと思うんだけどこの学校美男美女が多すぎるよね。

私立だからかな？

「そうだ！いっせーくんも一緒に食べるの！」

「ん？ああ、でもいいのか俺が混ぜたっても？」

そういつてなのはが誘ったのは「転生者」だと思われる茶髪に金眼  
の神龍一誠という男の子です。

私から見ると限り一番オリ主だと思ふ少年であるの。

「え〜と三人とも大丈夫？」

なのはが困った顔を私たちに訊ねてきた。

なのはちゃん・・・一つ一つの行動が可愛すぎているよ・・・

そんな顔で訊ねたら断れないでしょ普通。

「そもそもななみさんと宗二朗さんも来るんでしょう？なら別にいいんじゃない。二人は？」

「私は別にいいよ〜」

「私も大丈夫だよ」

アリサ、私、すずかの順番にそういうとなのはが嬉しそうになる。

「ありがとうなの！いっせーくんも一緒に食べよう♪」

「ああわかったよ、今準備するから少し待っ「おいモブ！」あつ・・・」

そうだ、こいつがいるんだつた・・・

そう思い私たちは声の方を向くと劉崎和真が一誠を睨みながらこちらの方に来る。

「なになのは達に近づいてるんだよ！嫌がつてるだろ!!」

「いや俺は誘われたんだけど・・・」

実際に一誠は誘われただけで何も悪くないのだが和真はお構いなしに一誠に突つかかる。

こつちから誘ったのに嫌がつているだろつてどういう事よ・・・

はやく止めてあげないと・・・

「てめえこれ以上なのはに近づくとよう「いい加減にしなさいアンタ」ツイッテエ！何しやがる!？」

つて急に現れた女の子が劉崎君を蹴り飛ばしたよ!？」

そこには長いストレートの黒髪に紅の瞳の少女と白髪を逆立て、黒眼の少年が現れた。

少年は同じクラスの子なのはわかるが少女の方は知らない子だ。

この子もしかして転生者？

ていうか転生者多すぎない？

「フフフツ、そろそろ貴様が暴走をする頃だと思ひ彼女を呼ばせても

らったぞ和真。これで貴様も教室が汚れずに済む」

「本当よ、ユウナと食事をとるついでに来ていたら・・・アナタまた見境なく暴れているの？いい加減その傲慢な行為をやめたら？」

「うるせえ当麻に麗奈！オリ主の俺の邪魔すんじやねえよ！」

そう話しているとこちらに気づいた麗奈という少女がこちらに来た。

見るからにお嬢様のような立ち振る舞い。

き、綺麗な人だな

何か別次元の人みたいだよ・・・

「ごめんなさい。彼とは小さいころからの知り合いなんだけど、どうも制御できないの。無視して構わないわ」

「あ、はい。えくと・・・」

「あ、自己紹介がまだでしたわね。私の名前は愛川 麗奈(アイカワ レイナ)よ。よろしくね」

「は、はい！白銀直葉です。よ、よろしくね麗奈ちゃん！」

麗奈と自己紹介すると白髪の少年もこちらを向き挨拶するが。

ど、どうしよう。お嬢様オーラに気圧されて緊張しちゃうよ・・・

「昨日自己紹介したが俺も改めて名乗ろう！我が名は恐怖のファンタズム・ブレイカー！天上院 当麻(テンジヨウイン トウマ)ダアア!!」バサッ！

「よ、よろしく当麻くん・・・」

となぜか来ている白衣を翻しながら挨拶をする当麻。

ああ、これはおそらく前世で聞いたことのある中二病と言う奴だ・・・

さつきまで緊張していたからだがスツと冷めたよ。

そういえばこのカオスの状況どう収集するんだろう・・・

お昼休みがもつたいたいよう！はやくお昼食べたい！

「このモブども・・・いい加減じやますんじや」そこまでだ！劉崎!!」ツチ、あいつか！」

「こ、今度は何？」

と今度は席を立ち劉崎の肩を掴み怒りの顔を見せる金髪青眼の少

年。

天野 光輝（アマノ コウキ）が和真とのケンカが始まる。

これでさらに状況が混沌化するよお・・・

「邪魔すんじやねえモブ・ブツ殺すぞー！」

「やれるもんならやってみろ！これ以上彼女たちに迷惑をかける行為はさせない！」

と言ってまた二人はまさかの殴り合いが始まった。

ちよちよちよつと！なんで!?!どうしてそうなったの!?!?

なのはとすずかと私はどうすればいいかおどおどし、アリサと麗奈はうんざりし、当麻と一誠は呆れ顔になる。

因みにユウナは麗奈ちゃんのところに行きたそうにしている。

だけど近くで二人が暴れているため動けないみたい。

誰かこの状況どうかしてよ・・・

「あの一、スグ・・・じゃなくて白銀直葉さんはいますか？」

その言葉と共に暴れている二人以外の人達全員が廊下に連なるドアの方を向いた。

そこには直葉の信頼する兄、白銀朱奈となのはの姉の高町ななみ、ななみの幼馴染の楓馬宗二郎がいた。

朱奈 side

なんだこの状況は

僕は直葉の教室に到着し、ドアを開けるとそこは二人の少年がケンカをしている光景が現れた。

とりあえず一つ言わせてほしい。

・・・なあにこええ（呆れ顔）

なんで教室のど真ん中で殴り合いが行われているんだよ・・・

ほら後ろの二人はこの光景に驚愕しているし。

しかも案の定殴り合いをしているのはあの二人だよ・・・

確か彼の名前は天野光輝って名前だったよな？

まあ今はそんなことはどうでもいい！

あいつらは無視だ無視！

「え、えくととりあえず直葉はいますか？」

「お、お兄ちゃん!？」

とスグ見つけ。

かなり困惑しているな・・・

「ど、どうしてここに？」

「どうしてって、スグの鞆の中見てみ。弁当持ってくるの忘れただろ」

「え!？」

スグは自分の鞆を探ると確かに中に弁当が入ってなかった事に気づいたみたいだな。

まったく仕方ない妹だ・・・

「持っていくの忘れていたから持ってきたぞ。ちようどいいからこの後いっしょにt」「朱奈さん!」「ん?」

この声どこかで・・・

あ、金色と紫色の髪の子がこっちに来た。

あの子は確か・・・

「もしかしてアリサにすずかなのか？」

「は、はいお久しぶりです。朱奈さん!」

「あんた、この学校の生徒だったの? ってそれよりも直葉と朱奈って兄妹だったの!？」

「久しぶりだな二人とも。まあスグとは義兄妹ってやつだよ」

「そうなの直葉ちゃん？」

「えっ!？あっうん、そうだけど」

「スグ・・・言っただけだったのか・・・」

「だ、だって私お兄ちゃんがアリサちゃんとすずかちゃんとの面識があったの知らなかったから・・・」

「あっ」

そういえば僕もスグに言っただけだった。

「朱奈さん・・・」「あんたね・・・」

「すまない、話すの忘れてた・・・アリサとすずかとは父さんの会社の



パーティーに参加した時に会ったんだよ」

「そうなの？」

「ええ、まったくあんたは・・・すずかも大変よね・・・」

「え!? な、何でそこで私が出るのアリサちゃん？」

「何やら急にアリサとすずかが小声で話し合ってる。」

あつすずかの顔が赤くなった

アリサがニヤニヤし始めた。

い、いったいどういう事だあ（困惑）

「なああ、お取込み中悪いんだがそろそろこの状況どうにかしないか？」

「お兄ちゃんお願い。あの二人をどうかして・・・」（シ・ω・シ）  
「ん？ そうだねじゃあ宗二郎あの金髪の方お願い。僕は劉崎の方を抑える」

「了解。やりすぎるなよ」

「大丈夫。寝てもらうだけだから」ニコツ

「（だめだ終わったな劉崎の奴・・・）」

さて、OHANASIの時間だよ☆

「入学そうそう暴れてんじゃないーこのドグサレがあー!!」

「な!? グベホオ!!?」

思いつきり奴の頭めがけてシユウウーツト!

超エキサイティング!! ☆☆

「まったく入学して間もないの問題行為を起こすとは・・・どうしたみんな？」

《いついや何でもないです・・・》

どうしたんだそんな怯えて。

怖がらないで！ 僕は基本優しいお兄さんだよ！

少し元気のいい一年に高町式会話法をしただけですよ！

「何だろう・・・最近朱奈くんが恭也兄に似てきているんだよね・・・」

「そういうえば最近お兄ちゃんと恭也さん二人で話すこと多いんだよね・・・」

「前にお兄ちゃんと朱奈さんの会話を聞いた時に私とお姉ちゃん、あ



そんなこんなで今女子グループと男子グループのように別れながらベンチで食べている。

ただなのはと一誠、ななみと宗二郎は隣で食事をとっている。アリサとスグはなのはをからかうようにニヤニヤしてるし。

それに反応してなのはが赤くなりながら「うにやー!!」と言いながら怒っている。

いや〜青春だね〜

宗二郎とななみは相変わらず自然に隣同士だし。

もう付き合えよお前ら。

なんで何も話していないのに互いのしたい事がわかるんだよ夫婦か。

さてそんなことより今気にしなければならぬのはあの二人だ。

神龍少年と天野少年。

神龍少年は最初は警戒していたものの危害がないと察知したのかわからないがこちらの警戒心を解いたみたいだ。

しかし天野少年。君は睨みすぎだ。実にわかりやすいぞ。

こいつは完全に僕を敵視しているみたいだな。

何せさっきの劉崎を蹴り飛ばしてから危ない奴認定されていたみたいだ。

あ、そうだ!

「そうだ神龍くん、この後放課後空いてる?」

「はい空いてますよ。それと俺の事は一誠でいいですよ」

「そうかなら一誠この後一緒に高町家の道場に行かないか? 宗二郎から来たけど格闘技をしているんだろ?」

「はい、空手などを少々。って白銀さんですか?」

「朱奈でいいよ。僕は色々な武術を少し齧っているから、時々恭也さんと手合わせしているんだよ」

まあ土郎さんとはアルトリアがいつもやっているし美由希さんは最近相手してくれないから恭也さんしかいないんだけど。

「・・・あんた高町とどういう関係だ？」

おつ天野少年がようやくこちらに話しかけた。

それにしても一誠とは違い随分と怖い雰囲気をかもしだしているな。

まあ怖くないんだが・・・

つうか偉そうに聞かないでよ、イラつとするだろ。

「ん？友達だよ。ななみと一年から同じクラスだし。入学式の終わりに翠屋で高町家と楓馬家と一緒に祝いをしたし。その時にあの劉崎の奴もいたんだが」

「そうだよこうきくん。私はすぐはちゃんと前から会ってて仲良くなったんだけどしゆなさんとはその時に知り合ったの」

「・・・そうか」

「光輝君、さつきからどうしたの？そんな険しい顔をして」

「いや・・・何でもないよすずか」

「あんたねえ・・・あの時もそうだけどあんた早とちりすることがあるんだから少しは気おつけなさいよ。劉崎の奴に対しても一々突つかからなくていいんだから」

「だってあれは劉崎を止めるために「それでクラス内でケンカして周りに迷惑かけたら意味ないだろ」・・・なんだと？」

おつとつい言ってしまったよ。

まあいいや。

「いや理由はどうであれ結局天野少年と劉崎が殴り合いをして周りに迷惑をかけてたらダメだろ？」

「仕方ないだろ。アイツがいつもなのは達の事を困らせているから俺が止めないといけないんだよ」

「それは天野少年がしたい事で彼女たちは劉崎を殴り合いしてほしいと言っていたか？」

「それはッ！・・・結果的にそうだが。というかあんただってあの時蹴り飛ばしたからだろ！」

「僕はスグに迷惑をかけるなど前に忠告してやったから蹴り飛ばしただけだ。それとアイツの一発でノックアウトできる確信があったか

らだ」

「そんなの結果論だろ！もしあの時避けられたらまた殴り合いに」

「結果論って・・・実際に結果出したしいいじゃん。それにあんな奴にやられるほど僕は弱くない」

現にこれで二回目だからね。

それまで直葉に近寄らなくなったし。

近寄ったらフルボッコにするだけだし

「お前・・・まさか・・・」

ん？これは流石に感づいたのかな？

「なんだ？てかさつきから一誠と違って失礼だなお前。まあ別にいいけどさ・・・」

「そうだぞ光輝。俺がさつき止めたからいいがあの時お前の方に朱奈が行ってたらあれを食らっていたのはお前の方だぞ」

「あんな蹴り、俺が食らうわけないだろ」

やけに自信満々だな・・・

「まあどうでもいいや・・・ご馳走様。僕は先に戻ってるね」

「あつ私も」

「俺も」

「私達も戻りましょう」

「二「うん！」」

「じゃあ俺も」

「・・・」

なんか終始天野少年が睨んでばかりだな。

それから放課後になって一誠と宗二郎と一緒に道場に向かって手合わせをした。

一誠は中々強かったがそれでも僕が完勝した。

その時に一誠が「朱奈さん。あなたは人間ですか？」と真顔で言われた。解せぬ

その後恭也さんが来て手合わせ。

連戦は流石にキツイので今日は一撃すら入れられなかった。

まあ、今回でほとんどの転生者の奴に出会えたしいいか。

情報もユイによってしつかりと手に入れたし。  
取り合えず平穏な日常を壊されないようもう少し彼らを刺激しないように行動せねば。

まあ、僕に危害を加えなければ何もしないから。  
そう・・・何もしてこなければ。

???  
side

アイツは危険だ。

今日はつきりと理解した。

彼はおそらく他の奴らと同じ転生者だろう。ただ魔力を感知できなかった。

ただ、もしかしたら隠しているのかもしれない。

それに魔力以外に何かがアイツには会った・・・

アイツは今後俺の邪魔を必ずするだろう。

そもそもおれはアイツを殺すから、ついでにアイツも殺そうそうしよう。

俺は勇者だ。ヒーローだ。そして正義の味方だ！

前からこういつた事が好きだったし、これで原作キャラや転生者の女の子は俺に惚れるに違いない。

ピンチの時に助け。泣いているときにそばにいて。

そして、邪悪な敵をやっつける。

そういつた主人公なんだ俺は！

特典もそんな感じにしてもらったし。

神様から最高のデバイスと『アレ』も貰ったから。

この世界で俺よりも強い奴なんかいない!!

オリ主は俺だ踏み台を蹴散らすのは俺だ他の転生者を纏め上げ

リーダーとなり、ハーレムを築くんだ！

そのためにアイツらは邪魔でしかない。

あいつらがどんな手を使って仲良くなっているかは知らないけど

うせ洗脳とかそのあたりだろう。

俺以外の男は全員踏み台でしかない！

俺は正義で奴らは悪だ!!

待っててくれみんな。俺が必ずアイツらの洗脳を解いて助けてやる！

アテナ side

……そろそろ原作まであと一年。

私は彼、白銀朱奈さんの事を今もモニターで観察しています。

でも予想外なのは余り私が入れた特典を使わないのですよね……

まあ、今後必要になるので大丈夫でしょう。

それよりも問題なのはあの『転生者』……

少しまずいのかもしいれません……

原作始まる前に一度朱奈さんに伝えないといけませんね。

まあ彼の事はあの魔導書とユイさんがどうにか守ってくれるでしょう。

どうか彼の新たな人生に祝福を……

## 6話

朱奈 s i d e

どうも朱奈です。

ただいま僕は自分の部屋で今日の学校での情報をまとめている。  
現在アナライズで解析した転生者は僕とスグ含めて9人。

とりあえず全員に使ってステータスと特典を見ちやっただZ E !

これからその情報を紙に書いてまとめている所だ。

折角だし全員的能力を改めて見返すか。

まずは内の妹からだな。

白銀直葉

能力値

魔力 ランクA A +

使用魔法

ミッドチルダ式

魔力変換資質

凍結

：魔力を氷に変換する事ができる。

制御はまだ不安定。

特典

・健康で丈夫な体

：健康的で普通の人間に比べて丈夫な体になっている。

傷の再生も常人の体よりも早い。

・魔法の才能とインテリジェントデバイス

：魔法の才能。ただしどんな才能かはランダム。

デバイスは神様が作ったためかなり頑丈である。

・優しい家族

：その名の通り温かく優しい家族と暮らせる。

本人の志望で特に兄が欲しいとの事。



デバイス

シルフィードフェザー

：インテリジェントデバイス。

杖状の武器になる。

本人の才能もありシューターとバインドの魔法が多く登録されている。

こんな感じかな。

まさか魔力変換に凍結持ちとは。

しかも特典で頼んだのではなくてランダムでたまたま手に入れた所がすごいな。

幸運持ちかな？

次にあの問題児劉崎和真だな。

劉崎和真

能力値

魔力 ランクEX

使用魔法

ミッドチルダ式

特典

・魔力EX

：魔力がランクEXになる。

・ニコポとナデポ

：『好意』のある者に対しての魅了。

発動のオンオフ有り

友好的な関係以上でない限り効果は無い。

・無限の剣製（アンリミテッド・ブレイド・ワークス）

：f a t e 『衛宮士郎』の魔術。

剣を投影し貯蔵する能力。

現在固有結界の発動不可。

最大展開数8まで。

ランクB以上の宝具は投影不可。

デバイス

ブレイド

：神様が作ったストレージデバイス。

西洋剣状の武器になる。

魔力収束を得意とする。

うん、ひどいなこれはwww

てかニコポとナデポの能力を理解してないで選んだのか？

そもそもラノベ主人公たちのニコポとナデポもしっかりと好感度が高いから自然と使えるだけで普通能力じゃないんだぞ。

まったく・・・次だ次い！

次はななみだな。

高町ななみ

能力値

魔力 ランクAAA

霊力 ランクC+

使用魔法

ミッドチルダ式

・魔力変換資質

水流

：魔力を水に変換する事ができる。

まだ使用したことがない。

特典

・高町なのはの姉になる

：原作キャラ高町なのはの姉になる特典。

なのはの姉との事で魔法の才能も有り。

ただし才能の内容はランダムによる。

・レイジングハートの姉妹機

：レイジングハートの姉のデバイス。

とある時期まで別の者が所持。

能力は不明。

・レアスキル『Future Strike（フューチャーストラ

イク)』

・戦闘時に未来を先読みし、最善の行動選択することができる能力。  
本来ベルカ式の魔法を使う者でないが神によってレアスキルを所持できる。

なお行動選択時に魔力によるアシストを行うことで通常ではありえない動きが可能。

現在10秒先の未来を先読み可能。

デバイス

現在不所持

レアスキル持ちか。

しかも使い方次第ではかなりのチートだな。

そういえばななみと手合わせした時のように容易く避けられたのはこれか・・・

次は宗二郎だな。

楓馬宗二郎

能力値

魔力 ランクS-

霊力 ランクA+

使用魔法

ベルカ式

特典

ゲームアバター「ソウジロウ」の能力

「??????」のキャラクターのステータスとアイテムを得られる特典。  
能力詳細は不明。

・レアスキル『剣聖』

一対一の時に能力が向上。

相手が得物持ちならさらに能力が向上。

さらに相手が剣もしくは刀を使用する場合はさらに能力が向上

・剣術の才能

：剣術の才能を得る。

ただし技量は本人の鍛錬次第。

デバイス

ゲイルクロウ

：アームドデバイス。

刀状の武器になる。

「ソウジロウ」の使用武器すべての能力を付加。

AI型支援化身【弧鴉】を召喚する能力を持つ。

うわあ〜剣士絶対殺すマンだよこれ。

てかゲームアバターを持つてくるのは予想外だな。

これはキーブレードでは勝ち目ないかな・・・

次は神龍一誠だな。

神龍一誠

能力値

魔力 ランクC+

神力 ランクB+

使用魔法

ベルカ式

特典

・人型ドラゴンの能力

：ハイスクールD×Dの人型ドラゴンと同じ能力になる特典。

・二天龍の神器、及びそのデバイス化

：二天龍「赤龍帝（ウエルシュ・ドラゴン）」と「白龍皇（バニシン

グ・ドラゴン）」の神器をデバイス化し所持する特典。

現在同時使用は不可。

鍛錬次第で同時使用可能。

・レアスキル『魔剣創造（ソード・バース）』

：魔剣を作ることができる。

デバイス

赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）

：左手が籠手になる。

「倍増」と「譲渡」の力を宿している。

本来十秒ごとに力を倍加する能力だがデバイス化したことで能力が改変

十秒ごとに能力（ランクなど）のを倍にし他の誰かに魔力を譲渡することができる。

白龍皇の光翼（デイバイン・デイバイディング）

：背中から翼が生える。

「半減」と「吸収」の力を宿している。

こちらにも本来の能力が改変し

触れた相手の能力（ランクなど）を半減しそれらを魔力にして自分に吸収することができる。

うん、僕が言うのもなんだがもはや人間を捨てかけているね彼。

一応人間の体のままドラゴンと同じ力を持っているところか。

特典もかなり強力な奴だしこれこそオリ主って奴じゃね？

よし、次にあの黒髪の女子と白髪の男子だな。

愛川麗奈

能力値

魔力 ランクA-

魔術回路 40本

使用魔法

ミッドチルダ式

魔術

特典

・遠坂凜の魔術と魔術回路

：f a t eの遠坂凜の魔術と魔術回路を得る。

・レアスキル『支配の魔眼（インペル・アイ）』

：目に入る生物の行動停止。

異能の力を消失、停止、反射ができるスキル。

・心を読む程度の能力

：対象にした相手の心を読む能力。

任意でON、OFFをすることができる。

デバイス

アステイル

インテリジエントデバイス。

本状の武器になる。

主にバインド系の魔法が組み込まれている。

天上院当麻

魔力 ランクA-

使用魔法

ベルカ式

魔力変換資質

黒炎（火熱）

：魔力を炎に変換する事ができる。

ただしなぜか色は黒紫色になる

特典

・『一方通行（アクセラレータ）』

：種類としては移動系の魔法に登録されている。

触れたベクトルを変換する能力。

魔力によって能力が発動する。

・レアスキル『幻想殺し（イマジンブレイカー）』

：異能の力を打ち消す能力。

任意でON、OFFすることができる。

発動範囲は右手首から指先の方。

・ダークフレイムマスター

：中二病でも恋がしたい！で登場する中二病。

神によって一部が魔法として再現するようになる。

因みに右手は幻想殺しがあるため左手のみ黒炎が発動される。

デバイス

ダーインスレイブ

：アームドデバイス。

剣状の武器になる。

モデルは「魔剣ダーインスレイヴ」

……どうしよう最後のがすごいインパクトがあるのだが。  
てか愛川麗奈の心を読む程度の能力はちよつと厄介だな。

まあ、転生者だとバレてもこちらから何もしなければ大丈夫だと思うが……

つてそんなことより問題は二人目だ。

上二つの特典は完全に魔法が効かない。

無効も反射もできる。

……完璧な防御じゃないですか。

唯一の救いは一方通行は常時発動ではなく魔力であること位だ。

……いやそれでも強いな。

まあいいや、そんなことより次だ次。

そう次はあの天野少年だ。

天野光輝

能力値

魔力 S S +

使用魔法

ミッドチルダ式

ベルカ式

魔力変換資質

閃光

：魔力を光に変換する事ができる。

特典

・勇者（まおゆう）の力

：まおゆうの勇者の力。

・レアスキル『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）』

：f a t e のギルガメッシュの宝具

英雄王ギルガメッシュの宝物庫を開くことができる。

・黒の剣士の剣術

：S A O の『黒の剣士』の剣術を得る特典。

デバイス

イーリアス

：インテリジェントデバイス。  
『本来の形状』と違う剣状の武器になる。

持ち主の成長に合わせて成長する。

ただし現主はすでに成長限界のためこれ以上成長しない。

主に補助系の魔法が組み込まれている。

人型になることもできる。

チートだなw

それもすでにlevelMax状態でのスタートとか。

なるほど、道理である時あんな発言ができたのか・・・

ん？でも成長しないってことはこれ以上強くなれないという事か

？

なぜそんなことを？

・・・それもおいおい考えるか。

よし最後に『彼だ』。

スグ達とは違うクラスの少年だ。

あの屋上での食事のあと偶然小さな魔力を感知したからアナライ

ズを使ってよかった。

確か名前は遠山 蓮（トオヤマ レン）という名前だな。

とりあえず見てみるか。

遠山蓮

能力値

魔力 ランクA+

霊力 ランクA

使用魔法

ミッドチルダ式

特典

・高度のマルチタスクと脳内シミュレーション

・高度のマルチタスクとシミュレーションを行うことができる特典

・レアスキル『あらゆる物を作る程度の能力』

：自分が想像した物を作る能力。



作るにあたっての最低限の工程が必要。

・他者の魔法をコピーしてアレンジする能力

・他者の見たまたは触れた魔法をコピーする。

そしてそれらを自分用にアレンジすることができる能力。

デバイス

エクシア

：インテリジエントデバイス

銃剣状の武器になる。

AIの人型になる。

使い次第で最強になれるねこれ。

レアスキルは僕のアナライズの下位互換かな？

いや、あらゆる物だから作るを専門にしているのか。

・・・デバイス作成で語れるな彼。

とりあえずこんな感じかな？

てか本当に転生者多いなwww

しかもこの後も増えるんだろ？

Q 大丈夫なのか作者？

A 大丈夫だ問題ない（震え

・・・変な電波を受信したが、まあいい。

そんなことより今後の行動についてだ。

基本僕は放任主義者だからスグが何してても今のところは放置だな。

ただ、流石に危険な状況はほつとけないからな……でも他の転生者に目を付けられたくないし。今はななみと宗二郎は敵になることはない。一誠もこちらが敵対しない限り大丈夫だろう。遠山蓮もそんなところかな？

ただ劉崎は転生者ってバレると後々面倒になる。それに合わせて愛川麗奈と天上院当麻がどう行動するか。最後に天野少年……

アイツは少し距離を置くべきだな。

あの『目』は少し危険だな。

なにせ軽く殺気を放っていたから。

特典の事も考えると何するかわからない。

「ふく疲れた……寝よ。」

「あつマスター、神様から連絡です」

「この時間に連絡か、珍しいな。」

『アテナです。少しよろしいですか？』

「大丈夫。それにしてもどうしんです？こんな時間に」

『実はそちらに一人厄介な転生者がいるみたいです。それもあなたと同じ学校に。』

「あくうん……心当たりがある」

『そうなのですか？でしたら話が早いですね』

「？」

『実はその転生者を転生した神は私の妹のフレイヤなのですが。その転生者にあなたの事を話したみたいで……』

「ほうほう」

『何といえいいのでしょうか……かなり危険人物扱いされて……』

「ふむふむ」

『おそろく・・・原作に関わると確実に命を狙ってくると思われます』  
／（＾○＾）／ナンテコツタイ」

これは天野少年にばれているな。

日常が・・・平和が・・・／（＾○＾）／

い、いやまだだ。まだ終わらんよ！（必死

「アテナ、あつちは僕が原作に関わろうと思っていると思っっているんですよね？」

『ええ、おそろく』

「なら介入しないのとバレなければ大丈夫ですよね？」

『ええ・・・まあ・・・』

「てことは【僕】が行動している時に【僕】別の行動をとっていれば相手は最低限襲いに来ないですよね？」

『？・・・それってつまり？』

「だから変装した【僕】が原作介入しても、違うところで偽物の僕の存在が確認されれば問題ないですよね？」

『ああ・・・なるほど・・・』

さてそうと決まれば『あの子』と契約しないと。

それと新しいデバイスを作らないと。

あつ『アレ』を彼女に頼もう。

最近『報酬金』でもらった10万円そのまま賽銭箱にぶち込めばいいだろう。

それと魔導書もユイと一緒に少し調整しないと。

さくさく忙しくなるぞく♪

あつ守護騎士の皆に話さないと・・・

## 7話（OVA風）

ななみ side

ななみです。

現在私は三年生になり、12月になりました。

・・・ここからはダイジェスト形式で話すわ。

まずなのは達だけど、劉崎くんがとりあえずなのは達原作キャラに付きまといっている事。

そしてなぜか一誠くんの事を敵視している事。

後どうしてか天野くんとは余り関わっていないみたい。

なぜか劉崎くんは彼を見かけるとすぐさまその場から離れるのよね。

流石に力の力量を知ったのかしら？

あと劉崎くんといつも一緒にいる愛川さんと天上院くんも普通の小学生として生活をしている。

ただ天上院くんは一部の男子と一緒に何やらおかしな事をしているみたい。

最近聞いた話だと男子メンバーで『未来ガジェット研究所』？なる組織ごっこをしているみたいで。

いつも「静まれえ！我が優秀なラボメ諸君!!」だとか「この俺に宿るう闇の炎を狙う管理局に対しいついに我々のお反撃の時だああ!!」だとか・・・

終いにはいつも「フウウーハッハッハッハッハッハッハ!!（。D。）」つてうるさいし。

その時はいつもアリスちゃんが腹パンをしている所をよく見る。

愛川さんとは一度私とソウジと屋上で互いに転生者であることを明かした。

彼女の『心を読む程度の能力』はすごく強力なので味方になるのはありがたい。

さらに彼女は同じクラスにもう一人転生者だと思われる少年を見つけたと言っていた。

それと彼女から「天野光輝には気おつけなさい」と忠告を受けた。彼女の能力からして警戒する必要があるね。

次に私たちのクラスなだけどソウジと一緒にクラスになり朱奈くんは隣のクラスになりました。

朱奈くんはクラス内では余り喋らないでいつも本を読んでいるか寝ているらしい。

あと最近、彼は音楽室に行きピアノを弾くらしい。

私は一度も聞いたことはないのだけれどもソウジは一度聞いたらしい。

どうやら音楽関係は相当うまいらしく男女関係なく人気だとか。

今の所私たちから見て朱奈くんは所謂恭也兄ポジションなのか？って感じ。

魔力も高くないが身体能力はかなりあるみたい。

現状、転生者がそうじゃないかはわからないのだけれどもそれでも敵になることはおそらくないだろうとソウジは言っていた。

まあ、直葉ちゃんもいるしもし転生者だとしても妹には迷惑をかけたくないでしょう。

さて・・・いよいよ原作開始まであと少し。

不安要素はいくつかあるのだけれども多分大丈夫でしょう。

とにかく私はなのはを守ってソウジと一緒にハッピーエンドを目指す！

あつソウジのクリスマスプレゼント買わないと♪

???

side  
今日は12月夜は寒く厚着をしないと体が冷え風邪をひいてしま  
いそうだ。

俺の名前は遠山蓮。

・・・なぜ自己紹介したんだろう？

実は俺は神によって第二の人生を送っている転生者である。

そしてこの世界『リリカルなのは』の世界に来たのだが。

・・・いかんせん転生者が多い。

なんで原作のなのはのクラスに5人もいて内のクラスに一人いる

んだよ？（；・ω・）

それに一つ上にもいるみたいだからさあ大変だ！（―――；）  
こちらあまり原作に関わりたくないし自衛用に特典をもっているだけなのになぜだ・・・

ま、まあいいや。早く帰って料理を作らないと。

俺は一人暮らしだが人型になれるエクシアはなぜか食事をとるからな、デバイスなのに。

今日は鍋料理。体が温まる食事が良いと思い野菜や肉、締めのだリアにするためのチーズを買った。

「帰りた〜い♪帰りた〜い♪温かハ〇ムがm・・・は？」

歌いながら帰っていたらなぜか金髪ツインテールの少女が倒れているのですが・・・

これ原作のフェイトじゃないですか!?!やだあ!?!Σ（・□・；）

服装は黒のコートを着ているからとりあえず大丈夫そうだけどそれでも道路で倒れているのはまずい・・・

「うっ・・・アルフ・・・姉さん・・・」

「こっこれはどうすればいいのだろうか・・・ん？今この子姉さんって「その君」・・・へ？」

そこには赤毛の女性と声をかけてきた倒れているフェイトであろう子と同じ金髪のサイドテールの女の子がいた。

「あなた私と『同類』よね？ちよつと話を聞いてもいい？」

・・・どうやら巻き込まれるみたいだな（； 皿、）

## 無印編 「桜龍と金創×幻英と正義」

### 1話 「幻英と二つの不屈」

朱奈 side

皆さんおはよっぷ〜♪朱奈だよ〜♪

さあ電波を受信したことで謎の挨拶をしたことだし本題に入ろう。

・・・まあ簡潔にいうと4年生になりました☆

そして昨日少年と怪物が戦っている夢を見てユイに話した所原作が始まったらしいです☆

( ^ ω ^ )・・・はあ〜ついに始まったか〜

てか原作知識を消したのはいいのだがユイ辺りが知っているから残した方が正解だったんじゃないか？

それと僕は何があっても他の転生者に目を付けられたくないから介入する時は変装することにした。

・・・この時のための準備は十分にできている大丈夫だ。問題ない  
(フラグ)

さて今日朝起きて魔法と魔力変換資質の勉強をしている所です。

「朱奈、ここはこうして・・・」

「・・・フムフム」

「で、ここをこう・・・」

「・・・なるほど」

「・・・朱奈？」

「ん？」



「・・・先ほどユイが言っていた話はジュエルシードが関係する話ですよね？」

「・・・そうだが急にどうした？リニス」

今勉強を覚えてくれていている使い魔のリニスが突然問いかけてきた。

彼女と会ったのは3か月前。

夜、歩いていたら少し大きい猫が倒れていたのので家で保護したら使い魔だった。

だから自分の魔力を送ってそのまま使い魔として契約をし、飼い猫として暮らしている。

その間に彼女の前の主人の事、魔法を教えた少女の事、そしてあそこで何故倒れていたかを聞いた。

「前に話しましたがプレシアはジュエルシードを求めている。それは知ってますね」

「うん」

「そしてそれはここに住む魔導士たちも関わってくると」

「まあ、ジュエルシードを回収するにあたってその手伝いとかはするだろうなこの魔導士たちは」

「その内フェイトたちも来てジュエルシードの取り合いになる？」

「だろうな。回収は元の持ち主に返し封印するためだし、その反対にフェイトたちは回収をしてプレシアの実験とやらのために使われるからそれぞれ違う目的で回収しているから戦うことになるだろう。特にフェイト側は状況からして話し合いの余地はないのだろうか？」

「・・・はい」

そうリニスの話によるとプレシアはアリシアを蘇らすためにジュエルシードを求めているらしい。

そしてそのジュエルシードを使って次元世界の狭間にある『アルハザード』に時を操る魔法と復活の魔法を手に入れアリシアを復活させる。

さらにリニスから聞く話だとプレシア自身も病を患いそう長くは生きられないとか。

「で、リニスはどうしたいんだっけ？」

「・・・フエイト達に協力してプレシアを止めたい。そしてアリシアを別の方法でよみがえらせたいです」

「・・・そうか」

そう、プレシアの計画は確実に失敗する。

そもそもジュエルシードをすべて集めたとして本当に『アルハザード』に行けるとは限らない。

そしてアルハザードそのものが存在するかもわからない。

最後にアルハザードにその魔法が存在するかがわからない。

・・・あまりにも不確定要素が多すぎる。

これらがすべてそろっても何らかのデメリットが存在することが明らかかな上彼女は指名手配の犯罪者。

管理局にバレ中途半端に終わるのが見える・・・

まあそもそも・・・

「僕が蘇生できるから行く必要がないんだよね・・・」

「・・・本当にできるんですよね？」

「モチのロン！そのための手配もすでに済ませいる」

そう・・・アリシアをよみがえらす方法は他にもある。

なにせその気になれば『不老不死』にしてやることもできるからね。

改めて自分の特典の強さを思い知らされたよ。

「本当にユイには驚かされたよ。流石、魔導書管理してくれている事だけあるよ」

「・・・あの魔導書はいったい何ですか？明らかにロストログアなのはわかるのですが・・・」

「うくん・・・精霊となった英雄達と世間に忘れられた世界の住人達を繋ぐ魔導書？」

「何故、疑問形なんですか・・・」

「ま、まあいいじゃん。この魔導書のおかげで安全にアリシアが蘇生できるんだから」

・・・後でユイに魔導書の状況を聞かないと。

てか主に永琳さんがすごい、流石優曇華を生贄にしているだけはある



スグは原作キャラ、愛川さん、劉崎、天上院くん、一誠と同じクラスになったとか。

天野少年は隣のクラス。

それと遠山少年はさらに別のクラス。

こうもスグがなのは達とクラスが分かれなものはなぜだろう・・・まあ心配ないだろう。最近劉崎はスグには近づいていないみたいだし。

学習したのか天野少年にも近寄っていないみたいだからクラス内で喧嘩もなくなっているらしい。

まあ原作キャラ達には言い寄っているらしいけど。

その度にななみが僕と宗二郎に助けを求めてくる。

僕に聞くな宗二郎だけに聞けよカップル。

あつそれはそうとななみと宗二郎何だが、どうやら付き合い始めたらしい。

・・・本当にようやくだなこの二人は」(ハ、ハ、ハ)「ヤレヤレ

本人たちは気づいていないようだがハッキリ言ってイチヤイチャすぎです。

せめて人のいないところでヤレ(誤字あらず)

まあたいして発展はしてないらしい。

毎日帰りに手をつないでいるくせに・・・

閑話休題(まあ、そんなことはどうでもいい)

現在放課後になり僕は帰らずに音楽室に向かう。

最近自分の中でのブームで音楽室のピアノを弾いてから帰るのが習慣のごとくなっていた。

今日は何を弾くかは決めてある。

めらにほっぷさんの「絶対的一方通行」をピアノのみで演奏。

この歌いながらの弾きはかなり自分の中で熱が入る。

いろんな曲を弾いて歌うのだが、最近こういう曲をばっかり弾いてしまう。

何だろう・・・悲しい曲ばかりを歌ってしまい唐突に涙を流してしまふ。

気持ちを切り替えて明るめの曲にしてみるとそういう気分ではなくなる。

なんでだろう・・・？

まあ、たいして問題ないし。それに今の生活に不満があるわけではない。

寧ろ充実・・・ああ、そうか・・・

前世はこんなにも充実していなかったからだ・・・

前世と今の自分が『この時だけ混ざり合っているんだと思う』。

まるで・・・ワスレテハイケナイヨウナ・・・

・・・落ち着こう、今は演奏することだけに集中しよう・・・

「よしと・・・~~~~~♪」

見るな。来るな。

知るな。渡るな。

それ以上こちらに歩みを進めるな。

これは彼の中では歌であり警告である。

コレイジヨウコチラニキテハイケナイ。ナゼナラコチラハ・・・

・・・バケモノノセカイナノダカラ・・・

この幻想の時間がとても長く・・・そして短く・・・儂く崩れるように現実を戻す・・・

少年は知らない。ただ一人と思われるこの空間にいつも廊下の片隅で聞いている影を・・・

---

ななみ side

ななみです。

現在夜の街を走っています。

え？何故ってそれは・・・

「なのは！早く来なさい!!」

「まっ待ってよお姉ちゃん！はあ・・・はあ・・・」

そう私となのははいよいよ原作が始まる動物病院に向かっている。

学校の放課後、私とソウジ、なのは達、それと直葉ちゃんは原作に登場するユーノ・スクライヤから『・・・たすけて・・・』と念話が送られ、見つけたので近くの動物病院に連れてった。

そして夜になった時に『だれか！僕の声が聞こえる方、どうか僕に力を貸してください!!』と広域念話が発せられ私となのはは一目散に外に出て魔力が発せられる方に向かった。

それと直葉ちゃんとは動物病院の時に互いに転生者であることは話しといた。

当然のごとく直葉ちゃんは私が転生者であることはわかってたみたい。

試しに兄の朱奈はどう？と聞いた所、「転生者かどうかわからない」との事。

微量の魔力しか感じないからやっぱり違うのかな？

そんなことより今はこつち。

「はあ……はあ……やっと着いた……」

「はあ……はあ……お姉ちゃん……速いよ……」

槇原動物病院。ここはユーノを預けた場所でさらにここで登場するのは。

と考えていると突如大きな音が鳴る。

「キャッ！」

「なっ何!？」

爆発音のような音が響き渡ってそれと同時に周りの景色が変わる。

私には封時結界が展開されたことはわかるがなのは突如起きた状況に慌てる。

「えっ!?!何この状況!？」

「落ち着いてなのは!今は……!？」

すると突然病院の壁の一部が崩れ土煙がお切る。

その後突如小さな何かが飛んできてそれをなのはがキャッチする。

「にやっ!?!あの時のフェレットさん!？」

「来てくれたの?！」

「しやっ喋った!？」

「ふえっ!?!なんでフェレットさんが喋ってるの!？」

私はわかってはいたがとりあえず驚いた反応をする。

なのはは当然のように喋りかけたユーノに驚く。

そして先ほど土煙の起きたほうを向くとそこには『黒いナニカ』がそこにいた。

「つてそんなことよりなのは!逃げよ!!」

「えっ!?!う、うん!」

なのはも黒いナニカを見て危険を感じ一緒に逃げる。

とりあえずこの場は逃げながらユーノの話を聞かないと。

「はあ……はあ……その、何が何だかよくわかんないんだけど、いったい何なの!?!何が起きてるの!?!」

「今は詳しいことは言えないのだけれども、君たちには素質がある」

「素質？なんの素質よいつたい・・・」

「お願い僕に少しだけ力を貸して。魔法の力を！」

走りながらユーノの説明を聞いている私たち。

あのユーノ・・・それ普通見ず知らずの人、それも管理外世界でホイホイ言つて言い物じゃないよね？

「魔法？それっていったい・・・」

「!?なのは!!」

走っていたらさっきの黒い物体が上空から襲いかかって来た。

私は迷わずなのはを抱きしめながら横に避ける。

またも土煙が起き、私たちは何とか避けられることができた。

「お礼は必ずします！だから僕に力を貸してください!!」

「お礼とかそんな場合じゃないでしょ!」

「そうだよ！もうどうすればいいの・・・」

普通この状況はかなりまずい一般の人から見れば謎の生物から少女二人が襲われているのだから。

そしてその黒いのは再度私たちに向かって襲い掛かる。

「きやああああああああああつ!!」

・・・目を瞑つて来るはずの衝撃に耐えようとはお食いしぼるが一行に出来ない。

恐る恐る目を開けるとそこには・・・

「そ、ソウジ！」

「すまない！大丈夫か!」

「宗二郎さん!?なんでここに?」

「さっきななみに電話をもらつてねもしもと思つて来てみればビンゴだったよ!」

バリアジャケットを展開したソウジの姿がそこにはあった。

見た目は薄青い色をした和服で所々に武士がつける鎧の一部が型と膝、胸の部分についており、手には刀のような武器を持っている。





「そして不屈の魂（こころ）は」

「この胸に!!」

「この手に魔法を。レイジングハート!セツト・アップ!!」

「Standby Ready. Setup.」

なのはが掛け声と共に桜色の柱のような光が発生し見えなくなる。

「落ち着いてイメージして。君の魔法を制御する魔法の杖の姿を。そして、身を守る強い衣服の姿を!」

「えっ!?じゃ、じゃあとりあえずこれで!」

そういうとさらに光が強くなり。なのはの姿が見えなくなり。

すぐに光が収まると、そこには学校の制服に似た白いバリアジャケットを着たなのはの姿があつた。

「えっええー!?なにこれ!?!」

「よし!成功だ。次にレイジングソウルを持つあなたも同じく復唱して!」

「わかった!」

「我、使命を受けし者なり。」

「我、使命を受けし者なり。」

「契約のもと、その力を解き放て。」

「契約のもと、その力を解き放て。」

「風は海に、太陽は天に、」

「風は海に、太陽は天に、」

「そして不屈の魂（たましい）は」

「そして不屈の魂（たましい）は」

「この胸に!!」

「この手に魔法を。レイジングソウル!セツト・アップ!!」

「Standby Ready. Setup.」

今度は海色の魔法陣が展開したのはと同じように光が発生し見えなくなる。

その後、光が収まると、そこにはなのはのバリアジャケットと同じデザインをした私が現れる。

優いつ違うのはなのはが白の部分が私は水色に近い青になり、青の部分が黒になり、赤いリボンが黄色のリボンになっている。

そして手に持っているのが杖ではなく小太刀と同じ形状の武器になっっていた。

「あ、お姉ちゃんの色違いなの!」

「まあ、そうしようと思っただけだからね」

「二人とも終わったか!」

「うん!」

「凄い!この魔力なら...!」

すると黒い物体の魔力と思われるオーラが大きくなる。

「な!?!まだ強くなるのか!」

「そんな!?!この力、さらにジュエルシードの魔力が跳ね上がっている!?!」

「ど、どうすればいいの?」

「封印を!レイジングハートとレイジングソウルには封印の魔法が組み込まれています。呪文はあなた方二人の心の中にあなた方の呪文が浮かぶはずですよ!」

「とりあえず私もソウジと一緒に食い止めるからなのはは呪文の準備をして!」

「ふええ!?!うっうん...」

最初は驚くも了承し、唸るのは。

さてと...

「とりあえず止まりなさい!レイジングソウル!」

「All right. オーシャンシューター」

すると私の周りに水色の球体が3つ展開される。

「シューター!」

それら3つの球体は黒い球体にぶつかるがあまりダメージが入っていないようだった。

まあ攻撃がメインじゃないからね。

「レイジングソウル。早速だけどお願いね！」

「わかりました。オーシャンシユーター、ウォーターバインド展開！」  
するとぶつかつたはずの球体から水色の鎖が展開される。

それらは黒い球体に巻き付き拘束する。

「ゴギヤアアアアアアアアアアアツ!!」

「無駄だよ引きちぎろうとしても元々水でできているから何度も再生するのよ。ソウジ！」

「ああー小鴉!!」

黒い物体が動けないうちに私とソウジは接近し互いに小太刀と刀を構える。

「神速ー！」

「疾風ー！」

同時に斜めに切り、さらにその上からソウジの小鴉が縦に二つの切線を作る。黒い物体に斜め十字と縦二つの切り跡が見える。

黒い物体は悲鳴を上げながらこちらに触手を伸ばしてくる。

「ツシー！」

「ツフー！」

ソウジと私はそれぞれ別の方に避け、触手から逃れた。  
しかし

「なのはー！」

「ふえっ？」

なのはの方に一本の触手が伸びる。

ソウジと私は避けるのに精一杯だったから援護に行けない。

なのはは杖を前に出し目を閉じ始める。

だが・・・

「!?GYAAAAAAAAAAAAAAAAA!?!?!」

突如黒い物体がなのはに向けて伸ばした触手が切り刻まれ、さらに本体に赤い一線が直撃した。

「・・・大丈夫かなのは?」

なのはがいた方を向くとそこには・・・

「い、いつせー・・・くん・・・?」

そこには白と黒のワイシャツ、黒がメインのブレザーを全開にし、黒のズボンに赤色のTシャツを着ており。

左手に赤い籠手、右手には赤色のフィンガーグローブを身に着けている神龍一誠の姿がそこにあった。

## 2話 「龍帝と魔法少女と鎧と黒猫」

直葉 side

これはななみ達が戦闘をする数分前。

「!?」ガタッ

「ん?どうしたスグ?」パクパクッ

「なっ何でもないよお兄ちゃん!」( ; ▽ )

突如私の頭の中に念話が届く。

それが原作の合図と私はわかっていたのだが現在私の家では夕食の最中である。

「そうか?直葉、急に席を立つのは行儀が悪いから気お付けるんだぞ」

「うん、わかってるよお父さん」

「そうか、あつ卯月醤油をとってくれる?」

「うん♪はい、凜ちゃん!」(▽、\*)

「ありがとう♪」(▽、\*)

と、とりあえず夕食を食べて早く行かないと。

ななみさんと今日初めて互いに転生者であることを打ち明けた。

そして今日の夜に起きるジュエルシードについて一緒に対処しようという話だったのに。

これじゃあいけないよおゝ

---

よ、ようやく夕食が終わって先に家族に部屋にいと伝えた。

とりあえずフェザーを使って自身の分身を作り、窓から向かおう。

「フェザーお願い!セット・アップ!!」

「了解！・ set up.」

私は窓から飛び出すと同時にバリアジャケットを展開する。

私のバリアジャケットは上は白い服の上から緑のジャケットを羽織っているおり、下は白のスパッツと白のニーソで腰に緑のロングスカートのようなものを身にまとっている。(イメージはSAOのリーファの露出少なめ)

フェザーに補助をしてもらって飛行しながらすぐさまサーチをかけるなみさん達がどこにいるかを探す。

「master. 500メートル先に大きな魔力反応です。」

「誰のかわかる?」

「一つはなのはさんとなみさん、それと宗二郎さんのがあります。あと、もう一つは神龍さんだと思われます。」

「結構いるね、他には?」

「・・・後一つかなり大きな魔力があります。おそらくそれがジュエルシードかと。」

「わかった。フェザー、すぐに戦闘に参加できるようにシユーターの準備をお願い!」

「了解です。」

・・・しばらくして到着するとそこにはなみさんと宗二郎さん、そしてなのはちゃんを守る一誠君の姿が見えた。

どうも一誠です。

現在、ジュエルシードと思わしき黒い物体からなのは守りました。

それにしても本当に危なかった・・・

なのはが襲われる瞬間、咄嗟にソード・バースを発動して、魔剣で触手を切り刻まなかったらどうなっていたか。

・・・考えるのはよそうか(´・ω・｀)

それと本体に一発、ブーステッド・ギアで貯めた魔力を使って砲撃を食らわせてやつといた。

ハハッ、ざまあないぜえw

黒い物体は現在行動不能の状態。

「いつせーくん！なんでここにいるの!?それにその姿はなんなの!？」

Σ(・□・;)」

「ん？まあなんとなくわかるだろ？」

「えっ!?じゃあ君も・・・」

ここでユーノが俺に尋ねる

「そう、魔導士。まあ俺の場合は騎士の方かな」

「きし?それってどういう」話は後!今は封印に集中して!!」わ、わかったの!」

驚いているのはと平然としている俺の会話に割り込むようにななみが叫ぶ。

「じゃあ俺も行きます。それとまた一人援護が来てくれたみたいだし」

「え?・・・あつ!直葉ちゃん!!」

「ななみさん!遅れてすみません!!」スタツ

「ふえええっ!すぐはちゃんも来たの!?もう何が何だか分からなくなつたのく・・・」

「あははっ・・・まあ一度にこんな人数がいるからね。仕方ないね」

なのははもうこの状況についていけないのかおろおろしている。

これでかなり簡単に封印できそうだ。

とここで宗二郎さんが叫ぶ。



「それじゃあ皆で一斉に一撃入れて、それでなのはちゃんが封印して！」

「そうねソウジの言う通り、皆で行きましょう！なのは、準備お願い！！」

「わっわかつたのー！」

「それじゃあ行きますか。直葉は大丈夫？」

「うん！夕食を食べたばかりだしいい運動になるよ（太らない的な意味で）」

「そ、そうか」

余り女子から聞くべきでない事を聞いた気がする。

そう思いながら俺は目の前の黒い物体に目を向く。

「行くよ！ウオーターバインド！！」

ななみのバインドがあつさりと決まる。

先ほどに大ダメージを食らったせいかわい物体もあまり抵抗しない。いや正確にはできないだった。

「それじゃあ僕も遠距離スキルで！双竜一線！！」

「行きます！シルフィードシューター。シュート！！」

「倒れなさい！オーシャンスレイサー！！」

宗二郎さんとななみさんは斬撃を、直葉は15の球体を浮かばせ放つ

全員、それぞれ遠距離の攻撃を行う。それじゃあ・・・

「行くぞドライグー！」

「ああ、やれ相棒！」

「食らい尽くせ！ドラグバスター！！」

こちらにも先ほど黒い物体にやった両手を目の前で回し中心に魔力の塊を作り、殴る。

すると殴った魔力の塊から黒い物体に向かって砲撃が出る。

「GYAAAAAaaaaaa.....！！」

四つの攻撃が当たるのと同時に黒い物体が悲鳴を上げ、その悲鳴はだんだん弱くなる。

「なのは、今！」

「うん！リリカルマジカル！封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード。封印!!」

なのはの呪文と共に杖から桜色の三つの光の翼が展開され、そこからリボンのような帯が黒い物体に向かって飛んでいき、光に包まれる。

光が消えそこには青色の宝石のみが残されている。

「これは・・・」

「レイジングハートに触れてみて」

「う、うん」

ユーノの言うとおりに触れると杖の赤い宝石の部分に青色の宝石は吸い込まれていく。

「おつ終わったく・・・」

「みんなありがとう。なんとお礼したらいいか・・・」

「かなり最初はきつかったね、ななみ大丈夫・・・」

「大丈夫、ありがとうソウジ。なのはもお疲れ」

「うん！それといっせーくん。さつきは助けてくれてありがとうなの!!」

「俺は別に、ケガがなくてよかったよ」ゞ(・ω・)なでなで  
「にやつ!?!にやあ~~~~~~~~／／／／／／／／／／／／」

俺は特に理由がなかったが自然となのはの頭を撫でた。

なのはは顔を赤くしながら気持ちいのか目をツインテールの髪をびよこびよこさせる。

・・・まるで猫みたいだな。

宗二郎さんとななみさんも安心したのか互いに肩を合わせる。

唯一、一人こちら側とななみさん側を見ながら落ち込んでいる直葉がいる。

「とりあえず早くこの場から離れませんか？ていうか四人とも私にイチヤイチャを見せつけないでくれませんか!」

「あ、ごめん」

「帰った後で、朱奈さんにでも頭撫でてもらえ」

「ふえっ!?!ち、違うよすぐはちゃん！なのはは別に・・・ううううう／

／＼

「なのはちゃんはまだ許すけど一誠。後でシューター10発お見舞いしてあげる「何故に!」。それとななみさんと宗二郎さんは恭也さんに夜二人つきりであることないことやってたって言ってる!」

「すみませんでした、だからやめて!」

そんな感じで雑談していると景色が変わる。

ようやく封時結界がなくなるか、誰もが思った。

……目の前に黒く歪みが発生する。

「!?何か来るぞ!?!」

「えっ!」

「これは魔力だけど、何か少し違う!」

「なのは!?!俺から離れるな!」

「ふえっ!?!何が・・・!?!」

すると上空から突然成人の大人の一回り大きい鎧が飛んできた。

「「「「「!?!」」」」」

その鎧は繋ぎめの部分がなく中に誰もいないのがわかる。

ハートのマークがついた胴体が浮いておりそれに合わせて手と脚、頭が中身のない状態で浮いている。

「何・・・これ・・・?」

直葉が発した言葉にみな気づく。

鎧のしたから黒い渦が生まれ、そこから黒いアリののような物体が発光している目のような物体がこちらを見る。

「・・・全員、まだ行ける?」

「そんな・・・逃げようよお姉ちゃん!」

「無理だなのは、周りを見てみる」

俺はななみの言葉にすぐさま理解した。

俺たちの周辺、半径300メートル内に結界が張られている。

「これは・・・戦うしかないね・・・」

「どうしよう・・・お兄ちゃん・・・」

宗二郎さんとななみさんは大丈夫そうだ。

ただなのはと直葉は無理そう。

なのはは完全に混乱し、状況についていけない。

直葉は原作にはない事態に、そしてあの異形の物体に完全に恐怖に陥っている。

「ツチー! そのフェレット。二人を守ってくれ!! ななみさんと宗二郎さんはあのアリみたいな奴を。俺はあの鎧の奴をやります!」

「!・・・わかった。ソウジ!!」

「わかった! クロウ、小鴉。もう少しだけ頼む!!」

「了承!」

俺は鎧に突っ込みながらブーステッド・ギアの倍加を行う。

「相棒、どうやらこの物体を操っている輩がいるぞ」

「何!? どこにいる?」

「限界ぎりぎりの所300メートル先だ。今の状況じゃあ本体を叩くのは厳しいな」

「クソッ! ならすぐにかいつを倒して現況も叩く! ソード・バース」

俺は鎧に向かって魔剣を作り。切る。

火炎殺し（フレイム・イーター）の氷結により腕が凍るがすぐに碎かれる。

俺は溜まった魔力を使ってドラグバスターを放つ。

「食らえ・・・!!」

砲撃を放った後に土煙が発生する。

これで少しは・・・

「!?・・・ガッ・・・!」

急に飛んできた何かに防御もできずに吹き飛ばされる。

朦朧とする意識を無理やり起こしながら見ると、鎧の腕が回転をかけ飛んできたようだ。

「・・・クソッ!」

「相棒まずいぞ!黒い奴らがどんどん増えているぞ!あれじゃあ二人とも処理できない!!」

「なっ!?・・・急いで助けに・・・!」

鎧は逃がさないとばかりにこちらに襲い掛かる。

俺はとにかく防御のするしかなかった。

しかし、防戦一方の状況から突如と進展する。

・・・悪い形で・・・

カコンッ

と鎧の頭になる。

鎧が振り返るとそこにはなのはがいた。

「い、いつせーくんから離れるの!」

「なのは!」

なのはは震えながら杖を前に出す。シューティングモードに切り替えて魔力を高める。

・・・!デイバインバスターか!

だが・・・

「デイバインバスターきやつ!!」

「なのはー！」

なのはの後ろに突如現れた腕がなのはの体を鷲掴みする。

鎧の周りには足と頭、それと一本の腕が・・・一本？

「な!?なのはを離せー・・・グアッ！」

助けに行こうとしても鎧が阻む。

「カハッ・・・ハッ・・・い、いつせー・・・く・・・」

「なのはークソツ、ドケエエ!!」

鎧の腕はなのはを握りつぶすかのように力を強める。

いくらなのはがバリアジャケットを纏っているとはいえ、このまま

じゃ・・・

・・・させてたまるか!!

ソード・バースとブーステッド・ギアを同時に使いながら鎧に攻撃するも中々どかない。

砲撃も放とするとなのはを盾にするように動く。

このままじゃなのはが・・・!!

「その少年。少し右にずれな！」

「!?」

発せられた声の方に向きながら反射で右にずれると、そこに何かが飛んでくる。

・・・剣？

それもただ剣がただ普通に飛んできたのではない。高速で回転しながら鎧に向かっていく。

ガッコン!と鎧を『叩いた』ような音がなりその剣は回転は回転が弱めないまま・・・

今度はなのはを掴んでいる腕の方に行き『切り裂く』

「ウッ・・・ゴホッ・・・ケホッ・・・」

「なのは大丈夫か!？」

「う、うん・・・ケホッ・・・大丈夫」

「おくそいつは良かった良かった」

俺は声の発した方を振りむく。

そこに先ほど飛んできた剣が彼の手のもとに飛んでくる。

まるで主の元に戻って来たみたいなの・・・

「いや〜お急ぎの所申し訳ないんだが〜」

そこにいたのは

「俺も参戦させてくれないか♪」

全身黒コートに大きなフードに二つの『猫耳』のような物。

それと彼の後ろからひよこひよここと揺れる『尻尾』のような物を生やした奴がそこに立っていた。

### 3話 「紅白と白黒×剣は投げる物」

ななみ side

一誠が鎧と対決している間私たちは黒いアリののような物体を相手にしていた。

「オーシャンシューター！シュート!!」

私は3つのスフィアを展開にして放つ。

それぞれアりに当たり消滅する。

「はあああ！天西風!!」

ソウジもアリに対して光の斬撃を浴びせる。

だが、一向にアリたちが減らない。

「こいつら、一体一体は弱いけど数が多すぎる・・・!」

「ていうかこれ、どんどん増えてるじゃない!ソウジ、どうしよう!」

「二人とも大丈夫!」

ユーノがこちらを心配そうな顔で見る。

「今は大丈夫だけどこのままじゃ魔力が尽きちゃう・・・」

「フェレット!申し訳ないんだがなのはと直葉さんを安全な所まで非難させてくれないか?」

「ま、まってそうじろうさん!いつせーくんが・・・」

私たちがユーノになのはと直葉ちゃんを非難させようと言うものは一誠を気にしている。

今一誠は鎧と対決しているがみている限り防戦一方の状況みたいだ。

でもこの状況では誰も・・・

「わ、私いつせーを助けにいくの!」

「ちよつとなのは!待ちなsきやつ!」

なのはが一誠の方に向かって走りだし、それを追いかけてようと私は走ろうとするとアリたちが一斉に私にしがみついて来た。

「ちよつ!離しなさ・・・うぐつ!」

「ななみ!?クソツ!旋風切り!!」

押しつぶされそうになった私をソウジがアリたちを切り刻んでい



く。

「あ……ありがとうソウジ……」

「大丈夫か!? 今回復葉を!」

ソウジは手を横にスライドさせ指でなぞる。

今、ソウジがやっているのはアイテムを収納している【ウィンドウ】を開いている。

操作し終えたソウジはどこからともなく現れた赤い液体の入った瓶の蓋を開け無理やり私の口に押し込む。

口の中に入った液体は少し痺れるが体の痛みがどんどん消えていく。

「ななみは少し休んでここは僕が「きやあっ!!」!?!」

ソウジの発した声を打ち消すかのような大きな悲鳴の方を向くとユーノの結界が破られ直葉ちゃんが襲われている。

「くッ! 僕の残りの魔力が……!」

「いやああああ……来ないで……」

!?! まずい直葉ちゃんが!

「助けて………助けてええええ! お兄ちゃああああん!!」

その言葉と同時にアリたちが一斉に直葉ちゃん達に向かって飛んでいき押しつぶすように襲い掛かる。

ソウジも私も距離が遠すぎて助けに行けない。

ユーノと直葉ちゃんはまだもう無理だと悟り目を瞑る……

が、アリたちは宙に浮いた状態で動かない。  
いや、正確には停止した状態になっている。

「・・・あ、あれ?」

「な、なにが起こっているんだ?」

「これは・・・?」

「急にどうなって・・・」

直葉ちゃん、ユーノ、ソウジ、私の順番で発した声は静かに響く。  
しかし、一向に動かない、基い停止したアリたちは無反応のままである。

「・・・はああ。本当に面倒なことになっているわね・・・」

突如となく聞こえた声はとても透き通っている女性の声が響く。

三人と一匹は声のした方を振り返る。

そこには紅白色の肩、脇が露出した巫女服と後頭部に着けている大きな赤いリボンが特徴の少女がそこに立っていた。

「まったく、アイツにお願いで仕方なく来たはいいけど・・・これはめんどいわね・・・」

彼女はめんどくさそうに頭を掻きながら右手に持つお祓い棒を振るう。

すると停止したアリたちが一気に凝縮し始め四角いボックス状の塊になる。

「ほら、退治退治っと」

巫女服の少女はお札を取り出し塊に向かって投げる。

すると塊に当たった途端、爆発が起き跡形もなく消える。

「え?えええッ!」

「あ、あなたはいったい・・・」

「あくハイハイ、そういうのいいからちよつと待ってね」

直葉ちゃんは驚きユーノは彼女に尋ねるも巫女服の少女はそれを制して周りに四つの球を浮かせる。

それらは直葉ちゃんとユーノの周りを飛んでいきそこから結界のよなものを張る。

「そこにいけば問題ないから終わるまで待つてね」

「えっ？は、はい・・・」

「・・・わかりました」

二人とも頷き「さてと・・・」と私たちの見て今度はアリたちを見る彼女。

すると・・・

「おくい霊夢ももう終わったか」

「魔理沙・・・あんた何処に行つてたのよ」

「ハハッいやく何かいろんな物が建っているから道に迷っちゃまったZ E!☆」

「はああく・・・」(―――；)

そこに突如現れたリボンのついた黒い三角帽に黒と白の魔女のよな服を着た少女が現れた。

聞いている限り彼女は巫女服の少女と一緒に来るはずが道に迷つたようだ。

「ごめんごめん！後で酒おごつてやるからさ。アイツが☆」

「はああくまあいいわアイツに全部責任押し付けてやる・・・」

さつきまで危機的状況だったのに何だが拍子抜けしてします。

それに彼女たちからでる『アイツ』とはいったい・・・

つて酒つて言つたあの人たち!?!そんな年には見えないんだけど・・・

「つと、なあ霊夢。あの黒い物体の大群はなんだぜ？」(；。D。D。)

「?・・・っあ忘れてた」(？D?)

「もしかしてあれがアイツが言つてた魔物か？」

「そうよ、あのアリののような雑魚を全滅させて欲しいらしいわよ」

「なるほど、それなら私の専売特許だぜ!☆」(、・ω・、)

!?!またアリの群生が!

それもさつきよりかなり多い。

数は百体もいるかもしれない・・・

「ちよつとソウジ！アレ!!」

「ああ、流石に彼女たちが危ない」

私とソウジは彼女達の方に向かい叫ぶ。

「そのの二人！今すぐその女の子と一匹を連れて非難して！」

「ここは僕たちが相手をするから逃げてくれ！君たちを巻き込むわけにはいかない!!」

私たちは叫びながら彼女たちを非難させようとする。

さつきは直葉ちゃんとユーノを助けてくれたがさすがにこの数じゃ・・・

「はああ〜？あんた達何言ってるの？むしろここは任せなさいよ。あんた達お世辞にも魔力がほとんどないじゃない？」

「そうだぜ☆ここは私たちに任せとけて。まあこんな数妖精の大群の比じゃないZE！☆」

「ちよつと！本気!？」

彼女たちは寧ろ大群の方を向き構える。

「本気よ。まあ見てなさい・・・魔理沙行くわよ？」

「オツケー☆さーてそれじゃあ・・・」

彼女たちは左手を前に出し人差し指と中指を合わせ

「スペルカード宣言!!」バアーン!!

突如そこから発光した長方形のカード状のようなものが出現する。

「まずは私から行くぜ！スペルカード!!」

白黒の魔法使いがどこから取り出した八角形の何かを取り出し前に突き出し・・・

「恋符『マスタースパーク』！」

するとそこから虹色の極太レーザーが飛び、アリたちに向かう。

アリたちは飛んでいくレーザーに飲まれ、レーザーが止むとそこには塵一つ残さずアリたちを消滅させる。

因みにこの時点でアリの大半が消えた。

「あら？もうあとちよつとじゃない。じゃああとは楽勝ね」  
だがそこで終わりではなく、次に巫女服の少女がカードを持って構える。

「これで止めね。スペルカード！」

すると周りに色とりどり大きな球体が出現する。

「霊符『夢想封印』！」

その球体は残りのアリにめがけて飛んでいく。

アリたちには次々と球体に飲み込まれていくが、全滅するまで球体は出現し続け飛んでくる。

・・・これは余りにも相手にとっては地獄だろう。

見てて恐ろしいと感じた。

「あんなに苦労した相手をこうもあっさり・・・」

「あれ？・・・なんか見覚えが・・・」

「ソウジ？どうしたの？」

ソウジが何かを思い出そうと頭を悩ます。

「よくし退治完了！帰るわよ魔理沙」

「わかった！なあ霊夢、何か奢れよくアイツからお金もらっているだろ〜」

「な!?あんななんでそれ知ってるの!」(；。∩。∩)

「へへ〜♪今日は朝まで宴会だな霊夢♪」(ω、\*)

「ちよつと！絶対にしないんだからね!?!待ちなさい魔理沙!」Σ(。∩。∩；；；。∩。∩)

何やら終始あちらの状況に飲まれたが、彼女たちは私たちの事は無視して勝手に帰ってしまった。

「・・・何だったんだあの人たちは・・・」

私の声に渋い顔をするソウジ、状況についていけない直葉ちゃんとユーノ。

とりあえず一誠となのはの方へ行かないと・・・あれ?・・・

「あ、ちよつと疲れちゃった・・・」

「ななみ!? しつかりしろ! ななみ!!」

そのまま私は意識を手放してしまった・・・

---

### 一誠 side

これはどう説明すればいいのか・・・

鎧の不規則な攻撃に防戦一方の俺。

俺を助けに来て、鎧の腕に鷲掴みにされるのは。

そんな俺たちを助けた猫耳尻尾の黒ずくめ。

いろんなことがいつぱんに起きて状況についていけないんだが。

「あのくもしくし。大丈夫くこれ何本に見えるく」

目の前の黒ずくめは俺を心配しているのか、それとも煽っているのかわからない口調で話しかける。

「・・・助けてくれたのはありがたいんだけど、あなたは一体誰なんだ」

「あつそれ聞いちゃう? てか大丈夫なんだよね? かなり血まみれだよ君」

「大丈夫ですから俺の質問に答えてくれ! あんた一体何なんだ!? 何故俺たちを助けた!」

「いつせーくん・・・」

なのは心配している。それはそうだ俺の発言は助けてくれた奴に言う言い方じゃない。

それを承知の上で聞いている。

もし彼がこの現状を作った本人なら少なからずなのは達に影響を与えるはずだ。

「うくん、一応本名は言えないんだけどな」

黒ずくめの男は悩んでいる感じだがすぐにこちらを向く

「そうだな、とりあえず言う俺はフリーの魔導士、傭兵みたいな事をやっている者だよ。一応通り名は見た目通り『黒猫』って呼ばれているんだ。記憶したか？」

そういつて彼は自己紹介をした。

・・・多分大半の内容が嘘だと思う。

自分が転生者であることを誤魔化すための。

だが何の為に？ 転生者を誤魔化す意味なんて・・・

・・・いや、あるか。

つまり本名をバレて転生者同士のいざこざに巻き込まれたくないのか、もしくは何か企んで転生者に知られたくないのか。

・・・とりあえず今は味方だという事はわかった。

「すみません。失礼な事を聞いて」

「いいや気にすんなよ、それよりも・・・」

黒ずくめは少し顔を動かし、鎧の方を振り向く。

鎧の方は体制を立て直しこちらに攻撃しようとする行動をとる。

「君たち二人はここで待っててね、特にその少女」

「ふえっ!? あ、あの何でしょうか・・・？」

すると黒ずくめは逆手で持っていた持っている持ち直して剣をなのはの方に向ける。

俺は警戒するが黒ずくめは片方の手で制止する。

「鍵よ開け！ かの者に安らぎの光を。癒しよ（ケアルラ）！」

彼が唱えると、なのはと俺の周りに緑色の光が纏い傷を直してい

く。

「これは……」

「す、すごい……」

治療魔法を使った後再度鎧の方を向きなのはに言う。

「君の勇気はとても素晴らしいと思う。だけどそれは時として己だけじゃなくて『大切な者』にも危険が及ぶ。今回がそれだね。だからあまり無茶はしてはいけないよ彼の為にね☆」(・▽・)

「ふえっ!? あ、うう／＼／＼」

と言つて俺に指をさした。

そしてなぜなのは急に赤くなった。

今の所で彼は特に変な事言つてないだろ。

「それと少年。男なら命を懸けてでも彼女を守りなつ☆まあ、鈍感少年にはこれで十分か……」(・◇・) 「ヤレヤレ

「え? あ……ああもちろんだ」

／＼／＼／＼／＼／＼／＼

さらに彼から急に俺になのはを守れと言われたが、後半は小声であり聞きえなかった。言われなくても守るし……

てかさつきからなのはが俯いてどうしたんだ? 顔も赤くなってるし、やっぱり疲れが出てきているのか。

「……はああ〜まあいいか、つうかさつきから鎧がこっちに腕を飛ばそうとしてるし……」

「!? そうだ! と思い鎧の方を向くと鎧が腕を回転させ黒ずくめに飛ばしてきた。

「しかたない。鍵よ開け! すべての攻撃を跳ね飛ばせ。守りよ(リフレク)ー!」

すると彼は自分の周りにバリアのような物を展開させ。



鎧を受け止める。

すると鎧はどこかへ飛んでいき光の塊がまるでさつききの攻撃を反射するかのようには鎧に衝撃を与える。

ガシャンツガシャンツ！と音を鳴らせバラバラなる。

がっすぐに集まりこちらに向かつてくる。

それに合わせて黒ずくめは剣を逆手に持ち鎧に突っ込む。

鎧は手足を黒ずくめに向け放ち黒ずくめはそれをいなしながら鎧を切る。

「……いや少し違う。どちらかと言うと切るのではなく叩くと言った感じか？」

何せさつききから剣が当たるとパコンツって音が鳴るんだよな。

あれ、剣なのか？デバイスって言うのはわかるが……

「ツハー！セイツ！ヤツ！これでどうだ!!」

鎧の攻撃を華麗によけながら攻撃を与える。

与えている音は効いてる感じがしないのだが、予想外にも食らっているようだ。

それが理由かさつききから動きが鈍くなっている。

「よし、痺れる！スタンプブレード!!」

唱えた後、剣が雷を発して鎧に攻撃する。

それに直撃すると鎧は途端痺れて動けなくなる。

「よし、止めといきますか♪」

……正直俺との差が圧倒的にわかる。

あんなに苦戦していたのに、彼は傷一つついていない。

「受けてみる！ストラク……」

彼は逆手に持った剣を大きく振りかぶり

「レイドー！」

鎧に向かって投げる。

すると俺となのはを助けた時のように高速回転が掛かり、鎧の胴体に突き刺される。

「光よー」

そして彼の言葉により剣から強い光が発せられ光の柱になった。

光が止むとそこには鎧の姿はなく、大きな魔力の帯びた石がそこには。

「ふうう〜終わった終わった。さ〜て早く閉じるか」

そういつて彼は先ほど投げた剣がいつの間にか彼の手にあり、逆手から普通に持ち替えて、石に向ける。

するとその石は少し光を発していたがすぐに止み鍵の閉まる音が鳴り響く。

「さて、色々と聞きたいことはあると思うしこつちもあるんだが、とりあえずお疲れ♪」

俺たちは彼の気楽な声を聴いて安堵し、その場で座り込むのであった。

その時なのは俺の肩に寄りかかり服のを掴んでとても安心した顔をしていた。

## 4話「泣いていいのはベッドか兄の中で」

直葉 side

結局あの後紅白巫女服と白黒魔女服の少女たちは私たちを助けた後、どこかへ行ってしまった。

私とフェレット、宗二郎、そして現在宗二郎さんに背負われながら寝ているななみさんは一誠となのはちゃんのいる所へ向かった。

そんなに時間はかからず、一誠となのはちゃんはすぐに見つかったのだが、その隣に全身黒づくめの人が立っていた。

彼は一誠となのはちゃんのピンチにたまたま居合わせたフリーの魔術師だそうだ。

しかし宗二郎さんは完全に警戒しており黒づくめの人は慌てた感じで一誠たちの状況を説明していた。

喋り方や彼の言動からして敵ではないと判断した宗二郎さんとはとりあえず抜こうとした武器を下げ話を聞く。

それでまずフェレットからなぜこのような事態になったかの説明を聞いた。

フェレットの名前はユーノ・スクライア。

彼はこの世界とは違う世界から来た異世界人。

彼の世界では魔法が技術、文化として発達した世界から来たそう  
だ。

そんな彼がこの世界に来た理由は、彼が発掘したロストログアと呼ばれる強大な力を持った別世界の遺産。

そして彼が発掘したジュエルシードも先ほど言ったロストログアでそれが散らばってしまったためであった。

ユーノはこれからは自分が回復したら一人で封印すると言いつたがそれはなのによって静止した。

なののは「私も協力するの！」と言ってそれに合わせて一誠と宗二郎、復活したななみは賛同した。

私は最初、今回の鎧とアリの大群もあつてすぐには答えず保留にし

てもらい、黒づくめの人は

「ん〜毎日だと厳しいな〜。そうだ！名刺上げるからそこに電話して君たちで対処できないのが現れたら依頼として引き受けるってことで」

「という事は報酬とかがないと来ないとか？」

「ノンノンノン（〜ω〜）、別にそんなのいらなよ。ただなるべく夕方から夜辺りに連絡をしてくれるとありがたいな。その時間が活動時間だから」

「わかりました。それじゃあこちらで対処できない時にお問い合わせします」

「了解☆（〜・ω〜）ゞはいこれ名刺ね〜とりあえず皆に渡すね」

そう言つて全員に名刺を渡した。

名刺には『万屋 黒猫（よろずや くろねこ）』と書かれており、その下に名前である黒猫、そして電話番号が書かれている。

「さて、次は俺の事かな〜まあ、さつきと言つたことは何も変わらないからな〜」（▽、\*）

と言いつつ今度黒づくめは自分の事を語りだした。

彼は名刺通りになんでもやる魔導士らしい。しかし、殺しなどは一切せずに主に困っている人のボランティア活動がメインらしい。

倒産した社長に新しいビジネスの提案や孤児院などの子供を保護施設で援助するなど。

この人見た目は変だがやることはいい人らしい。

だが、正直彼の事を全部信用するわけではない。寧ろ警戒してしまふ。

「まあ、こんな感じで報酬も気分次第、依頼もやるのも気分次第の自由人だから何かあったら連絡してね〜。それじゃ俺はこれで失礼し〜「大丈夫か!」およ?」

と彼が帰ろうとすると突如現れた人物に皆の視線がいく。

そこに突如現れたのは全身白と金と黒服と所々ついた鎧で包まれ

た天野光輝が現れた。

「あ、あまのくん!?!その恰好って?」

「ああ、見ての通りバリアジャケットだよ。まあ本当の名前は騎士甲冑なんだけど・・・それより貴様は誰だ!」

なのはとユーノ以外の私たちはやはりこいつが来るとは思っていたがまさかこんなにも遅かったとは。

今まで何してたんだ?

「急に結界が張られ向かおうと思っただらさらに強力な結界を張られてなのは達の所に行けなかつたんだが、貴様がやったのか?」

「ん?それ俺に言ってる?」

「当たり前だ!お前以外にやりそうな怪しい奴なんていないからな!」

と天野はデバイスと思われる剣を黒ずくめに向ける。

「ちよつと待ってくれ光輝、こいつは俺となのはを助けてくれたんだ」

「それはこいつの自作自演の可能性かもしれないだろ!さつきとそのふざけたフールドを脱いで姿を現せ!!」

「いやいや、勝手に話を進展しないでくれない?つかお前誰だよ」

「僕の名前は天野光輝!お前みたいな悪い奴を倒しに来た!」

「うん。何言ってるのお前?」

この場にいる全員が天野の発言に理解できてない。

確かに変な恰好ではあるが、悪者扱いするのはおかしい。

そもそも悪者なら私たちがいる時点で攻撃してるし。

「うるさい!どうせお前がこのイレギュラーの黒幕だろ!」

「はあく初対面で犯人扱いはひどいと思うんですけどくつうか証拠あるのかよ」

「証拠はないが、ないなら見つければいい。お前を倒して犯人だって事を自らの口で公言すればいい!」

「はっ」

「ちよつと待て光輝、お前何言ってるんだよ」

「そ、そうだよあまのくん。さつきから言ってることめちやくちやなの」

「うるさい一誠！なのはも今は静かにしてくれ今、こいつから真実を喋ってもらおう！」

「おい光輝、君は何を言っている？なんでそんなに確証を持って言える？」

「そうよ、なに焦ってるのよ、はつきり言っただけで途中から来たアンタと助けた彼だと少なくとも彼の方が真実味があるわよ」

「・・・なんでこんな奴が現れたんだよ本来なら・・・」ボソボソツツ

「あまのくん？」

最後辺りの天野の発言は聞こえなかったがどうやら何故か彼は黒ずくめの事を勝手に犯人扱いしている。

しかもすごい息を切らして大量の汗をかきながら、何か焦ったような顔をしている。

「ああ〜なんだかよくわからんがとりあえず帰っていい？てか帰るね〜」

「なっ！逃げるのか!？」

「逃げるんじゃないよ。それじゃあ依頼があるならいつでも連絡してくれ！」

じゃあな！って言いながらどこから取り出したかわからない剣のような物を上空に投げる。

それは大きなボード状になりそれに飛び乗る。

「まっ待て！」

「待ちませ〜くん。俺も忙しいんだよ、サラダバー！」

すると飛んでった彼は突如現れた裂け目に飛び込み姿を消す。

私たちは何とも言えない空気の中それぞれの家に帰っていった。

因みに天野の事は全員軽くあしらいながら私以外の皆は一緒に帰っていった。

一誠もななみとなのはの事で宗二朗さんと一緒に高町家に行くとの事。

家に帰って疲れた体をベッドに預ける。

・・・今回の戦いでかなり精神的に来てしまった。

何よりも今回前世と違う死を悟ったからか体が震え、目から涙が零れる

正直今後のジュエルシード集めに参加したくなかった。  
するとドアの叩く音が鳴る。

「スグーリング剥いたからおいでー母さんと父さんは先食べちゃったよー」

「……………」

「どうした？何かあったのか？」

「……………でもないよ……………」

「……………失礼するよー」

とドアを開けて勝手に入って来た。

「つて部屋の明かりを消してるし、もしかして寝てたのか？」

「……………なんで勝手に入ってきてるの？」

「いや、そんな泣きそうな声聞いたら心配でね、ごめんね？」

「……………なんでお兄ちゃんが謝るのさ……………」

「……………なんでだろう？」

「……………」

「……………」

互いに静かな空気が続く。

今お兄ちゃんはどんな顔をしているのだろう。

「……………夢見たの……………」

「……………うん」

「……………短かったけど……………すごく……………怖い夢……………私が黒いナニカ

に襲われて・・・それで・・・うつ」

「うん・・・それで?・・・」

「飲み込まれそうに・・・なって・・・わたし・・・ひっぐつ・・・怖くて・・・」

「うん・・・怖かったんだね?」

お兄ちゃんは私を優しく頭を撫でた。

その温かさに張ってた糸が切れたかのようにお兄ちゃんを抱き着き嗚咽交じりで泣いた。

お兄ちゃんはただ優しく撫でながら、ただただ優しく私を温かく包み込んでくれた。

その後、抱きしめたまま寝てしまいお兄ちゃんと一緒に寝て、朝恥ずかしくお兄ちゃんを引つ叩いてしまった私は悪くない・・・

---

???  
side

何故だ!あいつらは今のあいつらには強いはずなのに!

何なんだあの野郎は!!

これでこっちの計画が潰れちゃったじゃないか!!!





昨日直葉の部屋に行ったら何か暗い雰囲気だったのは驚いた。

・・・まさか泣き出して抱き着くとは思わなかった。

まあ、スグは転生していたとは言え今は小学三年生、怖い事で泣いてしまうのは仕方ないだろう。

でも叩かなくても良くないですかね？

でもその後「ありがとう、頑張れそう・・・」って言ってたからまあよしとしますか。

「ハア：ハア：」 キュイイイイイイイン

後今日の学校は何かとても殺伐としていたな・・・

主にスグのクラスが・・・

「ハア：：ふうう：：」 キュイイイイイイイン

昼休み屋上で皆で食べてた時はそれぞれいい雰囲気食べて、なのは一誠と食べ物交換して、宗二郎とななみは案の定イチャラブして、スグはアリサとすずかと仲良くお話をしてたのに。

天野少年が現れた途端空気が悪くなった。

「クソ・・・何処だ!？」 キュイイイイ、ガガッ!

何か天野少年が強引になのはを連れて行こうとしてたので僕と宗二郎で制止したら殴りかかって来た。

まあ、簡単に避けて無視してやったが。

最近彼はやたらと暴力的になってきていると思うんだが・・・

まあ今は・・・

「シャイニングハート！探知できているか?」

「すみません！まだ検索に時間がかかります。それによく私のD

EBANが来たのですね！」

「何言ってるの!?!いいから早く見つけて!文とアサ子さんに頼んでも時間かかるんだから!」

「と言われましても、実際に襲われた瞬間を見てないので探しようがないですよ!」

「クソッ!」ツガ!キュイイイイイイ

そんな事よりもこっちが重要!

現在、僕はデバイス製作の一環で作った改造スケボーに乗っている。

黒がメインでボードの両側に翼のような形に白のラインが所々入ったスケボーを作り。

魔力か霊力を流すことによつて自動で動く仕組みになっている。

本来試運転を兼ねて街中を乗り回っていたのだが、先ほどスグから来た連絡にスケボーで移動しながら搜索している。

連絡によると・・・

「どこだよ・・・アリサ、すずか!!」

アリサとすずかが男たちに襲われて攫われたとの事だった。

## 5話 「搜索、闇の炎は星になる」

朱奈 side

アリサ、すずか搜索の10分前の話。

僕はこの日も放課後に音楽室でピアノを弾いてから帰った。

今日はエンジェルビーツ!の「The○○ of SSS」を弾いた。

今日は気分的にピアノオンリーだったので、その分長く弾き続けた。

まあ、そんなことをしているから帰りは1人になるんだが突然携帯の電話が鳴り響く。

本来、校則上持つて来てはいけないものだがそこはまあ、優秀なデバイスがあるためどうにかなっている。

今日はキーブレードは調整の為に家に置いて来た。

その代わり僕は神様印のインテリジェントデバイスのシャイニングハートを持つて来たのだ。

いやだって「私の出番はまだですかマスター?」とか「暇です。構ってくださいよマスター・・・(\*・ω・\*)」ともの凄い寂しそうな声で言ってくるんで仕方なく持つて来た今日この頃。

てかシャイニングハートが最近、感情が豊かになってやがる

一体何が・・・(棒

閑話休題(そんなことはどうでもいい)

鳴っている携帯を確認するとスグからの連絡だった。

「ん?どうしたスグ?僕はこの後市立図書館で本をへお兄ちゃん大変!アリサちゃんとすずかちゃんがい?」

突然のスグの大声に少々驚く。

スグは電話越しでもわかる位に焦っているのがわかる。

「何かあったのか?てか今、アリサとすずかかって・・・」

へお兄ちゃん大変なの!アリサちゃんとすずかちゃんが攫われたの!!

「ふくん・・・ハア!」Σ(。口。;

へさつき偶然アリサちゃんとすずかちゃんが黒い車の中にいた男の人に無理やり連れていかれる所を見たの。助けに行こうとしたんだけど男の人がナイフを持ってて……私……私……」

「落ち着けスグ、黒い車の特徴は？ナンバーとか言った方向とか」  
「えーと……わからないの。今、私は○○の所について、車はそこから西に行ったよ！わ、私はどうすればいいかな？」

「わかった。今からその周辺に向かう。スグはこの事を恭也さんに知らせてくれ」

「ええ！お兄ちゃん行くの！危ないよ！」

「大丈夫。恭也さんが来るまで無茶はしないから。見つけたら連絡して待つって恭也さんに言ってくれ。」

「ええっ!?ちよつと待つておに」ピッ

スグの言葉を最後まで聞かずに僕は電源を切る。

「シャイニングハート。今の会話聞いたね？」

「はい！バツチリ聞きました！今それらしき車があるか検索とユイさんに連絡しました！」(？^?ゞ

「ありがとう。ユイはなんて？」

「ちよつと待つて下さい……ユイさんはこちらから射命丸さんと百の貌のハサンさんに搜索を頼んだみたいです。」(・ω・)

「そうか……良し！僕らも行くぞ！」

「はい！それじゃあセットアップを「いや、使わないよ？」なんでですか!?やつとDE☆BA☆Nなんですよ!」(。D。 ; ;)

「いや、移動ならこいつを使おうと思つていたから」

そう言いながら手を突き出すとボード状の何かが現れた。

「ちよつと！なんですかその板!」Σ(。口。 ;)

「何ってスケボーだよ。ちよつと改造して移動専用のデバイスにしただけの」

「いつの間にこんなもの作つてたんですか!?それに何処からそれを!」  
( ( ( ; ; D。 ) ) )

「ほらアナライズの特訓で作つたんだよ。それとこれは家に置いたものをキーブレードの力を利用して空間を【開けて】取り出したんだよ」



「……あいつチャリでこんなスピードを出せるなんて、なんと  
いうケイデンス！」（驚愕）

とか言ってる場合じゃあない！

「ちよつとマスターあれなんですか!? あんなの普通の人間じゃあ出せない速度ですよ!」? (。D。;)」

「……よく見たらアイツ天上院じゃん、何して……!?!」  
もしかしたらアイツ!

僕は全力で霊力を流して追いかける。

「ま、マスター! どうしたんですか急に!」( ; . ω . )

「あいつに協力を要請する! おそらくあいつもアリサ達関連だ!」

「どこにその根拠が出るんですか「ラボメンだよ」はい!?!」Σ (。D。;)」  
「さつきあいつが言ってたラボメンの中にアリサが含まれているんだよ! 前にそんな会話を廊下で聞いたんだ!」

以前学校内でアリサと天上院が学年トップで争ってたのを見た。

天上院の奴は転生して小学生になったとはいえかなり頭がいいらしい。

え? 僕は? 中の上位の成績ですが何か?

まあ、そんなことで天上院とアリサはよく競い合ってたっていうの間に  
か天上院が勝手にラボメンだと言ってた……という愚痴をアリサから直接聞いた……

「まあ、そんなことがあって多分僕達と同じで探しているんだと思う」

「でも、あの人当てるはあるんですか?」( ; . ω . ; ) ?

「……わからん……」

見る限り何も考えずに搜索しているように見える……頭いいんじゃないのか?

「てか止まれよう!」

「マスター追いかけるのはいいのですがよろしいのですか?」( ; . ; )  
( ; )

「何が?」

「転生者だとバレますよ?」( ; . ω . ; )

「あつ……」

わ、忘れてた……

でも今はそんなこという状況じゃないし……

……ええいなるようになれー!

「もうバレルとかどうでもいいや!」

「チョッ! 早すぎませんか!? 今までの苦労が水の泡ですよ!」Σ(。口。  
。)

「そんな事を言ってる状況じゃない! おい! 止まれ! その爆走自転車!!」

「何奴!? …… 貴様は?」

やつとこっちに気づいて止まってくれた。

……ものすごく警戒しているが。

「天上院で合ってるか? 僕は白銀朱奈。スグ……白銀直葉の兄だ」  
「なら貴様が……って待て! 何故今の俺のスピードに着いてこれた!? さては……」

「そう同類だよ。まあバレたのは君が初めてだけど……それよりも君もアリサ達を?」

「そうだと言ったらなんなんだ? 俺の邪魔をするのか? クソツ! ここで組織の妨害が「違うから! とりあえず話を聞け!」お、おう」

おかしな事を言い始めたのでとりあえず彼に自分の転生から今までの事を省きながら説明した。

そして現在アリサ達の捜索をしている事で協力して欲しいと頼んだ。

「……と言う事で手伝って欲しい。それとなるべく僕は転生者の面倒事には関わりたくないから君のつるんでいる愛川さん以外には伝えないでくれ?」

「……何故愛川は言ってもいいのだ?」

「彼女の特典を知っているからでいいか? それともどうやって知ったかも行ったほうがいいか?」

「いや、特典の事は後で構わんさ……今は時間が欲しい……」  
「そうだな……そろそろ手掛かりがないと「マスター! 射命丸さ



んが見つけたようです！」何処!？」

射命丸からの情報だところから少し遠い廃ビルにいるらしい。現在アサ子さん『達』が見張っており、現状は縛られて動けないらしい。「誘拐犯の数は視認15人……かなりいるな……」

「どうする？偵察の奴らを蹴散らしてる間に殺されたり、人質として脅されるとこちらも迂闊には手を出せない。せめて階にもよるが彼女達の所までバレずに進めれば……」

バレず……隠れながらは厳しいから……!？」

「シャイニングハート。アサ達が拘束されている場所が何階にあるかわかるか？」

「え？ちよつと待って下さい。今射命丸さんに聞きます」(\*・◇・)?

「……何か策でもあるのか？」

「いや……何かもう……面倒臭いからさ……」

「は？」

そう、隠れるとか面倒臭い……

「マスターわかりました！12階建ての7階にいます！」(・ω・)

(・) ッビシツ!!

「了解……じゃあ僕と天上院の周囲に認識阻害魔法をかけて。それと……本出して」

「了解です！」(・ω・) ッビシツ!!

「おい！何をやる気だ！」

「大丈夫大丈夫。ちよつと7階まで一直線に飛ぶだけだから」

「何処が大丈夫だ！そんなことしたら誘拐犯に見つか……ってなんだその本は!？」

僕の言葉に警戒しながら突如現れる魔導書に混乱する天上院。

認識阻害も使ったしこれで良し。

「マスター準備ができました。それで、どうするんですか？」(・ω・)

、)？

「ん？ちよつと待ってね……魔理沙！一飛びしたいからあれ貸して！」

『ん？ああ、イイZE！けど、このあと何か奢ってくれるならな！』  
「了解つと」

そう言つて魔導書が開きパラパラとページがめくれる。

ページが止まるとそこから突然……箒と八角形の形をした何かが現れた。

「それじゃあ……魔理沙、コネクト頼む！」

『了解だZE！☆』

『幻想接続（コネクト）！』

すると僕の周りが光だしやがて消えてくと黒のローブを纏い、リボンのついた黒い三角帽を被った自分が現れる。

「ほう……貴様、どうやら相当強力な特典を貰っているようだな。ならば、俺も準備をしないと。ダーインスレイブ！セットアップ！」

そう言つと天上院もバリアジャケット……いや騎士甲冑を展開する。

全身を覆う黒コートで所々にチェーンがついている。（参考、中二病でも恋がしたい！のダークフレイムマスター）

「フウウツハツハツハ！これで俺の闇の力が解放す「そう言うのいいから行くぞ」……どうやってだ？」

僕に途中で止められた天上院はこちらを睨むがそこはスルー。

僕はとりあえず左手で彼の腕を掴む。

「な、何を「まあまあ、さっき言ったじゃん」……本当にできるのか？」

「任せといてよ。それじゃあ……」

『朱奈、行くZE！☆』

さてと……ちよつと星になるか……

「スペルカード！」

箒の後ろにミニ八卦炉を付け八卦炉から虹色の光が発せられ……

「お、おいまさかお前」

「彗星」

それを推進力として……

「ブレイジングスター！」

僕と天上院は一つの光となって空に飛んでいく。

「ぎゃあああああああああああああ！」

「イヤッホオオオオオイ！！？！！？！！？！！？！！？」

ヤバイ！テンションが上がってきたあああああ！

「ま、マスターが壊れ……いや、霧雨さんみたいになっていますね」(∩・∩・∩)

さて……ここで「幻想接続」について少し説明しよう。

これは幻想郷の住人と一体化する事で程度の能力以外にスペルカードのしようができるのだが、絆が低いに連れて言動や口調が住人側よりになってしまうのだ。

現在魔理沙との絆Levelは10。

これは世間一般でいう所の友達である。

ん？某ソシャゲみたいに絆levelの上限が10？残念、そんな事はなかった。

アテナさん曰く、僕の幻英の書は他者から力を借りる事を基本としているため使い魔とかの主従関係ではない。

あくまで手伝う、頼む。などがこの本の能力故に英霊と住人とはより良い繋がりが必要とされている。

levelは契約をして間もないので赤の他人かちよつと知り合い程度。

そこから徐々にランクアップしていくらしい。

しかも契約した奴によつては絆levelが10でも【友達程度の関係】にならないらしく。結局は相手側の信頼がどの位得ているかは



## 6話 「闇は幻想を殺し、一本道を作る」

第三者 side

ここは12階建ての廃ビルの7階。

そこには5人の男達と「一人」の女の子がいた。

・・・いや少し違う。

その少女は両手両足を縛られ、口をガムテープで塞がれている。

この状況は誰がどう見ても誘拐されている状況だと理解できる。

「ハハツまさかこんな簡単な仕事だとはな」

「だな、本当はあの娘を捕まえるだけの仕事だったのにまさかおまけであるバニングスと月村の娘がおまけでゲットできるなんてな」

「確か月村ってあれだろ？例の・・・」

「ああ〜それか、でもなんも問題ないだろう？最悪あの人が対処するだろうし・・・」

こんな会話をしながらゲラゲラと談笑していた男達。

そして話している途中で拘束されている少女の方を向きニヤニヤと笑みを浮かべる。

男達の表情を見た少女・・・アリサ・バニングスは恐怖を顔に浮かべながら縛られた手足を解こうと必死にもがく。

「いやーそれにしても暇だなー」

「だなーこうなんか・・・暇つぶしになる物はないかなー」

「なあ・・・この娘ヤっちゃわね？小学生だけど、少しは楽しませるだろう？」

「お！いいね〜別にあの人に手を出すななんて指示受けてないからな」

「じゃあ・・・ヤろうか（ニヤニヤ）」

その言葉に最初は何を言っているのかわからなかったがその男達の汚い目と厭らしい顔、そして先ほどから言っていた「やる」の意味知っていた為すぐに理解した。

アリサは青ざめながら涙を浮かべ必死に逃げようともがく。

彼女は頭が良い為、こんな時に誰かが助けしてくれるなんて漫画のよ  
うな状況はならないと知っている為その顔はもう絶望しかない。

誰も助けてくれない・・・それどころかこの男達に玩具のように扱  
われる未来までも見えてきている。

自分がどこで選択を間違えたのか・・・その後悔だけが残る・・・

・・・本当にここで終わるのであれば・・・

「それじゃまずは俺か「うわあああああああああああああああああ  
！」っは?！」

それは突然の事だった。

急に黒い影が高速で飛んできて向こうの壁のある方へ激突した。

土煙がたちまち充満し、男達は急に起きたことに驚きつつも銃を持  
ち警戒する。

「誰だ!」

「ゲホツゴホツ!・・・クソツ!あの男、まさか思いつきり投げるとは  
思わなかったぞ・・・」

煙がだんだん消えていきその黒い影のシルエットが少しずつ見え  
てくる。

アリサはその影で身長からして同い年位、それとその声で誰だが直  
に理解した。

「まったく・・・これが貴様らの・・・シユタインズ・ゲートの選択か」



「は？はあああああああああああ！！？」

僕は掴んでいた天上院の腕を大きく振って天上院を思いっきり投げた。

「白銀貴様あああああああああ！」

「すまん！頼んだあああああああ！」

何か天上院の叫び声が聞こえたが。

気にしない（キリッ）

「さつきから叫んでばかりで疲れませんか？」（；・ω・）

シャイニングハートの突っ込みはスルーだ！

---

### 第三者 side

おそらくこの状況は誰も予想できないだろう。

突如壁に突っ込んで現れた少年に対し。

男達は驚きをしながらも余裕のある態度。

アリサは助けてくれた喜びは最初にあっても少年を見て再度、絶望と恐怖を露にしている。

「まったく・・・これが貴様らの・・・シユタインズ・ゲートの選択か」



「はあ？何言ってるんだこのガキ」

「つうかどうやってここにこれたんだ？下の奴らは何してんだよ・・・」

「いや、さつき空から飛んで・・・」

「お前馬鹿か？そんな事、ただのガキにできるわけないだろ。おとぎ話じゃないんだから」

アリサは「うー！んー！」と叫びながら必死に何かを天上院に訴えかける。

だが・・・

「おいそこの貴様等、今すぐ我がラボメンナンバー002、【燃える瞳を持つ者】バーニング・アリサを解放しろ。さもなければ俺の闇の炎の餌食になるぞ？」

「「「「・・・は？」」」」

真剣な顔で彼の発した言葉に男達はわけのわからない様な顔をし、アリサは恥ずかしいのか顔を赤くしながら怒っているかのようにさつきよりも大きな声でうーうー唸り声をあげる。

「・・・馬鹿にしているのかこのガキ？」

「さあ・・・あっこれってあれじゃね？厨二って奴じゃね？」

「え？厨二って小学生からなるのか？」

「知らねえよ・・・たく・・・特撮番組のヒーロー気取りか？」

「いやそしたら闇とか言わないだろ。ダークヒーロー的な奴だろ」

「「「それを知ってるお前は同類か？」」」」

「なんでさ!?!」

男達はこんな事を話しながら銃を天上院に向ける。

「おいガキ、おとなしく立ち去りな。ヒーローごっこはお家でやるんだな」

「黙れ、いいからアリサを解放しろ」

「はあ？・・・っちしやあねえな・・・」

そう言つて男の一人が発砲をして銃弾が天上院の顔の横を通り過ぎる。

「……………」

「今のは警告だぞガキ、次はない」

「さっさと帰れって……お前じゃ何も「撃てよ」は？」

今、彼の発したセリフに彼以外のここにいる人は耳を疑った。

「俺は遊びで来ているんじゃない。本気で助けに来た」

アリサは思うなんでこんなにも

「貴様等が強かろうが、なんの目的があるのかどうでもいい」

こんなにも

「俺はアリサを助ける。だから……」

自分のために

「……撃ってみろ。それで俺を殺せると思うのなら」

立ち向かうのかを。

そしてアリサはこの時同時に、幻覚を見ているのかと思った。  
何故なら天上院の周りに黒い炎を纏っているかのように見えていた。

「(な、何よこれ?でも・・・本当にあいつ、あたしの為に・・・)」  
そんな事を考えていたら男の一人が再度銃を向け。

「そうか・・・じゃあ死ね」

パンツ!

銃声音が鳴り響く・・・

アリサは鳴った音と共に瞑った眼をだんだん開いてく。

そこには・・・

「悪いな・・・そんな物じゃあ俺は倒せないぞ」

銃弾が天上院の顔の前で制止している。

「・・・な!?!」

「ほら、返してやるよ・・・受け取れ!」

天上院が男に指を刺すと制止していた銃弾が男の【方向】に行き男の肩を貫く。

「!?ガアアアアア!?!」

貫かれた男は悲鳴を上げる。

天上院は一步、一步と男達の方に向かって歩く。

「来いよ。5対1なら勝てるって幻想を、俺が殺してやるよ!」



「まさかお前・・・てんs」

一人が何か言おうとしていたが、その前に炎が男達を包み込む。丸焦げになった男達はその場で倒れ伏せ、気絶する。

アリサは天上院が男達を殺したかと思っただが息をしていたので安堵しながらも天上院を見つめる。

アリサは・・・

「さて・・・大丈夫かアリサ？」

彼の姿がとてもカッコよく、顔を赤らめながら思わず見とれてしまった。

## 7話 「最悪と死、幻英と抜け殻」

すずか side

ここは廃ビルの10階。

私は両手足を縛られたままで地面に転がっている状態です。

「フツまさかこんな所でこんな【化け物】と出会えるとは思はなかったぞ」

男達の中の一人がこちらを見ながらまるで私を【物】を見るかのような目でこちらを見てくる。

ここにいる男達は合計で8人。

全員が銃やナイフなどの兵器を所持していた。

「それにしても本当にこの小さなガキがアレ何ですか？俺はてつきり空想上の物かと思いましたよ」

「そうだな、まさかこんなガキがな・・・気持ち悪いぜ」

「そういうなよ、本当にアレならかなりレア物だぜこいつ」

「あと10年・・・いや5年で言い物なるんじゃないやね？」

そんな事は話ながら私をまるで嘗め回すかのような目でこちらを見てくる。

気持ち悪い、怖い、逃げたい、助けてほしい、

それらの感情が彼らに見られることで体全体が拒否反応を感じる。

「ぐへへ・・・そんなに待ってられねえよ。今でいいだが、こつちの方が希少だぜ？」

「お前なああ・・・まあ暇つぶしには悪くないかな」

そんな軽い発言を言う男達とは違い、私はこの後起こる事態に青ざめ、涙を流しながら必死で拘束を解こうともがく

それがどれだけ無意味だと知っても。

「なあ、それならこっちの奴も・・・」

「バカ！それには手を出すなどあれほど【あの人】に言われたらろ」

誰か私以外にいるの？

男達の一人が私の真横を指で刺した所を向くとそこには私と同一年位の女の子がいた。

顔は見えないためわからないが気絶をしているのかまったく動かない。

「さて・・・」

突如、男の一人が私に近づき口を塞いでいるテープを剥がす。

「気分はどうだい月村嬢？ 災難だったな俺たちに目を付けられちまつて」

「わ、私は・・・」

「なんだ？こんな事にはならないとでも思っていたのか？お前たち夜の一族はそれ名入りに裏では有名だからな。本来ならお前さんを囚として姉の方を・・・」

「!?お願い！私はいいからお姉ちゃんは「おっと早とちりするなよ嬢ちゃん」・・・え？」

この男達は私を人質としてお姉ちゃんに何かするのではと思いきい叫ぼうとしたが制止された。

「確かにお前さんと下にいるお友達是人質だが安心しな、今回俺たちが要求するのは姉、ましてやお前自身じゃねえ」

「え？えつと・・・」

「今回はそこで寝ている奴の件でな、まあ簡単に言えば黙秘してもらうだけだよ」

・・・私は男達の言っている事がよくわからなかった。

私、月村すずかは夜の一族・・・吸血鬼の一族である。

身体能力が高く傷があつても直に治ってしまうほどはない再生能力を持っている。

もちろん血も吸うけれど余り吸わない。そこまで必要としないからだ。

そんな力を持っているためやはり他者から恐れられたり、危険視される。

私はてつきり人質としてお姉ちゃんを呼んで殺されるか、物のように扱われるか・・・考えるほど吐き気のするような事になるかと思っていたが・・・

「ど、どういう・・・?」

「それ以上の追求はしない方がいい。というかお前は今人質なんだこれが終われば素直に帰れるんだから黙っとけよ」

「・・・・・・・・」

私じゃない。

それだけ知れて安心したが、それと同時に疑問が出る。

私の横にいる女の子・・・

この子が私よりも重要なのがわからない。

何故・・・?

「な、なあ少しだけ遊ばねえか?やっぱり我慢できないぜ」



・・・ゾワツとした。

先ほどから息を荒くしながら私を見ていた一人が股間を手で押さえながらこちらを先ほどよりも気持ち悪い、卑劣な目で見てくる。

まるで嘗め回すかのような目で・・・

「おい、またかよ・・・今回は穏便に済まないといけないんだから我慢しろ」

「それじゃ面白くないだろう！ここにいい玩具があるんだから悲鳴の一つや二つ聞きたいだろう！」

「俺さんせうい！つうかさ、命だけでも救うんだから別にいいだろう？それにあの人は傷を付けずに返せなんて言っていないしな」

「はあ・・・確かに言っていないが」

私に話しかけた男が携帯を取り出し電話をする。

2分近く話した後溜息をまた吐いて、私に最悪の状況になる発言をした。

「・・・OK出たぞ。但し、絶対に壊すなよ。少し遊ぶ程度にしとけ」  
「ッ!？」

声にならないほど恐怖をした。

彼の発言のあと三人がニタニタした顔でこちらに近づき、一人が何処から取り出したかわからないがビデオカメラを取り出してセツティングする。

残りの男達は興味がないのか銃の手入れや椅子に座って飲み物を飲んだりし始めた。

「い、イヤッ・・・助け・・・来ないでッ！誰か・・・助けて！」

必死で拘束を解こうともがく。

腕に力入れて必死で縄を解こうとする。

痛みがあるが・・・この後起きるで有ろう状況に恐怖をしているのか体がマヒして、痛みを感じない。おそらく血が出るほど力を入れているだろう。

「おお、いいねえ♪女の子の泣き顔ほど興奮するものはないよな」

「グフウ・・・こいつはいい、最初は俺でいいよな？な？」

「いいぜ、俺は口で遊んで貰うからさ♪」

「撮影準備できたぞ〜！後好きにやっちゃって〜」

男達はそれぞれ言いながら私に近づく。

一歩・・・また一歩と・・・

「ヒッ！ヤダッ！助けて！！誰かあ!!!」

怖い怖い怖い怖い怖い怖い！

逃げたいのにうまく動けない私。

近づく男達。

楽しみにする男。

興味のない目で見える男達。

哀れな目で見える男。

視界が真っ暗になる・・・

怖い・・・

誰か・・・

「いやあああああああああああああああああああああー！」



朱奈 s i d e

さてと、シャイニングハートの探知魔法でだいぶ危険な状況とわかって加速して突っ込んで正解だったようだな

何とか最悪の状況に鉢合わせにはならなかったみたいだが、この後どうするか・・・

とりあえず状況の修正。

- ・すずかが三人の男に何かされかけてた。
- ・それをブレイジングスターで突っ込んだ。
- ・三人が吹っ飛んだ。
- ・壁に激突した。
- ・今に至る

うん、カオス！（涙目）

ていうかすずかは？大丈夫なのか？

てか痛い。頭からぶつかつたから超痛い。

「いったく・・・何とか間に合ったな」

何とか魔理沙とコネクトしているため血は出てないがそれでも痛いです（T | T）

「大丈夫か、すずか？」

とりあえずすずかに声をかけてみる。

ものすごく驚いている顔をしているがまあ大丈夫だろう。

「しゅ、朱奈さ・・・ん・・・？」

「ごめんね待たせて。もう大丈夫だから」

「あ……う……ああ……」

僕の言葉にすずかは涙を流し、嗚咽のような声で安堵した。  
「さて、悪いがすずかを返してもらってもいいかな？」

「はあ？おいガキこの状況を見てそんなことを言うのかよ」  
僕の発言にご立腹なのか、4人は銃を構えてこちらを睨む。

「俺たちの計画を邪魔すんなクソガキ！」

それぞれがこちらに発砲してくるが問題ない。

「見よう見真似だけど……神速！」

僕は彼らの発砲と同時に視界が白黒になり【遅くなった】銃弾を最小限の回避だけで済ませて相手に近づく。

この神速は恭也さんとの打ち合いをしていくに連れて盗んだ技。  
前世から【人の真似をする】事が得意だった僕はこの世界でもうま  
くできるみたいだ。

「クソツ！なんで当たらねえんだ!!」

「く、来るな！来るなああああああ！」

躲す躲す躲す！

途中で頬や腕を掠めたりしても止まらない。

まだ完全に再現してない分スピードは恭也さんほどでもないがそれでもこのくらいの弾幕は簡単。

何せ幻想郷の人たちとこれ以上の強力な弾幕を避けているのだから。

「まず一人」



「儀符『オーレリーズサン』・・・焼かれなくては必死で逃げるんだな」

肉の焼ける匂いを残したまま大柄の男が倒れる。

最小限の範囲でレーザーを放ったため死んではない。

が、死ぬほど痛い思いはしただろう。

「ば、バケモノ・・・」

「はい、四人目」

四つの赤、青、黄、緑の球体は僕の周りで高速回転し始め、怯える男めがけて飛ばす。

男は恐怖のあまり動けないせいで回転する球体に直撃して吹き飛ばす。顔面から地面に着地してそこからピクリとも動かない。

「え？・・・ええ？！」

すずかは余りの急展開についていけない。

何せここまでの間は10秒位しかたっていないのに4人の男達が倒れている。

「さて・・・最後に「ま、待てーいや、待つてください!!」はい？」

残る一人を片付けようと構えなおそうとしたがそこで制止される。

男は武器をすべて地面に捨て、土下座の形になっている。

「お前の用はそこにいる月村の子だろ？な、なら連れてって構わない！俺たちはそいつには要はないからな！」

「何言ってるんだよ。誘拐しといて用がないわけないだろ・・・」

「ほ、本当だ！俺たちはそこで寝っ転がってる奴を誘拐するよう依頼されたんだ！月村とバニングスはたまたま居合わせただけだ！まあ、運良ければそのまま身代金とか要求しようと考えた奴もいたが俺は違う！依頼されたことはもう終わっているし！こんな事になるんならもう契約も終わりだ！月村とバニングス、それとそこで寝ている奴も連れて行くなり好きにしてかまわない！ただ、俺は見逃してくれ、頼む!!」

「はっ・・・そこで寝ている奴？」



まったく探知しなかったが？

ここにいるのは月村と土下座男、倒れている7人の男達。

それと……あ、いた。

つうかまったく動いてないじゃん。完全に気絶しているのか？  
それと……も……

「……シャイニングハート？」

「……はい……」

僕はわざと男に聞こえるようにシャイニングハートに話しかける。

男は「ど、どこから声が？」と周りをキョロキョロしており、すずかもその突然聞こえる女性の声に驚く。

「さつき探知魔法使ったよね？」

「……そうですね」

「あの子……探知魔法を無効にしたのか？それともシャイニングハートのうっかりか？」

冗談混じりでシャイニングハートに尋ねる。

そんなはずない……そう思いたい……

だが……

最悪な、最悪な方え……

「いえ、そもそもあの子から・・・」

傾く・・・

「生命反応を感知できません・・・つまり・・・」

「死んでいます」

その言葉と同時に男の襟首を掴み持ち上げる。

「魔理沙、コネクトを解除するよ」  
『・・・わかったぜ・・・』

魔理沙も察してくれたのだろう。直に解除してもらい聖祥の制服になる。

体からリミッターをかけているはずの魔力と霊力があふれ始める。

男は僕から発している異様の何かに押され苦しんでいる。

「ガッ・・・ハッ・・・ま、マテッ・・・」

「質問に答える。まず、お前が殺したか？」

「チ、チガウ・・・」

「じゃあ・・・殺されたことを知っていたか？」

「シラナイ！・・・イヤッ、シラナカッタ・・・カハッ・・・」

「・・・シャイニングハート？」

「嘘はついていない様です・・・」

とりあえずこいつは白なのはわかったので降ろす。

男はゴホッゴホッ！と咳をしはじめ落ち着き始める。

・・・最悪だ・・・

あの子、聖祥の制服を着ていた。

顔を見ればわかるすごく見覚えがあるからだ・・・

彼女はスグ達と同じクラスの子だ。

確か優姫 ユウナと言う少女でアテナさんの所の転生者だ。

今までアナライズを使わずにいたのは愛川さんと一緒にいる事が多かったからで、迂闊にできなかった。

それと単純に・・・する必要ないと思っただからだ・・・

他の転生者たちは裏でどう考えているかわからないせいでアナライズを使って不安要素をなくしていた。

ただこの子は違った。

何というか・・・純粹無垢・・・そんな風を感じた。

多分転生者の中で一番、この世界で普通に生きようとしていたように見えた。

だからする必要ないかなと思いつつ今までしなかったのだが・・・

誰が？

何故？

「最後に質問だ。お前達の依頼主は誰だ？」

「そ、それは・・・」

「言えないのか？」

「いや！言える、言えるのだが・・・」

「なんだ？」

「その前に聞きたいことがある・・・」

男は落ち着いた後こちらと倒れている子を見比べて尋ねる。

「お前、転生者って奴だろ？」

「!?なんでそう思う？」

「こいつ・・・転生者？」

「いや違う。それはない。」

「あの力、どうあっても普通の人間じゃねえ。そうだろ？」

「じゃあもしそうならどうだって言うんだよ？」

「ならすぐにその二人を連れて逃げたほうがいい、奴は・・・遅かったか・・・」

遅かった？

男の言葉と同時に僕の後ろのドアが開く。

そこから現れたのは眼鏡をかけて、白衣を着た20代くらいの男が現れた。

「おやおや、騒がしいから来たのだがまさか新しい研究材料が増えるとは」

その男は一目見てわかる。

自分と同じく・・・転生者であるという事を・・・



アチャーシヤイニングハートが拗ねた。

別に使いたくないわけじゃないんだけど・・・

「いや、こんな事で最高のデバイスであるお前を使う必要じゃないかなって」

「え!? さ、最高ですか? えへへ・・・／／／」

こいつチヨロイな・・・

「ほう、助けるのか? そいつは誘拐した奴の一人だろ?」

男が僕を見て尋ねる。

「そうだな・・・で?」

「ん?」

「いやそれで殺していいなんて事にはならないだろ。・・・まあ、この後こいつはみっちりO☆HA☆NA☆SHIするんだけどね」キョロ

「ヒツ!」

いや怖がるなよ・・・

そもそもフルボッコされなくらい感謝しろよ（この後殴るとは言っていない）

「しゆ、朱奈さん・・・」

「ん? ああ、すずか、ちょっと待ってね今解くから」

僕はすずかの近くにより手足を縛る縄を解く

「すずかはそこで待っていてくれるかい?」

「は、はい・・・」

恐らくすずかは感づいているだろう・・・僕の怒りを・・・

「さて・・・なあ、お前に聞きたいことがあるんだけど?」

「なんだい? 私が転生者かどうかかね? それなら・・・」

「いや、あんたが転生者なのは直わかったけど本題はそこじゃない。あの子を殺したのはお前なのかどうかだ」

僕はとにかく彼女を殺したのが誰なのか。

今はそこしか考えていない。

「ん？ああそいつか・・・少し違うが、まあそうだな。私が殺したよ」  
「・・・なんでそんなことをした？この子は普通に生きていただろ？」

「普通ねえ・・・」

「なにが言いたいんだよ」

こいつの言いたいことがわからない。

普通に生活して、普通に生きていた彼女は他の転生者と違い周りに迷惑をかけていないはずだ。

「普通ね・・・何処が普通なのだい？神のミスで死に、され転生だの特典なのというように言いくるめられているだけではないか」

「それは「それは違います」ユイ？いつの間？」

「さつきですよ。それと彼の事はアテナさんから情報をいただきました。どうやら彼は転生前は科学者で神のミスによって死んだようです。そしてその神から特典をもらった直後に殺し、今では様々な世界に移動しながら他の転生者たちを殺しているようです」

神を殺した？そんなことができるのか？

「一応殺した神は下級で神の力が低いものとても良い神であったらしいです。彼についても精神誠意に謝罪をし、自分の持ちうる力を使って彼に加護を与えたのですが・・・」

「だからなんだというのだね？誤れば済むとでも？加護を与え、力を与えれば許すとでも？悪いが私はそこまで優しくないのでね。殺されたから殺し返しただけなのだよ」

「それなら他の転生者を殺す理由にはならないはずですよ！どうして他の転生者の・・・」

他の転生者の？



「どうして・・・転生者の特典を【奪う】だけならまだしも、殺す必要があるのですか!?!」

「特典を奪う?それって・・・」

「ほう・・・私が特典を集めているのを知っているのですか・・・」

「どういう事だ・・・奪う?特典を?」

「そういえば私の力を教えていなかったね。私の能力は完全記憶能力、相手の能力を奪う能力、そして・・・奪った能力をカードにする能力だよ」

「・・・」

「実はね能力を奪うだけではその場でしか奪えないのでね、カードにして永久的に私の物にするしか方法がなかったのだよ」

「それでなんで殺す必要が・・・」

僕は黙って話を聞き、ユイは悲しい顔をして男に問いかける。

「これも不完全でね・・・相手の心を入れないと能力が発動できないのだよ」

「それはつまり!?!」

「そう・・・カードの中にはその者の能力と心が入っている。カードを破けば心と特典は解放される・・・まあその心を本来の体に戻せるとは限らんな」

「……………」

カードを一枚取り出しこちらに見せる。そのカードには番号とよくわからない絵が描かれていた。

「それならどうやって神を……」

「簡単だよ、神は優しすぎたからね。私に作る能力のカードが欲しいと言って貰い受け、その力を使い神殺しの武器を作り出して刺殺した」

「な!?!」

「まあ、あそこまで優しくされると気持ち悪かったからね、その時にはまだ一枚もカードを手に入れてないからちようど良いと。そのあと神から世界を移動する力を奪い様々な世界を周りここに来たのさ」

「そんな……」

ユイは手を口で覆い涙を少し流してしまった

「か、神を殺す? 転生者? 特典? 朱奈さん、どういう意味ですか?」

「……………」

「しゅ、朱奈さん?」

僕は今、すずかの声が聞こえない。

彼に対しての怒りは優姫さんだけではない。

他の転生者たちを襲い、そして殺しているのだから。

「まあそんなことはどうでもいいのだよ。それよりもその少年、私と一緒に来ないか? 見たところ君は強い、私の力と組めばさらに色々な物が手には入れるぞ? どうだね?」

「朱奈が行くはずありません! あなたのような人殺しの所に!」

「ん? 人? 何を言っているのだね私は人殺しなどしていないぞ?」

「!? 貴方、なにを言っているのですか転生者を殺しその能力を「人? あれが? アツハツハツハツハツハツハツハツハツハツ! 実に面白い事を言うね君」なツ何を!?!」

「特典をもらいながらそれを生かそうとしない愚かども・・・私にとっては物や材料でしかないのだよ」

それを聞いた僕は指を突き刺し魔力弾を放つ、魔力弾は男の頬を掠め、向こうの壁に当たりクレーターを作る。

「ふざけるなよ・・・お前・・・」

「何がふざけるなだね？私はいたって真剣だよ？転生して特典をもらっておいて今更平穩？都合がよすぎないかね？それなら私の糧となり存分に使われた方が特典のためになるだろう。それに今更第二の人生など・・・一度目の人生を謳歌しきれないそいつの運が悪いだけよ」

「お前に殺された奴らは物じゃない！ちゃんと生きて、それぞれの生活を送っているんだ！それをお前のくだらない考えに巻き込まれる理由にはならないだろ！だいたい転生前の人生を謳歌できなかったのはお前も同じだろ！」

「何を言う？私は転生前も今も科学者。そう！私はただの転生者ではない！神を殺し、様々な世界を渡り歩けた人間！いやもう人間ではない、神に近い存在なのだ！君たち物と一緒にしないでもらおう」

「もう黙れよ・・・自分が神？笑わせるなよ！お前みたいな転生者を、人を！道具にしか思えない奴がほざくな！お前のくだらない理由で殺された奴らは・・・彼女は・・・ただ暮らしたかったはずだ！平和

に！楽しく！賑やかに！後悔した事を全部やり直して、自由に平穩に新しくもらった命を大事にしたかったはずだ！それをお前は……!!」  
こいつを許せない。

こんな奴がいるから犠牲になる存在がいるんだ。

……救いたかった

……でも救えなかった

……失いたくなかった

……それでも失った

……奪われたくなかった

……だとしても奪われた

許せない……

ただ許せない……

そんな僕を見て男は僕を見ながらにやりと笑いながらカードを一枚取り出す。



オオオオオオ！………』

必死で逃げようにも死んだ者

苦しみながら死んだ者

命乞いをしても死んだ者

弟だけはと頼みながら死んだ者

敵を討とうと突っ込んでいき死んだ者

全員叫び、涙を流し、絶望しながら胸に手を突っ込まれ、まるで糸の切れた人形のように死んでいる。

ある者は抵抗をするため腕や足、時には頭を切り飛ばされてから抜き取られているようだ。

「……ひどい……こんなの……」

「なんじゃこりゃ……これ、全部あの男だ……」

「貴方は……どうしてこんなことが簡単にできるのですか!? あんまりです！」

すずかは顔に手を覆い合わせ、モニターから視線を逸らす。

誘拐犯の男は幻でも見ているかのように何度も目を擦りながら見て。

ユイは研究者の男に向かって涙を流しながら怒りをあらわにする。

「ハッハッハッハッハッハッハ！愉快！実に愉快だ!! 我々転生者はたとえ死んでもすぐに心を取り除けばこのように奪えることができるからね。ただ奪うだけではなく、こういう遊びもできるのしつたから最近はとても楽しいよ！さて、そろそろ最後の一人だな」

最後の一人？ってことは……

『イヤツ・・・ヤメテツ・・・来ないで!?!』

「ツ・・・!?!」

その映像には優姫 ユウナが移っており、必死で逃げようと縛られた手足を動かしながら後ろに下がる。

だが・・・

『ツ！アグツ!?!・・・カハツ・・・ヤツ・・・ヒヤツ・・・』

首を絞められもがく彼女、顔が青ざめはじめ、苦しいというのが映像からでも伝わる。

ヤメロ・・・ヤメロ・・・

何かが・・・何かがキレそうだ・・・

なんでアイツは・・・なんでこの子が・・・

視界が黒くなる。

頭がパンクしそうだ・・・

『ナンデツ・・・ワタシハツ・・・イツモコンナメニツ・・・ドウ・・・シテ・・・?』

彼女の目から大粒の涙が流れる。

苦痛に顔を睨ませ、刻一刻と終わりを迎える・・・

「イ・・・ヤ・・・シニ・・・タクナイツ・・・マダ・・・シタイコトツ・・・」

終わる。

彼女が終わる。

こちらに・・・いや、モニター向かってだから天井に。

手を伸ばす・・・伸ばしても何も無いはずの手を伸ばし・・・

『タ・・・スケ・・・テ・・・』

崩れた・・・その手も自分の中の何かが・・・

思い出す・・・昔を・・・あの言葉に聞き覚えのある・・・

「アアアアツハツハツハツハツハツハツハツハ！いやー最後はなんて  
ロマンチックな最後なんだ！本当に笑いが止まらんよ!!」

アイツはナンダ？

アイツはアレを見てなんで笑ってられる？

まるで・・・

『たす・・・けて・・・しゅー・・・く・・・ん・・・』

記憶は蘇る。

ああ・・・思い出した・・・



ああいう奴は・・・

死んでいい奴だ・・・

その時、ナニカがキレた・・・

――――  
第三者視点

「アツハツハツハツハツ！グハツ!!?」

刹那、男は吹き飛ぶ。

男の場所には朱奈が立っている。

拳を前に突き出し、殴った後の体制になっている。

「なッ何が起きた・・・私が把握できないスピードとは・・・ッ!」

また一瞬にして男が吹き飛ぶ。

またも先ほどまでに男がいた位置に朱奈がいる。

今度は右足を振り蹴った体制になっている。

「クッ!?その力・・・やはり君は他の者とは違うようだな」

「しゅ、朱奈さん!」

「あの力は・・・リミットを解いたのですね・・・」

「なんじゃ・・・こりゃ・・・」

朱奈以外のこの場にいる全員が驚く。

「もう……喋るな……」

「「ッ!?!」」

誘拐男以外気づく……

彼の周りに纏うナニカを……

「ふざけるな……ふざけるな……!!」

「こ、これは……一体……?フツ、フフフフ」

男は笑い始める……そして白衣の裏に隠していたであろうカードに手を出す。

手には三枚のカード。

それを構える。

「面白いぞ少年!さあ!私を楽しませろ!!」

男は構える。

それに合わせて朱奈は手に持っているシャイニングハートを持つて。

「シャイニングハート……」

「ええ、行きましょう……我が主(マスター)」

……唱える、最高で、最強のデバイスを……

「我、希望を抱き、絆を繋ぐ者なり」

朱奈の足元に円形の魔法陣が展開する。

「契約のもと、真の姿を我の前に解き放て」

色は白と言うより白金色・・・プラチナに近い色をしている。

「空に光を、天に輝きを」

光が増す。

「我、希望の丘に楽園を築き」

体が光を包む

「繋がる心は」

そして・・・

「この体に！」

宝石が輝く

「この手に力を。シャイニングハート！セット・アップ！！」

「S t a n b y R e a d y . S e t u p .」

朱奈が光に飲まれる。

その光が止むと、白コートのバリアジャケットを身に纏い音叉上の杖を持った朱奈がそこにいた。

「お前を……絶対に許せない……」

杖を両手で構え男に向ける。

「そういえば名乗っていなかったな。名乗らせていただこう！私の名は研崎 耗（ケンザキ コウ）という。さあ、私の玩具（カード）を披露させてやろう!!」

「黙れ！命は……」

朱奈は制限が解けた魔力を放ちながら。

研崎に向かって突撃をする。

「命は……お前の玩具じゃないんだぞおおおおおおお!!」

## 8. 5話「あたしって、ほんと単純」

アリサ side

私、アリサ・バニングスは今起こっている状況に追いついていけない。

突如現れた黒い車に連れていかれ、拘束されていた。

男達が近づき私を襲おうとした時に同じ学校の天上院に救われた。

・・・そこまではいいの・・・いや、良くないわね・・・

天上院は左手から黒い炎？みたいなのが出てきたし・・・

何か剣とかも持ってたし・・・

まるでファンタジーとかでよくある魔法のようだった・・・

それで今は・・・

「さて・・・状況を説明してもらおうか・・・」

「うむ、よかろう高町恭也・・・さん」

ものすごい怖い顔をしながら天上院をみる恭也さんと忍さん。

・・・どうしてこうなったの・・・

「一つ聞きたいのだけど、すずかはどこにいるの?」

忍さんが天上院を睨みながら訪ねる。

「それなら心配ないだろう、です・・・あっちには白銀朱奈がいったはずだ、です・・・」

「あんた、無理に敬語にしてる感があるわよ」

天上院がものすごく苦い顔をしながら話している。

普段から変な口調をするからよ・・・

「・・・朱奈が来ているのか・・・」

「恭也、朱奈っていつも話している彼?」

「ああ、あいつが来ているってことは多分大丈夫だろう。もしもの場合でも時間稼ぎする位できるから問題ないだろう」

「そう・・・」

恭也さんは朱奈さんの事をとても信頼しているようだが忍さんは疑っている。

「それならすぐに向かおう。君たちはこの場で待っていてくれ。天上院だったな。もし余裕があるならアリサと一緒に先に下に降りてくれ。

そこにいた連中は片付けといたから大丈夫だ」

「でも、すずかが!」わかった「ちよつと天上院!」

「ここは年上に任せるべきだ。それに・・・お前はもう限界だろ?」

え?何を言って・・・あれ?

足に力が入らない。

震えている・・・

体がいう事を聞かなくて・・・

「高町恭也、さん・・・と月村忍、さん・・・後は任せます」

「わかった、朱奈の事は任せろ。行くぞ忍」

「・・・ええ」

恭也さんと忍さんが行ってしまった。

・・・しばし静かな時間が流れるが天上院が口を開く。

「大丈夫・・・ではないだろうな・・・バニングス」

「なっ・・・なによ・・・あたしは・・・別に、なんとも・・・ッ」

座り込んだまま天上院と会話する。

私でもわかるくらい声がとても震えている。天上院もわかっているんでしょね。

「とりあえず何ともなくてよかった。フツまあ俺の力にかかればざつと」

「そういえば・・・あれは何だったの？あんた・・・何したの？」  
「ギクツ」

何がギクツよあんなの見てそういう反応するに決まっているでしよ。

「あれは・・・何？まるで魔法みたい・・・だったじゃない」

「あれは・・・ふ」

「ふ？」

「フウウウハツハツハツハツハ！あれは我が真の闇の力の「そういうのいいから！ちゃんと答えなさい!!」あつハイ」

こいつは隙あらばふざけるんだから。

まったく・・・

「と言ってもなんて答えればいいのか・・・バニングス、お前は魔法を信じるか？」

「・・・少し前ならくだらないで済みますけどね。・・・あんなの見た後だとちよつと」

「・・・」

やっぱり信じがたいけど、そういう事ね・・・

「頭の良い貴様なら何とも非現実的だろうけどそういう事だ。俺は魔法を使える魔導士だ。まあ、魔導士の中でも少し特殊な存在だろうけど・・・」

「なによそれ、魔導士?」

「フツ、流石のバニングスでも理解に苦しむか。そう!俺は他の人間と違い、魔法を使い。空を飛ぶことができるのだ!!・・・まだ飛行魔法は使えないが」ボソボソ

またカツコつけるかのように左手を顔を覆うように被せる。後半、なんかボソボソ言っていたがわからない。

「・・・あんだ、それ恥ずかしくないの?」

「?何がだ?」

「はあく・・・まあいいわ。それより肩貸してくれないかしら?朱奈さんたちは恭也さんたちが向かったから大丈夫でしょうけど、あたしたちはこのままここにいても意味ないでしょうね。」

「むうう、そうだな。それにしてもえらく冷静になったなバニングス。お前の事だから助けに行くとかいうと思っていたぞ。」

天上院が驚きながら首を傾げる。

「あんだ見ていると冷静になったわ・・・」

「うむ、バーニングらしくらぬ行動だな」

「だれがバーニングよ!と言うかあの時言ってたラボメンナンバーつてなによ!私聞いてないわよ!!」

「何を言っている!我がラボメンナンバー002!燃えるひ」だからなんでそのくだらない組織みたいなのに私が加わっているのよ!」くだらなくはない!」

本当にコイツは!

「もう!こんなくだらない話は後よ!さっさと降りるから手伝いなさいよ!!」

「まったく、これだからお嬢様はと言うものは・・・だから学校でツンデレとか言われるのだぞ」

なツ!?



「今、それ関係ないでしょ！てかちよつと待ちなさい!!ツンデレって  
なによ!?!だれよそんな事言った奴!」

「ハアゝもうよい。それよりそろそろ下に行くぞ。これ以上ここに  
いても意味ないからな」

「ちよつとそれよりも教えなさい!だれよそんなふざけたこと言った  
奴「学年男子全員」なツ!?!」

な、何ですって!?!

ゆ・・・許さない・・・全員風穴開けてやる!

本気で男子全員覚悟し・・・な・・・さ・・・え?

「・・・へ?」

「ん?どうしたバニングス?まあいい行くぞ」

「えっいや!ちよつと降ろしなさい!」

「・・・何がだ?」

いや・・・だって・・・

「なんであたしを持ち上げるのよ!肩貸すだけいいから降ろしなさい  
よ!!!//」

ちよつとこれ!//

完全におっおっお・・・お姫様抱っこじゃない?!?!//

「いや、お前腰が抜けてるだろ。肩貸すだけだと面倒だ、こっちで行く  
ぞ」

「ちよちよちよ、ちよつと!あんたこれどういう事かわかってないの

!?!/

「ん？お姫様抱っこだろ？別にリアルお嬢様なら問題ないだろ。どうせ親とかにしてもらっているだろ？」

「問題大・あ・りよ！とにかく降ろして！お・ろ・し・て!!」

／  
こんな恥ずかしい恰好で外に出るなんて・・・死んでもいやよ!!／

「却下だ。行くぞ」

「ちよつと!・・・後で覚えてなさいよ!!／／／」

「ハイハイ」

「ハイは一回!」

「はゝい」

「伸ばさないの!!」

「・・・ヘイツ!」

「ハイですらないじゃない!あんた後で風穴開けるわよ!?!」

「違う。それは別の釘宮ボイス」

「あんた頭おかしいんじゃないの!?!」

さつきからこいつは!

ツ~~~~ツ~~~~／／／

本当にこの体制どうにかならないの!?!

はああ・・・

・・・それにしても・・・

『撃てよ。おれは遊びで来てるんじゃない。本気で助けに来たんだ』

本当……なんでこいつは助けに来たんだろう……

『俺はアリサを助ける。だから……』

あの時はアリサって呼んでたわね……素だったのかしら？

『来いよ、5対1なら勝てるって幻想を、俺が殺してやるよ！』

……なにカッコつけてるのよ……

あれじゃあ……

『さて……大丈夫かアリサ？』

あんなの見たら……

本気でかっこいいと思うじゃない……／／／

「・・・急に黙りだしたな」

「なつなによ・・・悪い？」

もしかして今考えてたのバレて・・・

「・・・悪かったな」

「へっ？」

「その・・・怖い思いをさせた・・・すまない・・・」

「ツ・・・／＼／＼」

そんな顔すんじゃないわよ・・・

ああ・・・私ってバカだな・・・

「・・・アリサ」ボソツ

「ん？」

だって・・・

「アリサって呼びなさい。あの時もアリサって呼んだのだから。今更バニングスじゃおかしいでしょ」

「……………」

私はこんな単純に・・・

「わかった・・・アリサ」

こんな奴の事好きになっちゃったんだから・・・／／／

「……………ねえ」

「……………何だ？」

「少し……………あんたの胸……………借りるわよ……………」

「決定事項かよ……………好きにしろ……………」

そういった彼の胸に顔を埋めて我慢してた涙をいっぱい流した。彼に救われなかったら。今頃私はどうなってたか。想像するのも嫌だった。

でも・・・

こいつが助けてくれた・・・

本当にあたしって・・・

・・・単純ね・・・

## 9話 「銀と黒の獣」 前編

### 戦闘視点

月村すずかと誘拐犯の男はただ見る事しかできない。

片方は白衣を羽織い、手にはカードのような物を持った眼鏡をかけた20代の男。

研崎 耗（ケンザキ コウ）

もう片方は白いコートを身に纏い、機械的な杖を持った長めの黒髪の少年。

白銀 朱奈（シロガネ シユナ）

「さあ！私の玩具（カード）を披露させてやろう!!」

「黙れ！命は・・・命は・・・お前の玩具じゃないんだぞ  
おおおおおおお!!」

朱奈から大量の魔力が漏れながら研崎に向かって叫ぶ。

朱奈から放たれた魔力は濃く、魔力に無知である二人はそれが魔力だと分かっていないが朱奈から放たれた何かにすずか達は怯える。

「しゅ、朱奈さん?・・・」

「なんだこれ・・・ウツ、急に吐き気が・・・」

月村は夜の一族、吸血鬼の末裔故こういった異端の力に耐性があるが男は普通の人間。

魔力に当てられ吐き気を催している。

「お二人は私の後ろに非難を！三人共私の結界で守ります！」

ユイは優姫 ユウナを抱えながら二人の近くに行き結界を張る。

ユイは幻英の書の管理プログラム、単純な魔法戦なら主にも守護騎士の誰よりも強い。

「さて、まずはお手並み拝見だよ。カードコール、『無限の剣製』」

研崎がそういうと手に持ったカードが光だす。

それと同時に彼の周りにいくつもの剣が現れ、朱奈に向かって放たれる。

「シャイニングハート！」

「了解です。『プロテクション』」

朱奈はその場に動かず防御魔法を張る。

剣は朱奈に向かって飛んでいくも、それらはすべてプロテクションの前に弾き飛ばされる。

「ツハハ！いいのかい？私の無限の剣製は魔力消費が少ない。よってほぼ無限に放たれるぞ！プロテクションがいつまでもつだらうな!!」

・・・研崎は知らない。

毎日のように幻英の書の少女と英霊たちにしごかれていた事に。

「それなら問題ない・・・お前よりも強力で大量の剣を毎日浴びているから慣れている！」

「?・・・ッ何?!」

研崎の剣の雨は・・・朱奈を傷つけることができない。

少女たちから弾幕の作り方と回避方法、英霊たちからは近接戦闘並びに魔術の使い方を、そして最近はりニスの魔法の授業もある。

近距離戦闘、中距離戦闘、遠距離戦闘。

陸上戦、空中戦、近接戦、遠隔戦、支援戦。



それらすべてを自分に合う形を見つけながら吸収し、会得し、アレ  
ンジする。

守護騎士であり、メンバーの中で一番の戦闘力を持つアルトリアか  
ら「朱奈に勝つ方法は本人が手加減（身内にはほとんどする）しない  
限り普通じゃまず無理です・・・」と言っていた。

それを知っているのは同じ守護騎士、魔導書に記載されている人  
物、リニス、それとユイ以外の本人も知らない。

「お前の剣は外見はしっかりしているけど中身が何もなっていない、  
『ただの剣』じゃあ【俺】のプロテクションは破れない」

「ツ！ならば!!カードコール『塵殺公（サンダルフォン）』」

研崎は無限の剣製のカードをしまい、別のカードを取り出す。

それが光を発すると彼の傍らに巨大な玉座が現れる。

そこに収められた剣を引き抜き朱奈に向かって剣を振りかざす。

途端、剣から斬撃が放たれ朱奈に向かって飛んでいく。

「・・・シャイニングハート！」

「Yes. 『イージス』。Standby... Expansion（展  
開）」

それに対し朱奈は手を出しシールドのような物を張るだけ。

そう・・・張るだけで防げてしまう・・・



瞬間、朱奈は研崎の前から消える。

「行くぞ、シャイニングハート」

「Yes. 『ホーリー』・・・」

「何、後ろ!?!」

突如後ろから声が聞こえ、研崎が振り返ると魔力を貯めて放とうとする朱奈がいた。

朱奈が使ったのは瞬間移動（テレポート）。

それによって研崎の後ろに突然現れることができた。

そして今放とうとしている魔法は・・・

現在、シャイニングハートの【バスターフォーム】のみできる魔法。

・・・砲撃魔法・・・

「シュート・・・」

『バスター』

トリガーの引き金を引きながら唱える。

シャイニングハートから一直線の銀色の魔力砲が発射される。

「!?か、カードコール『幻想殺し』!」

研崎は右手を突き出しながら叫ぶ。

それと同時に銀色の閃光は研崎の右手に直撃する。

右手は銀色の閃光を消している様だが研崎は苦しい顔をしている。

「クツ相殺しきれない・・・だど!?!」

閃光は止むことを知れず研崎を飲み込もうとしている。

「・・・」

朱奈は黙ったまま砲撃をやめない。

寧ろだんだんと威力を増しながら放ち続ける。

するととうとう・・・

「!ぐああああッ!!」

右手の幻想殺しの許容範囲を超えて、閃光に飲み込まれた。

そのまま地面に倒れ伏せ、苦痛に耐えながら研崎は起きる。

「ガハッ!?!・・・馬鹿な、異能を打ち消す『幻想殺し』が打ち消しきれないだど!」

「・・・やっぱりな・・・」

「何がだ!?!」

顔を歪ませている研崎に朱奈は言い放った。

研崎のその顔は先ほどまでの余裕の表情が消え、焦りの滲ませていた。

「あんたのそのカードは一つ一つ切り替えないと使えない。現に別のカードを使おうとしたときに前のカードの力を発動してないからな。それとカードを切り替えて戦うのはわかるが使い方、技量がまったくなってない。強力なカードを使っても持ち主が弱ければ十分な力を発揮しない・・・宝の持ち腐れって言葉知ってる?アンタの事だよ」

「ッ!・・・カードコ「させるかよ!」なッ!?!」

またも朱奈は瞬間移動で消え、研崎の後ろに回る。

「『ホーリーシューター』・・・シュート!」

「Yes. スファイア4、Expansion(展開)・・・Inject  
ion(射出)」

銀色のスファイアが4つつ現れて、研崎に向かって飛んでいく。それらすべては顔、腹、足、そしてカードを持った右手に当たる。「グアツ!? チッ! カードコー、ガハツ!」

カードを取り出して再度放とうとしてもまたスファイアが放たれる。当然のことながら非殺傷設定にしているため死にはしないがそれでも威力のある攻撃、痛いなんてものではない。

腹に数発スファイアを放たれ胃液を吐く。

「おえっ・・・クツ、私がここまであしらわれるとは・・・」

「当たり前じゃん」スツ・・・

「!?!?」

突然、研崎の目の前に朱奈が現れる。

・・・右手の拳を構え

「神霊式戦闘術・・・焰火扇!」

研崎の腹めがけてストレートを放つ

「グエツ!」

吹き飛ぶ、壁に当たり研崎を中心にクレーターができる。

「止め・・・」

「『ホーリー』・・・『バスター』」

それと同時にまた銀色の閃光が放たれ壁に埋もれた研崎に向かって砲撃を放つ。

ぶつかると同時に土煙が充満する。

「綺麗・・・」

すずかから静かに言葉が漏れる。

時刻は夕暮れ、黒い長髪が揺れ、白いコートが幻想的な雰囲気をつ。

手にした杖はとても機械的で、それでいてこの世の物とは思えない

構造をしている。

そんな光景を幼いすずかは小説に出てくる主人公のように見えた。

「何だよアレ、俺は夢でも見ているのか?」

男は今起きている現状に逃避しようとしている。

それは自分の意志でか、それとも本能でか、それは本人にもわからない。

「これは夢じゃありません・・・今のマスターは誰にも止められないでしょう・・・」

「え?」

「先ほどから気づきませんか? マスターは先ほどから【俺】になっていることに?」

「あつ・・・」

「いつもならあんな口調はしないのに、マスターが荒い言葉をいう事はかなりキレています。正直、いつものマスターとは比較にならないぐらい怖いオーラが出ています」

ユイは肩を震わせながらそう言う。

現に朱奈からはずっと魔力が漏れ、それが禍々しいオーラのようになっている。

「もう終わり? ならば、今持つてるカードすべて渡せ」

「ガハツ・・・カードを・・・だと?」

朱奈はシャイニングハートを構えたまま研崎に言う。

「そうだ、それには奪った人間の能力・・・心が入っているのだろう? ならそれさえあれば彼女を蘇生する方法があるかもしれない。だからそれを渡せ、じゃないと・・・」

「グエツ?!」

「お前が気絶してから勝手に貰う事になるけど?」

またも朱奈はシューターを放つ。

壁に打ち付けられた研崎は逃げるすべもなく数発食らう。

「ガツ・・・まさか・・・ここまで力を持っていたとは・・・少し見くびっていたようだな」

「御託はいいよ、さっさとカードを渡せよ」

「そういうわけにもいかない・・・といつてもこのままだとまずいな・・・」

先ほどから朱奈は攻戦一方、研崎は防戦一方の状況。

研崎は苦笑いを死ながら朱奈を、ユイたちを見る。

「・・・仕方ない、一枚犠牲にするか・・・」

「なあ、早くしろよ。いい加減イライラして非殺傷設定解除するぞ」

「ハハッ！・・・いいだろう、カードを渡す」

「んじゃ早くしろ「まあ、待てタダで渡すわけないだろう」・・・」

そういうと研崎はカードを複数取り出す。

数は五枚、その三枚が融合して一枚になり、手持ちが三枚になる。

「先ほど融合して一枚になったのは、そこに倒れている奴のカード三枚、今は一つとなって彼女その者のようになってる」

「それか・・・『アナライズ』・・・」

朱奈はそのカードを解析して優姫かどうか確認する。

それには彼女が頼んだ特典がしっかりと残っており、優姫の心が入ったカードだと理解する。

「これに・・・カードコール『シャドウサモン』、『アロンダイト』のこりのカード二枚が研崎の言葉に光、瞬時黒い物体が集まる。

集まった影は集合体となり、人型になる。

その姿は全身が鎧の姿でその手には真っ黒な剣を携えている。

「何これ？」

「あれは！ランスロット!?!」

「・・・の影で作った偽物だがね。まあ、それでも本人に近いスペック、いや・・・少し弄っているからもしかしたら本人より強いかもね。まあそんな事より・・・こいつにこのカードを預けるよ」

研崎は持っていた優姫のカードをシャドウランスロットの鎧の中に入れる。

「という事でコレを倒すことができたら彼女のカードが手にh『ホーリーバスター』!」ちよつ、まつ!」ドーン

「またも銀色の閃光が飛んでいき土埃をつくる。」

「さつきいったよな?カード全部渡せて。日本語わかる?全部だ。じやなきや今まで死んでいった奴らの所に逝かせるぞクソ野郎・・・」

「Master... 熱源反応あり、まだ生きています。DO you have another blow?(もう一撃やりますか?)」  
「YES...次はもう少し威力強めで・・・」

「(あ、あれ?マスターだけでなく、シャイニングハートも殺す気満々の用なんですか・・・)」

ユイが心の中でここまで朱奈とシャイニングハートの豹変に少し怯えながら研崎のいる方に顔を向ける。

幸いと言うべきか、まだ朱奈は非殺傷設定を解除してない様で出血などはしていないが、それでもボロボロのようだ。

「グッ・・・!もう見逃してほしいのだが・・・まあ逃がさせてもらおうよ、カードコール・・・」

「逃がすか「Master!来ます!!」ッ!」

逃がさないようまたも砲撃を放とうとしようとしたらそれはシャドウランスロットによって阻まれる。

「それではさよなら。今度は君と対等になる物を用意して出直すとしてよう。『次元旅行』・・・」

研崎はカードを使って粒子となって消えた。

「・・・邪魔なんだよ・・・お前!」

朱奈はシャドウランスロットを睨む。

シャドウランスロットは剣を片手で持ち、突進の構えをする







## 10話「銀と黒の獣 後編」

### 戦闘視点

銀と黒がぶつかりあう。

それが一度離れ、朱奈の周りから銀色のスフィアが展開される。

それらをすべて腕と剣で弾き飛ばしシャドウランスロットはまたも朱奈に突進をかける。

「シャイニングハート！」

「Yes. 【サイズフォーム】」

シャイニングハートは杖の先端の形が変わり、音叉状から鎌の形に変わり刃の部分が銀色の光を放つ。

見た目大鎌となったそれをシャドウランスロットの剣とぶつかり合う状態になる。

「AAAAAAAA………！」

「うるせえよ………！」

斬り合いが始まり、シャドウランスロットと朱奈は互いの得物を振り回す。

上段、下段、斜め、突き、

斬って、躲し、斬って、防ぐ。

「AAA！」

「セイツ！」

「thurrurr！」

「フツ!!」

「AAAAAaaaaaaa！」

「ツセア!!」

大鎌を振り回す、薙ぎ払う、弾く、躲す。  
剣を振るう、薙ぐる、殴る、避ける。

「Master. このままでギリ貧かと」

「・・・うざいな、なら・・・できる？」

「・・・かなりむちやくちやですができます。」

「ならそれで・・・シッ！」

また、互いの武器がぶつかり合う。

シャドウランスロットの方が押しが強く朱奈が徐々に後ろに押し  
れていく。

「無駄にウツ・・・力強いな・・・」

「A A A a a a a a！」

「グツ・・・このツ・・・！」

「A A : : : : ツ！」

いきなりシャドウランスロットの体がよろめく。

そののタイミングで距離を取り・・・

「ツ！セリヤツ!!」

「ホーリースラツシユ。」

大鎌を振るい銀色の斬撃を飛ばす。

それに直撃して吹き飛ぶシャドウランスロット。

吹き飛んだことを確認して。

後ろにいる

・・・先ほどシャドウランスロットの動きを止めた者に話す

「うふふ、力負けしてたみたいだけど大丈夫かしら？」

「・・・悪いけど、少し手伝ってもらっていい？」

「あら？貴方からの頼み事なんて珍しいわね。まあ、いいわ私が協力  
してあげる。けど、後で貴方の・・・」

「貴方の血をしつかりいただくわよ♪」バサッ

背中から蝙蝠のような翼を広げそう言い放った人物

・・・レミリア・スカーレットは朱奈にそう告げる。

「じゃあ今度瓶一杯を咲夜に持たせて持っていくから」

「いやよ、直接吸わせなさい。一噛みで十分だから」

「いやだつて・・・お前吸いきれずに溢すじゃん。服が汚れる」

「いいじゃない別に、あとで洗えば問題ないわよ」

とこんなやり取りをしていると、レミリアはさすがを見て驚いた顔をする。

「あら？あの子は・・・へえ・・・」ニヤリッ

「え？」

さすがは何故自分を見て笑っているのかはわからなかった。

ただ、彼女レミリアの背中から出ている翼を見てまるで絵本とかで登場するような『吸血鬼』の姿を思わせるような姿に驚く。

一方レミリアはさすがの中にも流れる『妖力』に気づき、面白い物を見る目で彼女を見た。

「来るぞレミリア、少しだけ頼める？」

「あら、少しだけでいいの？何なら私が倒してもかまわないわよ？」  
「必要ない、つうか俺に殺らせて」

「・・・貴方がそんな物騒な事言うの初めて見るわね。まあ、いいわ後でお話を聞かせても話うわ」

「じゃあ少しの間、頼むね」

そう言っつて朱奈はユイの方に向かい、レミリアは起き上がるシャドウランスロットの方を向く。

「さあ、私の前で踊りなさい鎧男さん。まだ月は出てないけど楽しい夜になりそうね♪」

朱奈はユイの方に向かい幻英の書を受け取る。

「ありがとう、それとキープレードは？」

「はい、ここにあります。私はこのまま三人の近くにいますので・・・マスターは安心して行ってください」

「わかった」

そう言っつて朱奈は向かおうとしたが急に服が引っ張られる感じがした。

振り返るとさすががコートの裾を掴んでいた。

「何？」

ビクツ「あっ……いや、その……」

すずかは震えながら朱奈を見る。

間近になつてようやく気付く。

朱奈の目は……黒い目が濁りかかっている、普段の明るさのある黒目は一切なく、暗くハイライトの無い目になっている。

それを見るだけですずかは恐怖で体が震える。何故か胸が苦しい。

「あの……行ったら、危ないです……から……だから……」

「逃げたい？」

「ツ！……」

すずかはもうこれ以上このまま朱奈が戦ったらおかしくなるんじゃないか。

そう思い今すぐここから離れたい。それしか考えられていない。

「悪いけど、俺はアイツを『殺す』までここから立ち去る気もないから、逃げたかったらユイに頼んで転移下の階に転移させてもらって。下には天上院がアリサを助けてると思うし」

「でも！朱奈さんは!?もしかしたら……死んじやうかもしれないんですよ!!」

「いや大丈夫だから。てかさつきから見ただならわかるけど全然苦戦してなかっただろ？」

「でも……だからって……朱奈さんに何かあったらどうするんですか!?」

「……」

「死なないなんて保障ないじゃないですか！もし……何かあったら「う

るせえよ」・・・ええ？」

低い声が響いた。まだ向こうと距離が開いている分この場にいる人は朱奈の声に耳を疑った。

朱奈はすずかを睨むように見る。その目はさつきよりも暗くなつて一層恐ろしく感じる。

「何？俺が死んだらすずかに何かあるの？別に何も無いでしょ。俺のやる事に文句言わないでくんない」

「・・・」

「それとも何？このまま逃げたら優姫さんを救えないじゃん。たとえ助からないかもしれないけど、可能性があるんだから俺は行く。だから邪魔すんな」

「・・・」

「はああ・・・ユイ、そこの男と優姫さん、それとすずかと一緒に転移して。ここにいるのも危ないだけだから」

「マスター・・・」

「早くして、そのままいてもじやm」

パァン！



乾いた音が響く。

朱奈の頬には叩かれた跡があり、叩いたはずかは……怒りと悲しみの籠った顔で朱奈を見る。

「……すず、か？」

「……ばか」

「え？」

「朱奈さんの……バカあああああ!!!」

ものすごい怒声がビル内に響く。

それは戦闘をしているレミリアにも聞こえ驚くようにこちらを振り向きながら、追撃してきたシャドウランスロットと対峙する。

朱奈は驚くようにさっきの冷たい目で睨んだ顔が驚いたような顔に変わる？

「す……すずか？」

「あるよー！朱奈さんが死んだら私はおかしくなるよ!!私だって……優姫さんを助けられるなら助きたいよーでも、それ以上に私は！朱奈さんが死ぬ方がすごく嫌なの!!なんで、私がこんなに胸が痛くて……」

張り裂けそうで・・・今にも壊れそうなのに・・・なんでッ！なんでそんな顔するの!?なんでそんなに自分の命を軽く見るような事するの!?私はなんでそんな朱奈さんを見てこんなに苦しくなるの!!?!?!ねえ！教えてよ!!」

「あ・・・え・・・」

それはいつもの彼女からはあり得ないような怒声と叫びだった。頭の中がぐちゃぐちゃになったすずかはただ叫ぶだけ。

その瞳には止まらないほどの涙。堪えきれず流れ続ける涙。

すずかは今なんでこんなにも苦しいのかを朱奈に八つ当たりするかのように叫ぶ

「なんで・・・なんでこんなにも・・・私は何もできないのッ!?朱奈さんが来る前も・・・来た後も・・・今も・・・全部、全部全部全部全部全部!!私は守られてばかりで!!」

「す・・・ず、か?」

「なんで！吸血鬼の・・・化け物の私は!!こんなにも・・・なんで何もできないの!!?!?!」

すずかは自分の体を抱きしめるかのように腕を体に回し膝を突き叫ぶ。

ただただ叫ぶ。

自分が何もできない。

何もしない。

ただ守られるだけのお姫様。

守られてばかりの・・・吸血鬼のお姫様・・・

「お願いだから・・・そんな顔しないでよお・・・私のこの気持ちに気づいてよお・・・」

そしてこんなにも・・・

「私の・・・私の気持ちも考えてよお!!!!」

わがままなお姫様なのだ・・・

すると突然・・・

すずかの体に温かみを感じた。

何が起きたのかは理解できない。

顔を上げたら自分の体に別の腕が体に包んでいた。

「……………ごめ、ん……………」

すずかは朱奈に抱きしめられていた・・・

「え・・・?」

「ごめん・・・ごめんつなさい・・・ごめんなさいツ・・・」

まるで、人が変わったかのように先ほどの冷たい朱奈の声が一変して、細く崩れそうな声。弱弱しい声になっていた。

「朱奈、さん?」

「ごめんなさいツ・・・僕はっ・・・僕はツ!!」

「朱奈さん・・・戻った・・・!」

「マスター・・・」

まるで人が変わった、いや戻った朱奈はすずかを抱きしめながら謝る。

ユイは見守りながら微笑み、すずかはうれしい泣きをしながら朱奈を抱きしめ返す。

「大丈夫です。私こそ・・・ごめんなさいツ・・・!」

「すずかツ・・・ああああ・・・」

互いに泣き、抱きしめあう。

それはたった数十秒であったがその時間は長く感じた。  
互いに顔を上げる。

すずかは目と頬が赤くなり、朱奈を直視できていない。  
朱奈は先ほどの濁りが消え、明るさのある黒い目に戻っている。

「・・・すずか」

「はい・・・」

「行っても・・・いいかな？」

「・・・」

すずかは黙る。

朱奈は真剣な顔ですずかを見つめながら続けて告げる。

「必ず戻る。それであいつからカードを取って優姫さんも助ける。だから」

「・・・絶対大丈夫ですか？」

「うん、絶対・・・大丈夫」

真剣に、真っ直ぐに見つめながら言い放つ。

「・・・絶対助けてくださいね」

すずかは涙目上目遣いで朱奈を見る。

その仕草にドキツとした朱奈は赤くなりながら了承する。

「う、うん・・・わかった・・・」

朱奈は立ち上がり、レミリアの方に向かう。

「あら、ずいぶんと楽しんでいたわね。私の口の中が甘い紅茶を飲んだ時と同じくらい甘くなっちゃったわよ」

「う、うっさい・・・それより、はやく終わらそう。スペカいける？」

「ええ、何かご所望かしら？」

「じゃあ一撃必殺のやつで」

「わかったわ」

朱奈とレミリアの会話が終わったタイミングでシャドウランスロットは突撃してくる。

それを散開して避ける。

『ようし、余の出番だな任せよ!』

「行くぞ・・・『夢幻召喚（インストール）』!。真名ネロ・クラウディウス」

『うむ!了解だ奏者よ!!はじめから全力で行くぞ!!』

朱奈の手に持った魔道書が開き輝きを増す。

すると朱奈の服が変化して赤い豪華な舞台衣装のような服に変わる。

「宝具開放!!」

『許可する。門を開け!独唱の幕を開けよ!!』

右手には炎のように赤い剣【原初の火（アエストウス エストウス）】を持ち。

左手に持った魔道書を閉まって、どこから取り出したかわからない赤いバラを取り出す。

「我が才を見よ!」

『万雷の喝采を聞け!』

「しかして讃えよ!」

『黄金の劇場を!!』

バラを上投、剣を地面に突き刺す。  
すると剣を中心に黄金と赤バラに包まれた劇場「ドムス・アウレア」  
に変わる。

『開け！招き蕩う黄金劇場（アエストウス・ドムス・アウレア）よ！！』

## 11話「全てを開き、全てを閉じる」

### 戦闘視点

『開け！招き蕩う黄金劇場（アエストウス・ドムス・アウレア）よ!!』  
剣を中心に周りが黄金と赤バラに包まれた劇場へと変わる。

これがネロ・クラウディウス宝具。

生前、彼女が聴衆に自らの公演を強制的に最後まで聞かせるべく、劇場の出入り口をすべて封鎖し閉じ込めたと言われている劇場。

それを魔力によって再現し、具現化させた。

その性質は魔術師の中で一番魔法に近いと言われている【固有結界】に似て非になる大魔術で展開されている間、敵とみなした者は弱体化する。

シャドウランスロットは現在の全ステータスが1から2ランク下がっている状態。

「A a a.....」

「あら、随分と派手な場所ね。目に悪いわね、此処」

『何を言うのだ！此処は余が作りし黄金劇場は余の素晴らしさと美しさを最大限引き出す素晴らしい場所なのだぞ！』

「いやネロは僕の中にいるからあまり意味はないのでは」

『そ、それは・・・ふっ、フツハツハ！例え余が奏者の中においても余の美しさは奏者を通じて引き出されておるのだ！だから問題ない！うん、問題ないのだ!!』

「.....」

『な、何故黙るのだ？奏者よ？そ、その娘は何故余を憐れむ目で見ているのだ？』

「.....レミリア、奴の動きを止める。僕たち二人でやるぞ」

「.....ええ任せたわ.....」

『無視か!?無視なのか奏者よ?!しかも二人と言ったな！余を忘れてないか?わざと忘れてないか!?!』

朱奈の中で叫んでいるネロを無視してシャドウランスロットと対



峙する。

レミリアの紅を纏った槍とシャドウランスロットの剣が交わる。朱奈はタイミングよくレミリアが離れたタイミングで襲う。

二対一の戦い、だんだんとこちらが優勢になる。

宝具による弱体化、相手が二人、相手の高い戦闘力。

当然のごとくシャドウランスロットは押されている。

「シャイニングハート！」

「Yes. ホーリーロック…… set」

「Aッ!？」

「レミリア!!」

「フフツ合わせなさい。朱奈」

シャドウランスロットは突如、両腕両足を拘束される。

それを気にレミリアはカードを取り槍を構え、その反対側で朱奈は剣を構える。

「スペルカード。神槍……」

「行くぞ。『童女謳う（ラウス・セント）……』」

「『スピア・ザ・グングニル』」

「華の帝政（クラウディウス）！」

一閃、レミリアより放たれた槍の投擲と朱奈の横一線の剣戟によりシャドウランスロットは真っ二つになる。

『余は!?余の出番はこれで終わりなのか!?終わりなのか?!?!?』

朱奈 s i d e

「これが・・・」

「へええ〜中々綺麗なカードね。スペルカードに少し似ているわね」  
いや、これスペルカードその物じゃないか?

ようやく一区切りになり、シャドウランスロットから出てきたカードを手に持つ。

そういえば終わってネロに帰ってもらった時にすごい怒っていたな・・・

なんか『ひどすぎるにもほどがあるぞ奏者よ!おこだぞ!もうおこだぞ奏者!!』とかなんとか・・・今度なにか喜びそうなものでもあげよう・・・

まあそんなのは些細な問題でしかない・・・

「とうるかさあ・・・すずかさん?」

「はっ」

「・・・そろそろ離れてくれない?」

そう問題はさすがが先ほどから腕に抱きついていてのこと。

正直恥ずかしい・・・なぜこうなった。

現在ユイは優姫さんを診察中、レミリアは誘拐犯と一緒に近くにいるが、こちらをニヤニヤとみている。

つうか誘拐犯。何平然レミリアと会話しながらくつろいでいるんだよ。お前一応犯罪者だろ。

それとレミリア、お前人間は余りすぎじゃないんじゃないのか？

「おい誘拐犯。この後お前は どうするんだ？」

「どうするの何も・・・仕事は途中で破棄しても誘拐したことは事実だ。素直に檻の中で過ごすさ」

「・・・そうか・・・」

「嬢ちゃんにも悪いことしたな・・・許さなくても構わないから言わせてくれ・・・すまなかつた」

この誘拐犯はいい奴なのか悪い奴なのかわからないな・・・

「すずかそろそろ「いやです♪」で、でも・・・」

「朱奈さん・・・だめ・・・ですか・・・？」

・・・上目遣いで泣きそうな顔。

それ、ずるいと思います・・・

とりあえず、すずかを説得して離れてもらい解析が済んだユイに説明を聞いた所どうにかなるらしい。

と言っても確実ではない、失敗すれば生き返られない。

「でもこれしかないよね・・・」

「そうです。彼女の心がこのカードに入っているのならマスターのキーブレードしかありません」

「それだよね・・・」

そう、キーブレード。

このデバイスは【開いたり、閉じたりすることができる】力を持っている。

「それしかありません。マスターお願いします」

「わかった。キーブレード、セットアップ」

ぼくはバリアジャケットとキーブレードを持つ。

キーブレードはウォード錠型の剣【キングダムチェーン】を手にする。

「それじゃあ・・・始めるよ」

剣を優姫さんに向ける。

キーブレードの先端から光が発せられ一直線に優姫さんの胸に当たる。

ガチャリ

音が鳴り、優姫さんの胸の前に光が広がる。

「マスター。これを」

ユイからカードを貰い優姫さんに近づく。

カードを光に向ける。するとカードは自分の手から離れ光に向かっていく。

「あとは閉じるだけ・・・」

もう一度キーブレードを向ける。

ガチャリ

優姫さんから光が消え地面に横になる。

僕は優姫さんを支える。

「朱奈さんどうですか？」

「・・・わからない」

カードは無事に優姫さんの中に入った。

アナライズで確認してもそれはわかる。

心臓も動いていない

・・・

.....

「ユイ……」

「……」

だめだったか……

仕方ない、確信もなかったんだ。

こうなってもしようが「っん……」ツ!?

「い、今」

「マスター!」

アナライズで再度確認。

心臓機能再開。

体温上昇。

全臓器機能再開。

蘇生完了

「……よかった」

とりあえず一安心だな

あとは……

「鍵よ開け。かの者に再生の加護を……癒しよ（ケアルラ）」

優姫さんの体が緑色の光に包まれる。

これでもう大丈夫だろう。

「……来てくれ、ハサン」

「ツハ、アルジヨ」

突如、現れた黒い姿の男、ハサンが現れる。

彼は先ほどまで搜索を手伝ってくれた一人である。

「この子を家に……ばれない……ようにね……」

「ツハ、シヨウチイタシマシタ」

ハサンに優姫さんを任せまとも消える。

「朱奈さん今の人は？」

「あとで教える・・・それよりそろそ・・・」

立とうとした途端、視界が揺らぐ。

急に暗くなり、意識が薄れていく。

すずか side

優姫さんが黒い男の人に抱えて消えたあと。

朱奈さんはまるで糸が切れたかのように倒れる。

「朱奈さん!?!」

「マスター!?!」

倒れた朱奈さんの方に向かう。

ユイさんが朱奈さんの上半身を起こして手から緑色の光をだす

「どうやら魔力切れみたいね」

「魔力・・・切れ？」

私は隣に来た女の人の、蝙蝠の羽みたいな者を持つ人の言葉に首を傾げた。

「ええ、魔力を使いすぎて気絶したのよ。まったく無茶するわね・・・」  
心配しているかのような顔をしながら女の人は言う。

見た目は私と変わらないように見えるけど、やはり大人びている。  
いや、大人びているというより、すごく年上のように感じる。

「私は帰るわ、あとはあなたたちでどうにかしなさい」

「あ、あの・・・」

「貴方は・・・また今度話しましょう♪」  
と微笑みながら女の人は消える。

「これからどうすれば」「すずか！」「……この声は！  
「お姉ちゃん！」  
「すずか！」

そこに来たのは私のお姉ちゃんと恭也さんが居た。

## 12話 「月村邸、話をし☆よ☆う」

朱奈 s i d e

皆さんこんにちはあなたの隣に這い寄る魔法使い朱奈です！

……うん、無理にテンション上げてもあれだね……

あの後どうやらすずかの姉の月村忍さんと恭也さんが来たらしい。

でも僕はユイの転移魔法を使って逃げたらしく、気づいたら家のベッドにいました。

帰って来たスグにめちゃくちや驚かれて色々な質問攻めを食らったが……まあ誤魔化しながら答えたようん。

その次の日、学校に言った時にまず天上院と会って屋上で話をした。

他は授業中の為天上院に話せるだけ話、とりあえず自分が転生者でどういった立ち位置でいるのかを伝え、今後の自分の動きを断片的に言った。

どうやら天上院は了承して、愛川以外の奴には伝えないで、愛川にも口止めするようにしてくれるらしい。

なんだ天上院イヤツだな、いつも変な事しかしないのに……  
そう言えば天上院が今日の教室でアリサに絡まれたらしい。

詳しくは分からんが弄られたとか何とか。

そのせいで疲れているらしく、アリサも反省して今日弁当をくれるとか何とか……

天上院も大変だな。何せ「べ、別にあんたのために作ったわけじゃないんだからね！」とか言われたとか、大変だな……天上院……

因みに自分は教室にすずかが来ました。

え？何言われたって？

教室に来て「きよ、今日の放課後わわ、私の家に……き、来てく  
ださい！」とか大声で言ってきたし……



何か顔が赤く恥ずかしそうに言ってきたけど、恥ずかしいならあんな所で大声で言わなくても・・・

そのせいで宗二郎と七海には質問攻めを食らって言いくるめが大変だったよまったく・・・

まあ、ほとんど昨日の事件は恭也さんと天上院が何とかしてもらって、僕は数人木刀で倒したとか言っといいた。

そしたら「流石、人外(笑)」とか言われた。

あの二人今度黒板に相合傘と翠屋でイチヤイチャしてた写真を貼ってやるツ・・・

・・・という事で・・・

「それじゃあ・・・準備はいいか？朱奈」

「は、はい・・・」

「・・・・・・・・」トントントントン

はい、只今月村邸に来ております・・・

目の前では恭也さんと先ほどから足音を鳴らしている月村の姉の忍さん

僕の右には天上院、その隣にアリサ

そして・・・

「・・・・・・・・」ギョッ

「・・・あ、あの・・・すずか？」(；・ω・)

左にはさすががいる・・・だけならいいのだが何故か腕に抱きついて  
います・・・

え？なんで??

とうか忍さんすごく睨んでくる。

天上院はニヤニヤしてるし、アリサは驚いた顔をしている。

天上院には後で焰火扇。

「じゃあまずは私たち月村の事について説明させてもらおうね」

あ、僕のこの状況スルー何ですね・・・

話からすると僕たちは月村が夜の一族と言われる吸血鬼であるという事。

正直言つて前から知ってました・・・なんて言えないからなくどうしよう・・・

「という事で貴方たちには二つの選択があるわ・・・一つは月村の事は綺麗に忘れる事、二つ目は盟約を結んで生涯を月村と共に歩むかよ」

・・・

しばしの沈黙が訪れる。

それはそうだ急に忘れるか、共に生きるかを決めなければならないからだ

そしてその沈黙を破つたのは以外にもまずかだった。

「アリサちゃんごめんね・・・今まで黙ってて・・・でも、言ったら気持ち悪がられると思ったの・・・本当にごめんなさい・・・」

恐らくすずかはこの沈黙は悪い方だと思っていたのだろう

だが・・・

「・・・ばかねえ本当に・・・」

「ア、アリサちゃん」

「はああゝ・・・そんなんで私が親友のすずかを嫌いになるわけないじゃない・・・もうちよつと早く言ってほしかったけど・・・まあ、素直に言ってくれたし別にいいわよ」

アリサは溜息を吐きながらそういった。

それでもまだすずかの顔からは不安の顔が見える。

「で、でも私吸血鬼だよ？ば・・・化け物だよ？」

月村・・・それは・・・

「おい月村それは違うぞ」

「当麻・・・」

ここに来て天上院が口を開く。

そうだ天上院行ってやれ！

「月村・・・そもそも吸血鬼というのは化け物ではなく妖怪の類に入り、お前の言う化け物は理性を持たない、本能で動く奴を化け物という。それに今までのすずかの日常から察するに人間よりの吸血鬼と言うのはよくわかる。なぜなら吸血鬼は日光を浴びれないはずなのに真昼から外に出ている。それとナイフとフォークがこの家に普通にあるという事は普段からそれを使っている。吸血鬼は銀製の物も弱点のはずだからそれもないと見た。まだ聖水だとか十字架、ニンクに弱いかはわからないがそれでも結果的にみると・・・」

・・・

天上院よ・・・まずはそこじゃないだろ・・・

周り見てみるよ。

急に語りだしたせいで月村姉妹と恭也さんは驚愕の顔してるぞ

アリサは・・・ん？

「であるからしてグホオッ?!?!」

アリサの腹パンが命中!

天上院が倒れる!

「だれもあんたの説明を聞きたいなんて言っていないでしょうが!」

「いやだから吸血鬼と言うのは化け物ではなくよ」「チエストオオオオ!  
!」イヤアアアッ!」

今度は僕の蹴りが命中!

天上院は気絶した!

流石に黙らせないと・・・

「はああ・・・すずか」

「は、はい・・・」

とりあえず気絶させた天上院は放置ですずかの方を向く

「朱奈さん・・・私は・・・」

「まあ天上院の言う通り、吸血鬼だから化け物って言うのはおかしいよ」

「でも私は・・・皆を騙して・・・」

「僕はさすがに化け物だと思わないし、だからと言って「君は僕たちと同じ人間だ!」なんて軽い言葉を言うつもりもないよ。それにだまして何ていないよ。単純に言えなかつたんでしょ。人の隠し事の一つや二つ位友達なら許容範囲じゃないかな?」

そもそも自分は人間以外にもなれるからなあ・・・

というか魔導書を使えば何にもなれるから・・・

前なんてお試して獣人化した姿を咲夜トリニスに見せたら・・・やばい、悪寒が・・・

「でも……うつ……」

すずかは嗚咽を混じりながら僕の服を掴み頭を僕の胸に当てる。  
僕はただただ頭を撫でながら言葉が続ける

「すずかは……どうしたい?」

「うつ……ふえ……?」

「すずかが忘れてほしいなら忘れる。これからも一緒にいて欲しいならそうする。どうしたくて、どうして欲しいのか、それを決めるのはすずかだと思うんだ」

「私が……」

「だって、僕は今後もすずかとは一緒にいたいよ。多分それはスグやアリサ、なのはに七海、宗二郎や一誠とかいろんな人がそう思っていると。でも、すずかが嫌なのに一緒にいたいなんて言えないから……すずかが自分がそうしたいと思っっている方でいいんじゃないかな」

それに僕としては同じ本好きだから話し相手がいるのもやだし、そもそもすずかみたいな女の子にお願いされたら断れないじゃん。普段から優しく、物静かで、お淑やかで、何より超が付くほどの可愛い美少女にお願いされたら迷いなく承諾するでしょ」

「ツ!?~~~~~~~~」

「ん?どうしたのすずか?」

「あの・・・姉の目の前で妹口説くのやめてもらえないかしら・・・」

「えっ?.....ツ?!?!」

え?嘘、声で出てた?

やばい・・・恥ずかし死にそう・・・

穴があつたら埋まりたい・・・

そのまま土を入れて生き埋めしてくれ・・・

「と、とにかく!すずかはどうしたい?」

は、話をそらすためにもすずかに訪ねる。

まだ顔が赤く俯いていて良く見えない。

そしてアリサさんや横でにやにやしながら見ないでくれ、死にたくなる・・・

「あう.....い.....いつ.....に」

「ん?」

「い、一緒に.....これからも.....一緒に.....アリサちゃんや.....なのはちゃんも.....朱奈さん共一緒に.....いたいです.....」

だんだん顔を上げて真っ赤に恥ずかしそうな顔をしながら告げる。

「じゃ、じゃあ.....そういう事で二つ目の方をお願いします.....」

「私も二つ目をお願いします。あ、あとこいつもお願いします」グイッ

「お、お願いします.....」グツタリ（ ; 皿、 ）

「え、ええ.....わかったわ.....」

とりあえず皆二つ目の選択しを選び、生涯月村に関わる事となった。

「それにしても、まさか朱奈さんがすずかの事を口説くなんてね……ニッシッシ♪」

「ちよつとアリサさん。僕は口説いてません。それとそんな嫌な笑い方しないで、怖い……」

という事で次に昨日の事についての話になった。

もちろんその中には僕と天上院が使っていた力の事についての説明も兼ねている。

すずかやアリサにも見られ、恭也さんは知らなかったけど、すずかが忍さんに言ったらしいので誤魔化しも効かないだろう……

「まず、昨日の状況を説明してもらえるか？」

「はい、わかりました……」

「天上院、だったか？お前も説明をしてもらおうぞ」

「わかっている、ます」

「あんた、ほんと敬語駄目ね……」

少年達説明中

「……」

「と、気絶する前はこんな感じでした・・・」

「俺の方もこんな感じだ、です・・・」

恭也さんたちには犯人達を倒した後、白衣の男が現れて戦い、その後その男が召喚した鎧の男と戦った事も言った。

それと魔法の存在、そしてそれを使う僕たちの事を伝えた。

魔法の事はアリサとすずかに見られたからすべて言った。

でも、転生者であることは流石に隠した。

で、一応信じてもらうためにデバイスを見せ、目の前でバリアジャケットを展開、スフィアを作って信じてもらった。

「信じられないけど、目の前でそれを見せられるとね・・・」

「それにしても魔法か・・・それは誰でもできるのか?」

「いや、魔力を持たないと使うことはできない、です。魔力を持つものは必然的にリンカーコアがあり、それとデバイスが合わさって魔法を使う、です・・・」

「デバイスを持たなくても使えることも可能ですが、長年の鍛錬と魔力の消費量が多いの

で大抵の魔導師はデバイスを持ちます」

と言ってデバイスのキーブレードを見せる。

「それと魔力だけではなく霊力と妖力とかもあり、霊力は必ず人にわずかながら存在し、妖力も妖怪など人間じゃない人種や人じゃない者が持つ力です」

「魔力は?それは誰にでもあるのかしら?」

「いえ人によって違います。因みに天上院は魔力A?位あって僕はリミッター外すとS位あ

ります。普通の魔導師は大抵CからB位でAから上は上位の魔導師です」

「そうか・・・うん?朱奈、お前にはそれはどうやってわかるんだ?」  
「自分には解析魔法を持っているのでわかります。もちろんそれを使わないとわからないのですが・・・」

まあアナライズはそれ以上に色々と調べることができるのだけ



ど・・・

「じゃあ・・・俺とかは？」

あつやっぱり気になりますよね・・・

「ええくとちよつと待つてください・・・」

「おい、いいのか？そんな簡単に教えて」

天上院が苦虫を噛んだ顔で俺に訪ねる

「いや寧ろここまで来て嘘言えないでしょ。幸い他の連中にはばれな  
いように此処の周りは内の連中が守っているから大丈夫だよ」

「そうだとしても言い過ぎだと思うぞ。もうちよつと誤魔化してとか  
だな・・・」

「よく恭也さんの前で言えるな・・・そもそもその誤魔化しができるか  
？ポーカーフェイスで相手に読まれないよう、ブラフ、ハツタリ、誘  
導とかそこいらの経験がないのにやっても意味がない。それと・・・  
恭也さんにそんなの通用しないし、ばれたら殺されるよ？」

「・・・すまん、今のは聞かなかったことにしてくれ」

「おい、俺はそこまでの事はしないぞ」

ハハッ何を言ってるんですか恭也さんは面白いこと言うな

「解析終わりました。それとすずかとアリサ、忍さんも」

「「えっ!？」」

「貴様、いつの間に・・・」

「で、どうだった」

いや四人共そんな期待の目で見ないでくださいよ。

ええ〜つと・・・

「まず恭也さんと忍さんは・・・魔力がありません、それと霊力、妖力  
も低いです」

「そうか・・・」

「なんだ、残念ね・・・」

いや、恭也さんはそれ以上強くならなくていいですよ。剣術だけで

人外でさらに魔力とか霊力とか持ったらもうチーターですから・・・

「アリサは・・・魔力AA?・・・それと霊力B?」

「えっ!？」

「すずかは・・・魔力A?・・・それと妖力A」

「ふえっ?」

おお、二人共驚いてる。

すずかなんてふえって・・・

これはすごいな・・・それに・・・

「二人とも魔力変換資質持ちでアリサは炎熱、すずかは氷結持ち・・・」

「貴様、それは本当か!？」

「本当のだよ、二人共魔法才能あり、デバイスさえあれば魔法が使えると思う・・・」

本当にこんな才能があるなんて・・・

これで三人組魔法少女戦隊の出来上がりだね☆

まあ、デバイスがあればの話なんだけど（フラグ）

「そう・・・デバイスねえ・・・」

あつ、アリサさんがニヤリと笑っている。

嫌な予感しかない・・・

「ちよつとすずか。耳を貸しなさい♪」

「え?・・・うん・・・えっ・・・む、無理だよ!」

「いいからやってみなさい。絶対成功するわよ♪」

「うっううっ……」

い、いや本当に何する気なんですかアリサさんや……  
と、ここでアリサさんがこっちに来た。  
凄くいい笑顔で……

「朱奈さん♪」

「な、なんでしよう……」

「そのデバイスって言うのは作れるんですか？」

「い、いや僕は作れない「ん？確かアナライズと言うのを使えば解析だけでなく。デバイスの作成もできるのと言ってなかったか？」天上院  
!？」

まさかここに来て刺客が現るとは思わなかった。

てか、天上院。何故言っただし……あつ、アリサの方見て震えている。

……脅されたんだね天上院……

「そういう事であたしとすずかの分……お願いね♪」

「いやいやいや!?!?だいたい作るのにどれだけ時間がかかると思ってるのさー」

「しようがないわね……すずか」

「へ?」

何故にそこですずか？

と急に背中から感触を感じる。

振り返ると……すずかが抱き着いていた……

「あの……すずかさん?」

「……あ……」

「え?な、何?」

「あ……わ、私とアリサちゃんの……作って……欲しいな……  
／＼／＼」 上目十赤面  
「……………」

よし……………三日で終わらせるか……………

### 13話 「日課とこれから」

朱奈 s i d e

「はあ〜〜．．．．．」

皆さんどうも、只今寝不足の朱奈です．．．．．  
さて、すずかとアリサに頼まれて二日経ちました、デバイス制作を行っているのですが．．．．．正直言ってキツイです。

いや、家にリニスさんというデバイス製作に詳しい方がいるから寧ろ順調と言うべきか．．．．．

現在、AIを組み込み、デバイスの外形、中の演算処理能力もかなりのハイスペックな仕上がりです。

おそらく、なのはの持っていたレイジングハートに負けなくらいの性能はあると思う。

魔力変換資質の非殺傷設定も仕上がり後は本人に渡して実際に使ってもらおう事でしょうやく終わるのだが．．．．．

正直、渡していいのかわからない。

まあ．．．．．2人のことだから間違った使い方はしないと思うのだが、それでも仮にも魔力変換資質持ち。

素質を持つても制御出来ないと暴走して、周りに被害が及ぶ可能性があるし本人にも危険が生じる。

実際、魔力変換資質は制御するのは難しい、何度も練習してようやくモノに出来るのだが2人は魔法に浅い。

周りには魔力変換資質がわんさかいて最初は気にしてなかったがそれは転生者だから元々制御できるように神様が調整している事で2人はそういう理由にはいかない．．．．．

「本当に渡してもいいのかな〜．．．．．」

正直、二人がデバイス持つことはかなりメリットがある。

二人がデバイス持ち、魔法を手にする事は自衛目的にも使えるからだ。

二人は色んな意味で有名で、お金持ち、美少女、お嬢様。

唯でさえ見た目がアレだから周りの危ない紳士達？とか、前回みたいな誘拐なども今後もしきるかもわからない。

デバイスを持ってくれる事で自衛、身を守る方法を一つでも出来た方が良いだろう。

もう一つはジュエルシード。

リニス曰く、今回の現在、ジュエルシード以外にも何らかの力が干渉しているらしい。

その証拠にあの腕と足が宙に浮いてた鎧の化け物……

それと誘拐事件の時に起きてたらしい神社でのジュエルシードの捕獲の時にもイレギュラーが起きたらしい。

リニスはあの異形はジュエルシードとは別に現れるナニカだと……

そういった事もあるから2人にデバイスを持ってもいいと思うのだが……

「はああく……」(、ω、)

「まくた溜息ついとるん？」

「だってなあ……色々と悩みがあつて、それは他の人に余り言えない物だし……眠いし……巻き込みたくないし……眠いし……かと言ってまた誘拐とかの事件が起きたらやだし……眠いし……」

「……これは重症やなあ」

と現在、僕は図書館の机にだらけながら同じ図書館の虫となっている八神はやたと話をしている。

もちろんの事だが彼女には魔法の事やデバイス製作については話していない。

かなり変換しながら話して、デバイスを護身物、友人二人が誘拐事件に巻き込まれたとかしか言っていない。

……普通そんな事は図書館で話す事じゃあないんだけどね。でも今日は人が少ないみたいで図書館にいるのは僕とはやてだけ。

後は図書館の管理人だけど受付で寝てる。

よくクビにならないなコイツ……

「でもどうやって作ったん？普通護身物って買うものやないの？」

「スタンガンもん小学生に持たせないでしょ……まあそのスタンガンの小型で装飾品みたいにした奴と言うべきかな……作り方はまあ……文学少女のはやてには難しいよ」

「誰が河川敷でシチュエーションを楽しむ少女や。それとそう簡単にスタンガン作れる人いないやろ……」

「何を言うか。世の中釘打ち機と木の板とガムテープでネイルガン作れる人がいるんだぞ」

「それは漫画の世界やろ！」

とかまあ……そんな会話が続いていく。

「まあ、作って欲しいって言われたんなら渡してええんちゃう？それで問題が起きたら自己責任やで。何なら契約書作って一切の責任を持たないようすればいいんちゃう？」

「……腹黒たぬき」ボソツ

「なんか言ったん？」（ ^ ω ^ ）ニコツ

「いえ、ナンニモ」

はやてさんのものすごい笑顔に顔を晒す。

怖い、はやてさん超怖い……

「片言何やけど……まあ、そんな事より朱奈君そろそろ頼むわ♪」

「はいはい」

「はい、は一回や」

「はい」

「伸ばさんでええー！」

「へいー！（\*ゝω\*）ノ」

「はいー！」

そんなやり取りをしながら図書館を出る。

今日もはやての買い物荷物持ちと車椅子を押す。  
図書館で会うといつもこんな感じで最近では日課に近い。

「そう言えば最近どうなの？新しくお世話になってる人とは」

「それが凄いいんよ。咲夜さん、何でも家事こなすし、それも全部私がちよつと目を離れた隙に全部終わってるもん。お手伝いしようにもなんも出来んから最近暇やなあ。あつても料理の時はよく一緒にやってるで」

「そ、そうですか……」

そう、最近咲夜にははやての家で身の回りのお世話を任せている。正直、家にはリニスが新しくお世話役がいるので前々から忙しそうだったはやての方に行ってもらおうよう頼んだ。

まあ……それ以外にもあるんだが……

てか咲夜さん？能力めっちゃ使ってるじゃないですか……

咲夜さんならバレるようなミスしないと思うんだがちよつと不安。

「ん、どうしたん？」

「いや、なんでも。あつこの挽き肉安いよ。」

「おお、ホントや！なら今日はハンバーグやな!!」

「……食べに行ってもいい？」

「ふふっしょうがないなくええよ。でも家の方は大丈夫なん？」

「今電話してOK貰った」(——ω——) b

「はや!？」

~~~~~



「はい！という事で第5回幻英の会議始めます」

「いや、ご主人様。すぐサラツと始まりましたが何ですコレ？」

所変わって夜、僕は守護騎士とリニスを読んで部屋に集まってもらっている。

ユイは今、幻英の書とシャイニングハートの調整をしている。

いやあはやたと咲夜さんが作ったハンバーグは凄く美味しかった。

何あれ、そこいらのレストランのハンバーグよりも全然美味しい。

なんかソースも市販物じゃなくて作ってたし、高級ホテルの夕食かよと思ったわ……

「いやね、今の現状の報告と今後の行動を話そうと思ってるんだよ、特にタマモとアルトリアは現在のジュエルシード搜索の状況を聞かないと行けないしね。アリスとリニスは家とその周り、咲夜さんはやてのアレについて聞かないといけないしね」

「それはいいのだけど、此処で大丈夫なの？すぐ近くの部屋に直葉の部屋があるわよ」

とアリスが本を読みながら聞いてくる。

「大丈夫。防音はしっかりしてるし、誰か入ってきてても今皆にはアルトリアの風王結界で見えないし、咲夜の時止めがあるからね。てか、アルトリアはいつの間に風王結界の規模が大きくなってるんですか？あれって剣を隠す事しか出来なかったですよね。」

「そこはあれです。毎日鍛錬をしたら自然と……」

「あなた一応英霊なのに成長するのですか？」

「……ねえ、二人共ちゃんとジュエルシードの搜索してるんだよね？」

「大丈夫ですよご主人様。残りのジュエルシードは既に分かっています。誘拐事件の時に神社に現れた犬型のジュエルシード、今日現れたのは公園の遊具。どちらも難なく封印していたみたいです」

「それと同じくイレギュラーの方も起きてみたいですよ。見た目は余り詳しくは言えないのですが両方共、巨大な人型で、神社の方は真つ

黒で公園では銀？に近い白い奴でした」

「どちらも苦戦していた見たいですがあの時と違って難なく倒してました。何やらご主人様の言っていた人数とは違って、茶色のツインテールの子と直葉様、茶髪の赤い籠手付きの男、サムライボーイとガール。後はイタチの皮を被った奴と聞いてましたが、それ以外にも銀髪でうるさい、何処ぞのE☆MI☆YAさんみたいに剣をポンポンだすバカみたいな人と黒髪の「わたし、お嬢様です☆」感をいかにも漂わせた猫被りしてそうな女。最後に金髪の胡散臭い奴もいて何ともカオスな状況でした。」

「うん、ちよっと待って」

なのはとスグ、一誠は分かったただサムライボーイとガールは宗次郎とななみかな？ユーノに関しては悪意ある言い方だし、銀髪のバカは和真だろ、黒髪は愛川さんなのは分かったけどこれも言い方悪いな……で、最後は天野少年か……うん

「行かなくて良かった……」

「ほんとです。何ですかアレ！あのカオス！特に銀髪と金髪！会った瞬間即NA☆GU☆RI☆A☆Iとか何処のバーサーカーでやがりますか!?!つうか金髪の方なんて金色の波紋を周りに出してましたし、あれ完全に英雄王でしたよ！本人いたら即ギルティーだぞアレ!!」  
「落ち着いて下さいキャスター。朱奈様、とりあえず次は私とアリスの報告をさせて頂いてもいいでしょうか？」

「う、うんお願い」

「では……私の方は今の所安全です。はやて様と一緒に話もしていますし、お料理の方も手伝って下さるので。正直、小学生があそこまで家事をこなせるとは思いませんでした。それと……やはり獣が二匹が私にはやて様に関わるなど言って来ましたので、とりあえずご退場頂きました。最近は見かけなくなつたので今の所問題あり

ません」

「次は私、家の方は問題ないわ、それとその周辺も。一つ気になるのは最近近くの商店街に金髪の女の子と黒髪に茶色の目をした男の子がいたのだけど、二人共それなりに魔力があるのよ。それと金髪の女の子はリニスと言っていた女の子にとてもよく似てたわ」

2人の方は問題無さそう……でもアリスの言っていた2人は気になるな……

「フェイトが此処に……それよりも男の方は？どういった感じでしたか？」ズイツ

「え？あ、えくと……普通？」

「どう普通でした？大丈夫そうですか？私は今や朱奈の従者ではありませんがやはり心配です！問題ないですか？何なら消しに行きますか？よし、イキマシヨウ！」

アリスはリニスの変化にかなりドン引きしている。

タマモとアルトリアに止めてもらって……

「とりあえずはやてはの方は咲夜にこのままお願いするとして……タマモはスグを見ていてあげて。正直、不安しかない……。アルトリアは別の新しい事をお願いしたい。アリスはそのまま家と周囲の状況把握をお願い。で、リニスは僕と行動。宜しくね」

「かしこまりました朱奈様」

「わかりましたマスター」

「いいわ、私もまだ色々と見てみたいしね。出来れば……魔理沙辺りをと行きたいのだけど……いいかしら？」

「うん？いいよ、その時は僕に言ってね」

「私もわかりました。待ってて下さいフェイト……朱奈とフェイトに這い寄る無視を私のプラズマセイバーで……」ブツブツ  
うん皆納得してくれそうだな。

リニスから後半、不吉な声が聞こえたが僕は知らないよ。  
ホントウダヨ

「じゃあそういう事で「ちよつと待って下さい！ストップ・プリーズ  
!!」

そう待ったをかけるタマモ。

そう言えばタマモだけ了承してなかった。

「ご主人様、今回ばかりはその内容に異議を唱えます！正直に言いますと……あの状況にまた立ち寄りたくねーです！スグ様のストーリーキング……元より護衛はいいとして、それをするという事はまたあの混沌空間に私もINしなければなりませんよね!?こればかりはNO!ていうか……アルトリアさんが適任じゃないですか？何で私何ですか!？」

「いやだつてタマモは狐になれるから怪しまれないで行けるかなと……じゃあタマモにアルトリアの内容を任せる？アルトリアは大丈夫?」

「私は問題ありません。一応確認ですが……もしもスグハに危険が及んだら、守護と敵の排除。それで問題ないですか?」

「うん、ちゃんと顔は隠しといてね」

「わかりました。サーヴァントセイバー。アルトリア・ペンドラゴンがマスターの命に従い、スグハの護衛を」

うん、アルトリアは特に文句を言わず了承してくれた。

「いやあアルトリアさんありがとうございます！正直、戦闘は不向きなので助かります。という事でご主人様。私の別内容の説明プリーズ☆。出来ればご主人様ご身の回りのお世話とか！此処に来て良妻巫女の見せ所。最近余り登場の無かった私にも遂にヒロインの座がキターー!」

「お願いします。じゃあタマモそういう事で……やって欲しい事

を言うね」

「お願いします！お願いされます！ご指名とあらば即☆参☆上!!あな  
たの隣に現る良妻！玉藻の前にぜひご命令を！」

「じゃあ……咲夜みたいに優姫 ユウナさんの所に行って貰って  
もいい？」

「……はい？」

### 13. 5話「朱奈の忙しい休日」

朱奈 s i d e

日曜日の朝。

本来僕はこの休止は余り激しい運動はせずのんびりとした時間を過ごすはずだった……

そうはずだったんですよ……

それでは前回までの話をしよう☆

前回(?)の幻英の会議を終え(あの後タマモが不機嫌になり、ご機嫌取りの為に一緒に寝てあげたり、もふってあげたり、頭撫でてあげたり、モフってあげたり、ハグを要求されたので抱きしめたり、MOFUったりと色々やってようやく許してくれ)た翌日、月村家に行きデバイスをアリサとすずかに渡した。説明と注意事項を言って、試しに使ってもらう為に忍さんに用意してもらった地下試験場で運用実験をした。結果としては問題なし、但し二人共魔力は使えるが互いに霊力、妖力が上手く使えない様だった。

……んで終わったあと帰ろうとしたらずかから日曜日の予定を聞かれた。

まあ、用事がないと言ったのですからその日に土郎さんがコーチをしているサッカーの試合があるから見に行かないかと誘われたのです。

いや、見に行くなら別にいいと思っただんですよ。

それ位ならと……思っただが……

何故か参加する羽目になってしまった……

いや普通に応援してたんですよ。

応援に来た僕とすずかとアリサ、それとアリサが呼んだ天上院となのは、なのはと一緒に来たななみと一誠で応援していた。因みに宗二郎は選手として参加して、スグは今日は用事があつて行けないそうだ。

試合は……まあ、一言に言うならば……普通じゃなかった。迫力あるとかそんなレベルじゃない……普通小学生がする動きじゃないよアレ……

ていうか士郎さんのチームの何人かナンバ走りしてたよ。普通、小学生があんな動きしないし……なんで敵のチームも高校サッカー並みの動きをしてるんですか。

まあそれでも見てるだけだったし、やっぱりこう迫力ある試合だと面白いし、応援する側としてもとても見物しがいがあるからね。

知り合いもいたし、とても面白かったよ……前半は……

そう、前半の最後辺りで士郎さんのチームから怪我人が出た。

それだけならまだいいですよ……問題は、今日は控えがいないんだそうだ……

いや、なんでだよ。今日に限って風邪とか骨折とか腹痛とか……

ちょうど前半も終了してハーフタイムどうするかとなった。

まあ……こうなったらわかるでしょ？

そう、士郎さんのチーム全員が僕と一誠、天上院に視線が浴びた。

い、いやね最初は抵抗したんですよ。

サッカーやったことは無いとかルール知らないとか。

後、一誠か天井院を生贄に捧げようとも考えたのだが……

三人娘が黙って無かったんですよ……

何故かすずかは僕に、アリサは天井院に、なのはは一誠に出てほしいと言ってきたのだ。

流石に3人は……という話になったのだが士郎さんが

「……それじゃあそれぞれに推薦した三人がジャンケンをして、勝った1人に頼んでも良いかな？」

……と提案してきたのだ。

てか、僕達に拒否権ないんですね……  
そして何故かやる気になる三人娘。

んでまあ……ジャンケンですすかが勝ったので何故か僕が参加する事になりました……

あの時、ジャンケンをするすずかの顔はやばかった……  
何かって……笑顔なのに目が笑ってなかったから……

なのはとアリサを見る目が明らかに目で脅しているんですよ。

何でそんなに僕に出てほしいのかと聞くと……

「朱奈さんなら絶対勝ってくれるからです！……ダメ、でしたか？」

と言われてしまった……

いやねすずかさんやダメとは言っていないからそんな上目遣いで聞かないで貰いませんか？最近そればかり使ってずるいですよ？

まあ、そんな感じで僕がやる事になった。

ポジションはFW。とにかく前に行ってシュートしろだそうだ。

とりあえず宗次郎からドンマイWと笑いながら肩に手を置いてきた。

お前のこの試合終わったら幻明窩食らわすぞ

まあ、そんな事はさておきハーフタイムが終わってフィールドに行こうとした時に相手チームから声が聞こえた。

なにやら「爆発しろ！」とか「あっちだけずるい！」とか……



いや知らんがな……

んで後半の試合のホイッスルが鳴り、相手ボールから試合が始まったのだが……

始まったら始まったで応援席がうるさい……

アリサが前行けどかさつさと点を入れろだとか言ってきて。

ななみとなのははまあ、普通だったよ……ななみの「早く点入れなさいよ、人外」と言ってきたのは忘れない……フィールドで宗二郎に笑われたし、ほんと後で覚えとけよ……

すずかはすごい期待の眼差しで見えたんでこれはこれでキツイ。

とここで相手ディフェンスがこちらに向かって文句を言ってきた。

曰く、素人が入ってくるじゃねえとの事、まあそれだけならいいんですよ。

その後そいつがすずかの事を見る目が無いだの男のセンスがないだの言ってきた。

まあさあ……流石にイラつとききましたよ……

僕の文句ならまだ見逃したけど知り合いを目の前で馬鹿にしてきたからね。

まあその結果……

「……まさかハットトリックするなんてね……」

「しかも残り時間ずっとボールキープして……相手チーム涙目で追っかけてたわよ」

「なんか……すごくかわいそうだったの……」

「やっぱり朱奈さん出して正解でしたね♪」

ななみ達に引かれるくらいやりすぎてしまった。／＼(´o´)／ナ  
ンテコツタイ

唯一、すずかだけが僕を褒めたのだが喜び過ぎでは？

凄い喜んで貰えるのは嬉しいんだが、なんだろう・・・自分の  
何か（人間らしさ）を失った気がする・・・

「流石だよ朱奈w俺にできないことを平然とやってのけるw」

「宗二郎少し黙れ。大体、そっちだって一度もボール取られなかった  
じゃん」

「いや、俺からしてみたら二人共おかしかったですからね」

うっさいぞー誠。お前には黒天風を食らわすぞ